

K. R. Popper と図書館情報学

－反証可能性、開かれた社会、客観的知識－

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2015 年 3 月

岡部晋典



Sir Karl Popper の墓 48°10'33.5"N 16°17'31.4"E

(2012.09.19 撮影)

凡例

「 」は原文中の引用や強調すべき特有の概念の初出を示す

『 』は書名・雑誌名を示す

傍点は強調を示す（引用部分は原文に従う）

原文ママの箇所については[sic]を付与する

各章の末尾に脚注を記す

人名は基本的に原語表記を行う。ただしギリシャ時代の名前は読みが困難であるのでカタカナで記す。また Popper を除き人名を冠した名詞については、カタカナ表記を行う。

ex. Popper、プラトン、Popper 理論、ニュートン力学

専門用語の扱いについては通例の用法に従った

ex. verification →○検証 ×立証 ×実証 ×検証

【論文題目】

K. R. Popper と図書館情報学—反証可能性、開かれた社会、客観的知識—

【Abstract】

本論文では科学哲学者 Karl Raimund Popper (1902–1994) の提唱した諸理論と図書館情報学のかかわりについて論じた。

1980 年代において、図書館情報学の領域では Popper が後期に提唱した「客観的知識論」を自らの基礎理論として定位させようという試みがなされてきた。Popper によると、客観的知識論とは、物理的世界と主観的世界の二つの世界に加えて、「記録物によって成立する世界」を追加したものである。Popper は物理的世界を「世界 1」、主観的世界を「世界 2」、そして記録物によって成立する世界を「世界 3 (客観的知識の世界)」であるとした。Popper によると、世界 3 は人間の活動によって生まれる世界である。この世界 3 の議論は、図書館情報学に親和性があるとされ、導入が試みられた。しかし 1990 年代以降、人間の認知過程のメカニズムそのものを主眼とする研究が盛んになるにつれ、客観的知識論を直接取り扱う研究は減少したといわれている。ただし客観的知識論に対して批判が行われた結果として減少したものではなかった。そこで本論文では 1980 年代の図書館情報学の試みにいったん立ち戻り、Popper の哲学と現代の図書館情報学のかかわりについて検討した。

本論文では、客観的知識論の持つ自律性の概念を把握するためには「反証可能性」の概念を同時に捉えることが必要であることを示した。同様に、客観的知識論の持つ相互作用の概念を把握するためには「開かれた社会」の概念を捉えることが必要であることを示した。つまり、1980 年代の図書館情報学における Popper 理論の解釈は、科学哲学の領域で行われた客観的知識論の研究と異なり、客観的知識論と反証可能性や開かれた社会との関連性を見落としているものであった点をあきらかにした。以上より、客観的知識論を踏まえて反証

可能性を考えることにより「記録された知識が反証され、棄却されていくことはどういうことか」という議論が可能となる。同様に、客観的知識論を踏まえて開かれた社会を考えることにより「記録された知識と相互作用するとはどういうことか」という議論が可能となる。これらにより、本論文は図書館情報学の持つ現代の問題やトピックについて、Popper の哲学によって分析可能であることを論じた。

具体的には、社会問題とされている「疑似科学」の図書を図書館の蔵書とするべきか否かという点について、反証可能性の概念を手がかりに調査を行い論じた。あきらかに科学的に誤った図書を無批判に図書館の蔵書とすることは図書館の質保証の問題を引き起こしうる。一方で特定の図書を排除することは図書館による知の統制となりうる。この二者の葛藤に関して、記録された知識が反証され、棄却されていくプロセスが図書館においてどのように行われているかをあきらかにした。

また学術情報流通のなかで現在、大きな話題である「オープンアクセス運動」について調査を行った。オープンアクセス運動の最初期には、Popper に私淑する G. Soros (1930-) による巨額の資金援助が行われていた。オープンアクセス運動のプレイヤーからは思想的な背景については言及されていないものの、この資金援助には、ウェブ上において無料でアクセスできる文献による学術情報の円滑な流通を通して、開かれた社会を実現する企図が含まれていたことを論じた。

以上のように、図書館情報学の基礎理論として直接的に客観的知識論を取り込もうとした 1980 年代の試みとはまた違った形で、Popper の哲学は現代の図書館情報学に有益であることを示した。

以下では各章の内容について述べる。

第一章では研究の目的と意義等について論じた。はじめに、1980 年代において図書館情報学のなかで Popper の客観的知識論を導入しようとした研究が

行われていたことを紹介した。しかし 1990 年代に入ると客観的知識論を直接取り扱った研究は減少したことを論じた。ただし 1980 年代とは異なり、社会環境の変化によって現代の図書館情報学は新たな（ただし従来の図書館のミッションの延長線上にある）状況に直面している。本論文では図書館の蔵書構成の質的保証と、シリアルズ・クライシスの対抗策としてのオープンアクセス運動の二点を取り上げた。これらについて Popper の哲学で論じる意義について述べ、本研究の目的およびアウトラインを描いた。つまり第一章では 1980 年代の Popper 研究を契機としつつ、Popper という哲学者の議論の枠組みを利用し、図書館情報学が現代において直面している諸問題に対して研究する必要性について論じた。

第二章では本論文で扱う Popper 哲学の諸概念について整理を行った。はじめに、客観的知識論を図書館情報学の基礎理論として定位させようとしたイギリスの図書館学者 Bertram C. Brookes (1910-1991) の試みを検討した。計量書誌学の研究者であった Brookes は、客観的知識論を図書館情報学の基礎理論として導入することにより、図書館情報学を他の学問領域と異なる独立した学問領域として線引きすることを試みた。この試みは一定の注目を浴び、論争を巻き起こした。これらの紹介を行った上で、Popper のテキストに立ち返り、客観的知識論のより正確な把握につとめた。Popper によると、世界 3 は世界 2 のみと相互作用を行い、また世界 3 は「自律性」があるという。自律性とは、誤った知識を客観的知識論の世界から排除していくものであると Popper は論じている。この誤った知識の排除には反証可能性の概念が繋がっている。また同時に、記録されたものとの相互作用には、Popper のいう開かれた社会の概念が繋がっている。たとえば、Popper はアテナイの書物市場を高く評価している。Popper は書物市場を「記録されたもの」と「相互討論」を結びつける存在として位置づけている。このように科学哲学の研究を参考にしつつ、図書館情報学においては客観的知識論の自律性や相互作用についての観点が軽視さ

れていたことを指摘した。以上、第二章では図書館情報学における客観的知識論の導入の試みについて詳解を行った。その結果、Popper の提唱する反証可能性や開かれた社会の概念を客観的知識論の自律性や相互作用と同時に把握することの必要性があらわになった。このように Popper の客観的知識の概念から見た反証可能性や開かれた社会といった形で、本論文で扱う三つの Popper 哲学の概念を統一的に捉えることが可能となる。その結果、現代でも Popper の哲学は図書館情報学に対して依然として有益であることを論じた。

第三章では蔵書構成の問題を扱った。現在「科学のふりをしているが科学ではない」、いわゆる「疑似科学」が社会問題となっている。そこで誤った知識を棄却していく方法論である反証可能性を手がかりにし、科学のふりをしているが、科学ではない内容を扱う「疑似科学図書」に対して、図書館は実際にどのように取り扱っているかについて、大規模図書館／小規模図書館を分析の軸としたインタビュー調査によってあらわにした。その結果、疑似科学図書は大規模図書館においては既に書架に入ってしまった「悩ましい存在」である一方、小規模図書館では利用者のリテラシー向上の手段として用いられていることを示した。また反証可能性の概念は図書館のいわゆる現場では直接的に機能することはなかったものの、利用者からの指摘による分類番号の振りなおしといった図書館の背景的な部分においてはある程度有効に機能していることを示した。

第四章では開かれた社会の概念および、オープンアクセス運動を取り扱った。現在、図書館情報学のなかでは文献をインターネット上で公開し、利用に資するオープンアクセス運動は、大きなトピックとなっている。しかしこのオープンアクセス運動がどのような意図のもとで行われているかについて言及されることはない。そこで、オープンアクセス運動の初期の意図と、その受容のありかたをあらわにするために、オープンアクセス運動の動きを決定づけたといわれる BOAI (Budapest Open Access Initiative) について調査した。オープ

ンアクセス運動の始動には、OSI (Open Society Institute) による多額の資金援助が背景にあることを指摘した。OSI は Popper に私淑する投資家・篤志家である G. Soros によって設立された財団である。この資金援助には、学術情報の円滑な流通を通して、開かれた社会を実現する企図が含まれていたにもかかわらず、オープンアクセス運動の現場の担い手からはそれらの思想的な背景については言及されてこなかったことを論じた。

以上のように、第三章、第四章では、従来の図書館情報学が見落としてきた Popper 哲学は、現代の図書館情報学にも裨益することを示した。第五章では、本論文のまとめと今後の課題の整理を行った。

本論文では K. R. Popper の提唱した概念を図書館情報学に取り入れようとした、1980 年代に行われた研究の乗り越えをはかった。またしばしば「実務」に重点を置かれる図書館情報学において、理論的な視座を用いて現代の図書館情報学の直面している問題やトピックの分析を行った。これらの作業により、依然として Popper 哲学は現代の図書館情報学においても有益であることを示した。

【Title】

Philosophy of K. R. Popper for Library and Information Science:
"Falsifiability, Open society, and Objective Knowledge"

【Abstract】

This dissertation discusses the philosophy of Karl Raimund Popper (1902-1994) and its applications to Library and Information Science. Karl Popper, who was a philosopher of science, proposed the theory of objective knowledge in his late carrier. During the 1980s, there were interests and efforts within the field of Library and Information Science to position this theory as one of the discipline's fundamental theories.

According to Popper, his theory of objective knowledge adds a "world formed by records" to the binary view of the world consisting of the physical and the subjective worlds. Popper calls the physical world "World One," the subjective world "World Two", and the world formed by records, or the world of objective knowledge, "World Three". Popper contends that World Three is created by human activities, and his argument regarding World Three has been seen as compatible with core concerns of Library and Information Science, which attempted to incorporate the theory into the discipline. Since the 1990s, however, studies dealing directly with the theory of objective knowledge have been in the decline, as research on human cognitive mechanisms rapidly gained traction. Still, the decline of the studies focusing on the theory of objective knowledge did not occur because of criticisms on or the refutation of the theory itself. This dissertation thus revisits the attempts in the 1980s to introduce the theory to Library and Information Science, and investigates the relevance of

Popper's philosophy to modern studies of Library and Information Science. The dissertation demonstrates that to apprehend the concept of autonomy within the theory of objective knowledge, one must simultaneously consider the concept of falsifiability. It also shows that to better understand the concept of interaction within the theory of objective knowledge, one must comprehend the concept of open society. These indicate that the Library and Information Science interpretation of Popper's theory during the 1980s, separate from the studies of the theory of objective knowledge in the discipline of the philosophy of science, overlooked the ties between "falsifiability" and "open society." Viewing falsifiability in light of the theory of objective knowledge enables a discussion of how recorded knowledge is scrutinized and rejected if it is deemed false. Similarly, conceptualizing open society based on the theory of objective knowledge enables a discussion of what it means for us to interact with recorded knowledge. By way of these discussions, this dissertation argues that Popper's philosophy provides a new conceptual framework for the analysis of the problems that the field of Library and Information Science faces today.

More specifically, by applying the concept of falsifiability, the dissertation discusses the findings of the research the author conducted on a widely debated question of whether or not libraries should collect and put on display books on "pseudo science." To uncritically collect books that are evidently scientifically spurious potentially invites quality assurance problems for libraries. At the same time, the exclusion of specific titles potentially leads to censorship of knowledge by the libraries. Through documenting this conflict, this dissertation presents the way in which the process of falsification and rejection of recorded knowledge is

implemented in libraries.

The dissertation also explores the Open Access movement, which is currently a major topic in the area of scholarly communication. The startup phases of the Open Access movement received a significant amount of funding from George Soros (b. 1930), who was strongly influenced by Popper. Although the players involved in the Open Access movement rarely mention their ideological background, the author argues that this financial assistance contained an intention to realize an open society through the more fluid circulation of academic information by enabling free online access to literature.

As seen above, the dissertation demonstrates that in a form different from the attempts in the 1980s to incorporate the theory of objective knowledge directly as a fundamental theory of Library and Information Science, Popper's philosophy is beneficial to the contemporary studies of Library and Information Science.

This dissertation is organized into the following five chapters. Chapter 1 explains the objective and significance of the study. The chapter first introduces studies conducted in the 1980s as efforts to integrate Popper's theory of objective knowledge into Library and Information Science. It then describes how on entering the 1990s, studies dealing directly with the theory of objective knowledge declined. Unlike in the 1980s, however, due to changes in the social environment, modern Library and Information Science is facing new challenges (albeit still consistent with libraries' traditional missions). The chapter also addresses two points in relation to the Open Access movement: as the collection development, management and quality assurance issue for libraries, and as a counter measure to the

Serials Crisis. It discusses the importance of assessing these functions in relation to Popper's philosophy, and presents the significance, objectives and outline of this study. In short, using the 1980s studies on Popper as a stepping-stone, Chapter 1 shows the necessity for and significance of studying current Library and Information Science problems using the framework proposed by the philosopher Karl Popper.

Chapter 2 introduces the theories and concepts of Popper that the study references. First, it examines the attempt by the British library scientist Bertram C. Brookes (1910-1991) to situate the theory of objective knowledge as a fundamental theory of Library and Information Science. As a researcher of bibliometrics, Brookes intended to differentiate Library and Information Science as an academic discipline from other disciplines through introducing the theory of objective knowledge as a core theory of the field. His effort garnered a certain amount of attention and roused controversy. The chapter then returns to Popper's texts and presents the author's effort to better interpret his theory of objective knowledge. Popper proposed that "World Three" only interacts with "World Two." He also argued that "World Three" possesses "autonomy." This "autonomy," according to Popper, eliminates erroneous knowledge from the world of objective knowledge. This elimination of erroneous knowledge is connected to the concept of falsifiability. Likewise, interacting with recorded knowledge is connected to another of Popper's concept of the open society. Popper for instance highly praises the book market of Athens, as he envisages the book market as connecting "that which is recorded" to "interactive debate." In short, referring to works produced in the field of philosophy of science, this section presents that Library and Information

Science has overlooked autonomy and interaction, the crucial points of the theory of objective knowledge. In summary, Chapter 2 provides a detailed overview of the attempts to introduce the theory of objective knowledge to Library and Information Science. This overview demonstrates the necessity to understand Popper's concepts of falsifiability and open society in light of the concepts of autonomy and interaction within the theory of objective knowledge. Seeing falsifiability and open society in relation to the theory of objective knowledge enables us to unify the three concepts of Popper that guides discussions in this dissertation. This leads to a proposition that Popper's philosophy is still relevant to Library and Information Science. Chapter 3 deals with problems of collection development and management. Today, there is a growing concern in society on so-called "pseudo-science," which "pretends to be, but is not science." Drawing on the concept of falsifiability, the methodology of rejecting erroneous knowledge, and based on an interview study that focused on large- and small-scale libraries, this chapter demonstrates how libraries in practice deal with "pseudo-science books" that pretend to present scientific knowledge yet deal with arguments and recommendations not based on scientific findings. The author's findings show that while pseudo-science books already on the bookshelves of large libraries are considered "troublesome," they are used as a tool to improve users' information literacy in small libraries. Likewise, although the concept of falsifiability is not used directly "on the ground" in libraries, the findings suggests that the concept to a certain degree functions in the background, such as through the reassignment of classification numbers based on user suggestions.

Chapter 4 discusses the concept of an open society and the Open Access

movement. At present, the "Open Access Movement," which advocates the open publication and circulation of literature on the Internet, is a major topic within the field of Library and Information Science. However, little has been said regarding the intentions behind the Open Access movement. Thus, in order to clarify the initial intentions of the Open Access movement and reactions and responses to the initial stage of the movement, this chapter investigates the Budapest Open Access Initiative (BOAI), which played a decisive role in determining the directions of the Open Access movement. The study indicates that behind the start-up of the Open Access movement was major financial assistance from the Open Society Institute (OSI). The OSI is a foundation established by the investor and philanthropist, George Soros, who was strongly influenced by Popper. This chapter argues that the OSI invested in the Open Access movement to realize the open society ideals by smooth distribution of records, although those involved in the Open Access movement rarely discuss the ideological background.

In short, Chapter 3 and 4 present the benefit of Popper's philosophy to modern Library and Information Science that was hitherto overlooked by the discipline. Chapter 5 is a concluding chapter that summarizes the dissertation and presents future directions.

This dissertation seeks to go beyond studies conducted in the 1980s as attempts to incorporate the concepts proposed by Karl Popper into Library and Information Science. While studies in Library and Information Science often focus heavily on the "practical," this study also analyzes the problems and topics that Library and Information Science currently faces using theoretical perspectives. This work strongly indicates that Popper's

philosophy is still highly relevant even to today's Library and Information Science.

【目次】

1 はじめに	1
1.1 本論文の背景	1
1.2 本論文のアウトラインと研究手法	8
2 客観的知識論と図書館情報学	11
2.1 Brookes の試み	11
2.2 客観的知識論	14
2.2.1 Popper の論じる三つの世界	14
2.2.2 客観的知識の世界の自律性	16
2.3 反証可能性	19
2.3.1 科学と疑似科学の境界設定	19
2.3.2 反証可能性と客観的知識の自律性	21
2.4 開かれた社会	25
2.4.1 開かれた社会と対比される社会	25
2.4.2 客観的知識の相互作用と開かれた社会	29
2.5 Brookes の誤読の修正	31
2.6 客観的知識論、反証可能性、開かれた社会を統一的に捉える必要性	35
3 反証可能性と図書館情報学	40
3.1 科学的合理性に著しく反する図書を図書館はどう取り扱っているのか	40
3.1.1 図書館の蔵書構成論と疑似科学問題	40
3.1.2 本章における疑似科学の捉えかた	43
3.1.3 本章における先行研究	46
3.1.4 反証可能性の蔵書構成論への適用可能性と限界	57
3.1.5 実際的な運用のレベル	63
3.2 調査設計	65

3.2.1 調査対象館	65
3.2.2 調査対象者	68
3.2.3 調査票.....	68
3.3 インタビュー調査の結果	70
3.3.1 「悩ましい図書」全般について	70
3.3.2 図書館の疑似科学図書の実際的な運用方法.....	80
3.4 本章の考察、まとめと今後の課題	88
3.4.1 大規模図書館と小規模図書館の差異	88
3.4.2 本章における発見.....	89
3.4.3 本章の問題点と今後の課題.....	92
4 開かれた社会と図書館情報学.....	97
4.1 オープンアクセスの思想的根拠としての Popper	97
4.1.1 本研究の背景	97
4.1.2 本章の先行研究の系列	100
4.1.3 記録物との相互作用と開かれた社会	101
4.2 Soros、Open Society、OSI.....	105
4.2.1 Soros と開かれた社会	105
4.2.2 OSI と BOAI	109
4.3 開かれた社会の認知状況調査.....	112
4.3.1 調査方法	112
4.3.2 開かれた社会および Popper への言及状況調査の結果	114
4.3.3 BOAI への言及状況調査結果	115
4.4 本章の考察	116
5 おわりに	121
【文献】	128

【全研究業績リスト】	140
------------------	-----

1 はじめに

1.1 本論文の背景

本論文では、科学哲学者、Karl Raimund Popper (1902 – 1994) の提唱した諸理論と図書館情報学 (Library and information Science :LIS) のかかわりについて論じる。本論文では、Popper の提唱した諸理論のうち、「反証可能性」「開かれた社会」「客観的知識論」を主要な議論の枠組みとして用いる。

Popper 後期の客観的知識論は、図書館情報学において基礎付け理論として提案されてきたという過去がある (Brookes 1980a=1982, 1980b)。客観的知識論とは、物理的世界と主観的世界の二つの世界に加えて、「記録物によって成立する世界」を追加したものである。この記録物を重視する視点から、Popper の客観的知識論は図書館情報学には親和性があるとされ、図書館情報学とは何か、図書館情報学が対象とする研究対象とは何か、という問いに応答するための理論として導入の試みがなされてきた (Brookes 1980a=1982)。

しかし 1990 年から 2000 年代にわたって、この理論は日本の図書館情報学のなかでは教科書、ないしは論文で直接のテーマとして扱われることはなかった。客観的知識論と図書館情報学の関連性を日本に紹介し、検討を加えた村主は、「(Popper の客観的知識論は) 認知科学の影響を受けた立場に押され、目立たなくなった」(村主 1994) と論じている。

しかし 2013 年から 2014 年に刊行された 4 つの図書館情報学の教科書¹のうちの 2 つの教科書では、Popper を導入しようとした Brookes についての言及が行われている。つまり、1980 年代における試みに再度着目の兆しがあるとも言えるだろう。たとえば東京大学出版会の「シリーズ図書館情報学」の一卷、『図書館情報学基礎』(2013) では情報の定義について、Brookes の「受け手の知識の構造に変化を与えるもの」が引用され (根本 2013: 4)、この定義は情報を扱う比較的広い分野では採用されることが多いと記述されている。またより直接的に言及しているものとして、勁草書房の『図書館情報学』(2013)

がある。ここでは、ある程度の紙幅を割いて Popper について言及するとともに、その項目のまとめとして「世界 3（筆者註．記録されたものによって成立する世界）が図書館情報学の扱う対象と考えることができよう」（上田・倉田編 2013: 14）と明記されている。しかしこれらの紹介は無論、教科書的な性質としての限界もあろうが、Brookes や Popper の議論に対し、批判的検討を経たものではなく、紹介に留まっている。

Popper の客観的知識論を図書館情報学に導入しようとした 1980 年代の試みは、客観的知識論への理解の誤りが指摘できる上に、また反証可能性や開かれた社会概念など、Popper 哲学のうち、さまざまな領域から広く参考にされている諸概念を完全に見落としているという欠点が指摘できる。

松林は、図書館情報学の学問的特性として「情報技術自体への関心とその随伴現象の様々な問題の現出に追従するだけに時間を費やさざるをえない」（松林 2005）性質があると論じている。また朝比奈は、図書館学[sic]は実践の学であり、また実践のためであろうとすればこそ、批判の視点を欠いてはならないと論じている（朝比奈 2005）。図書館情報学において哲学を用いて議論することとは、図書館にまつわる現象をより深く読み解き、また批判的検討を加える作業になる。村主が述べているように、Popper の客観的知識論は、図書館情報学の内部では、あくまでも目立たなくなったのみであった。同様に松林は、図書館情報学は学的危機に陥るたびに理論を求める運動を行なっているという（松林 2005）。この原因として、過去に導入が試みられてきた哲学的議論を消化しなかった、あるいは、批判的継承を行わなかったことも一因であろう。したがって Popper の理論を用いて図書館情報学の諸問題を議論することはいまだ価値があるといえる。

1980 年代に行われた、客観的知識論を図書館情報学に取り入れる試みは、現在、言及されることも少なくなった。しかし 1980 年代当時と現代のなかでは図書館をとりまく社会的環境の変化がある。1995 年の「インターネット元

年」以降、ICT の社会への幅広い普及は、図書館の価値を否応なく変化させてしまった。たとえば竹内は、電子情報環境下におかれた図書館が激しい競争にさらされていること、また図書館の価値が社会の中では相対的に下落してしまっている点を明言している（竹内 2014）。

このような変化した状況下では、図書館が社会と関わる上で図書館として変わらざるを得ない機能と変わらない機能があるはずである。本論文はその点に着目して論じていく。そのために 1980 年代に行われた Popper の理論と図書館情報学の関係という大枠を引き継ぎながら、より現代的な問題についても論じる。つまり Popper の理論は図書館情報学にとって現代においても有益であることを示していく。

図書館の機能には、収集・組織化・蓄積・提供の 4 つがあるといわれる。この 4 つの機能のうち、全てではないが、いくつかは Popper の理論により分析することが可能だと思われる。

本論文では、1980 年代に行われた、図書館情報学における Popper 理論の導入を紹介し、その修正を行なう。その上で、社会的状況が異なったゆえに新たに出現した現代の図書館が直面した主要な問題について、二点取り上げ、Popper の議論によってその問題を分析する。

一点目は図書館における蔵書構成を取り上げる。とくに科学的合理性に著しく反した、疑似科学的な図書を図書館はどう取り扱っているのかという問いを立てる。従来の蔵書構成論は、あえて構図を単純化させて記すと、図書館は利用者のニーズをかなえるべきという「要求論」と、価値のある図書を蔵書にすべきという「価値論」の二者の対立構造があった。しかし Web 環境の激変により、質を問わなければ、我々はいまでは手軽に情報を取得できる環境にいる。このようななかで、玉石混交の Web の情報と比べて、正統的かつ権威性のある知識を組織化することが図書館のミッションであると主張し、Web 上の情報との差異を打ち出すのはたやすい。しかしそれでは図書館による知に対する統

制的側面が強く現れてしまう。このような悩ましい状況下で、図書館はどのように科学的合理性と著しく反している図書に対して向き合っているのか、反証可能性の概念を手がかりに用いて論じる。

二点目はオープンアクセス運動を取り上げる。学術雑誌の価格高騰に伴い、図書館が学術雑誌を買い続けることができなくなった「危機」が1990年代から現代にかけてしばしば論じられる。この危機をシリアルズ・クライシスと呼ぶ。その対抗策の一つとして位置づけられるものが、インターネット上で文献に対する無料で障壁のないアクセスを実現する運動である、オープンアクセス運動である。このオープンアクセス運動の思想的根拠について、開かれた社会の概念を手がかりに論じる。

蔵書構成論の問題や、オープンアクセスというトピックは、いずれも図書館の従来のミッションの延長線上にあるが、これは情報環境の激変とともに図書館情報学の扱う領域の問題として可視化されたものである。オープンアクセス運動は、いかにして知を伝達するかという構図の延長線上として捉えうるし、疑似科学と蔵書構成については、蓄積された知の「質的な担保」の問題として捉えうる。したがって一点目、二点目の問題はどちらも、図書館情報学の固有の問いと関連する、古くて新しい問題である。

もちろん、それ以外にも情報環境の激変によって新たに出現した図書館情報学の問うべき古くて新しい問題はさまざまに存在する。図書館は常に時代の変化とともに問題状況に晒され続けている。そのなかでも、とくに蔵書構成論とオープンアクセス運動を主眼として取り上げる理由として、以下の二点があげられる。一点目の疑似科学図書を蔵書にするか否かについては、客観的知識論は記録された知識について論じており、反証可能性は誤った知識の棄却を扱うものであるため、この二点を交差する部分を論じうるからである。二点目のオープンアクセス運動は、客観的知識論が論じる記録された知識と、開かれた社会が扱う、我々がその知と相互作用するということはどういうことなのかを論

じうるからである。

Popper は「記録物」を重要視している。しかし反証可能性や開かれた社会の概念を記録物という観点で読みなおすことはほとんど行われていない。ゆえに、本論文では、「客観的知識論に限定した Popper 理解」という 1980 年代のアプローチは採らず、Popper が提唱した他の概念と客観的知識論の連関を押さえる。

以上述べてきたように、本論文は、Popper の哲学を用いて図書館情報学における各種の流れや事象を分析することを試みる。Popper の議論は多くの領域にわたっている。Popper は政治哲学から脳科学、確率の傾向性解釈といった分野に至るまで、さまざまな領域についての言及を行っている哲学者であるⁱⁱ。したがって Popper が提唱した概念には、本論文で扱うもの以外にも多く存在するが、ここでは本論文で主として取り扱う Popper の理論のうち反証可能性、開かれた社会、客観的知識論、見取り図的あるいは辞書の項目的に手短かにまとめる。それぞれの議論の詳細については各章に譲る。

【反証可能性 Falsifiability】

科学理論は自らが間違っている可能性を示す理論、実験を考案できる。すなわち、自らを反証する可能性を持つ。一方、そのような理論が考案できず、言い逃れを可能とする理論は科学的ではない。

（例：相対性理論が間違っている可能性を確かめるテストは各地で行われており、反証可能性に基づく実験に晒され続けていても、なお耐え続けているので、相対性理論は強靱な理論である。一方、たとえば精神分析や現在の社会問題として疑似科学の代表とされる『水からの伝言』といったものは自らの間違っているテストを考案できない。あるいは、反証が発見されたとしても、いくらでも言い逃れが可能なので、科学的ではない）

【開かれた社会 Open Society】

自由主義社会はお互いがお互いによる批判的な発言をもってして、訂正する機会を持つ。これが開かれた社会である。したがって致命的なエラーを起こす前にそれを回避することができる。一方、全体主義では、批判的な言論が封殺されるため、ディストピアを招く。冷戦時、共産主義に対する自由主義陣営の優越性の根拠として参照された。Popper は全体主義のルーツにプラトンによる「賢人政治」をあげている。

【客観的知識 Objective Knowledge】

記録されたものによって成立する世界のこと。Popper はこれをイデア的存在として捉えているが、プラトンと違い、人間が生み出すものとした。Popper は世界 1（物理的世界）、世界 2（主観的世界）、世界 3（客観的知識の世界）があると主張している。この議論を客観的知識論と呼ぶ。Popper はこれらの 3つの世界は相互作用を行うと主張している。

もともと Popper の哲学は扱う領域が非常に広範囲で、彼の理論には問題点や矛盾点も多いという指摘がなされることもあるもののⁱⁱⁱ、図書館情報学にかぎらず様々な領域から参照されている。科学哲学者の伊勢田哲治は、物理学者との須藤靖との対談本『科学を語るとはどういうことか』のなかで以下のような発言を行っている。

伊勢田：哲学的な議論が参照されたり哲学者が呼ばれたりするというのは、新しい分野の立ち上げのようなときでしょうか。どのようにこの分野を進めていけばいいのかという話をする際に、哲学者が呼ばれたり議論が参照されるときがある。たとえば科学哲学者のポパーは哲学者の間では評判はよくないですけど、たとえば脳科学の立ち上げとか認知科学の立ち上げと

か、あるいは分野がちょっと違いますけど、ある種のタイプの分類学とか、いろんなところで参考にされています。哲学者がポパーを顧みなくなっているからでも、けっこう参考にされているんです。というのも、最低限反証可能性があるようなプログラムを作らないといけないという議論をするために必要なんですよ。しかもそれはけっこう役に立ってきた。

須藤：ポパーの説が出てきたとき私も言ったのですが、ポパーは科学哲学者の間で評価がいまいちだという理由がよくわからない。とても自然で納得できる意見だと思います。むしろ科学哲学者の同業者がある程度成功をおさめている彼の説の細かい問題点だけをあげつらい、結局本質を見失った議論に陥っているだけではないかと思います。ポパーが科学哲学者の間で不評というのであれば、それに変わるだけのよりよい説が定着しているのでしょうか。そういうものが無いままポパーが科学哲学界で不評なのだとすると、どっちの方に問題があるのかは自明のような気がします。

伊勢田：誰もが認める対案を出すのが難しいのは確かなんです（略）

（須藤・伊勢田 2013: 289）

この中で伊勢田は、Popper の議論は様々な領域で影響を与えていることを示唆している。反証可能性や開かれた社会の概念については、そのインパクトは大きく、これらを引用したものは多岐にわたるので、先行研究をすべてフォローするのは不可能である。しかし反証可能性や開かれた社会に比べ、それほど言及されることのない客観的知識論であっても、他分野から言及されている。客観的知識論についての詳細は後述するが、知識の世界が進歩していくモデルを描き出している一つのありかたであるため、主に経済学や教育学の分野で引用されているものが目を引く。

たとえば教育学の領域においては、S. Chitpin, C. W. Evers は、問題の発生とその解決によって螺旋的に知識構造が成長していくという客観的知識論の

スキーマを教師志望者たちのグループワークに対応させ、自主学習によって自らが課題解決を行っていたケースをあきらかにしている (Chitpin and Evers: 2012)。これは近年注目されている、高等教育における学習支援の有効とされる技法、協調学習を Popper 的枠組みで捉え直したものとして、注目に値する成果であると考えられる。

また堀内、西之園は中学校社会科授業を例に Popper の哲学を利用した研究を行っている。堀内らは、実際の授業計画と実践、そしてこれらに対するリフレクションを行うことにより、授業計画や実践の「誤り排除」を行うことでより良い授業計画の設計を試みている (堀内・西之園 1996)。

経済学では、浦上博達による言及が目を引く。浦上は Popper の客観的知識論の根幹である、世界 1、2、3 のフレームワークをひきつつ、経済活動を「人間の営み」という立場で捉えることで、Popper の客観的知識論へのテーゼを参考にしながら、客観的知識論への批判を行っていると読むことができる (浦上 1990)。

本節では、図書館情報学の基礎理論として、1980 年代に Popper の客観的知識論を導入しようとした意図があったことや、現代でも一部分的に言及されていることを示した。また図書館情報学における過去の試みについては、Popper の提唱した他の概念への言及が不足していること等を記し、Popper の哲学を本論文で取り扱う理由・目的について論じた。

次節では、本論文のアウトラインを描く。

1.2 本論文のアウトラインと研究手法

本節では、本論文全体のアウトラインを描く。

第二章では、客観的知識論を図書館情報学に導入しようとした Brookes の試みと、それに対する批判、および、Popper の客観的知識論の問い直しを行う。現代の視座から見ると、Brookes が図書館情報学の基礎理論として Popper の

客観的知識論を導入した際に、Brookes は客観的知識論を誤読して行っていたと指摘できる。また哲学の領域からは、客観的知識論は批判が加えられていた。そこで、Brookes が導入しようとした試みを紹介し、客観的知識論に対して行われた従来の批判を Popper のテキストから回避できることを示す。その上で、Brookes の導入の試みを読み直す。ここにおいて、客観的知識論は、反証可能性や開かれた社会の概念と接続していることをあきらかにする。すなわち、Brookes は客観的知識論のみに注目していたが、より明瞭に客観的知識論の特性を捉えるには、反証可能性や開かれた社会の理解が必要であり、さらに客観的知識論を踏まえた反証可能性や開かれた社会の概念を用いることで、むしろ現代の図書館情報学の問題を適切に捉えうることをあきらかにする。

第三章では反証可能性と図書館情報学の関係について、図書館の蔵書構成、とくに疑似科学の書籍を図書館がどう取り扱っているかという問題を取り上げる。この作業によって、現代の図書館が直面している、図書館の蔵書の質保証の問題を捉える。あきらかに誤った知識を図書館はどう捉えているのか、図書館員は蔵書の質の担保と利用者からの要求という矛盾をどのように捉えているかについて、インタビュー調査をもとにあきらかにする。この章では、記録された知識（客観的知識論が想定している知識の世界）がどのように棄却されていくか（反証可能性の観点から）の図書館における現実のありかたを捉える。

第四章では、開かれた社会と図書館情報学について、オープンアクセス運動を例として捉える。オープンアクセス運動は、知の伝達の一つのありかたであるが、その運動をキックオフさせるために行われた資金援助は、どのような思想的根拠にもとづいて行われたかということを文献調査と計量書誌学の手法を用いて論じる。この章では、記録された知識とわれわれが相互作用すること（開かれた社会）の事象を捉える。

第五章では全体のまとめを行う。

以上、本論文の研究の意義および本章のアウトラインについて述べた。次章

以降では、実際の Popper 哲学と図書館情報学のかかわりについて述べていく。

i なお 4 つの教科書は以下の通りである。

Rubin, R. *Foundations of Library and Information Science*. 2010. (=2014, 根本彰訳『図書館情報学概論』. 東京大学出版会.)

上田修一・倉田敬子編, 2013, 『図書館情報学』 勁草書房.

根本彰ほか編, 2013, 『シリーズ図書館情報学』 東京大学出版会.

山本順一編, 2013, 『新しい時代の図書館情報学』 有斐閣.

ii Popper の哲学の特徴をここで略述しておく。Popper は多くの哲学者らと論争を行っていた。例えば Wittgenstein、Adorno、Kuhn と論争し、またマルクス主義に対し強い批判を加えていた。したがって 20 世紀において著名とは言えるが主流の哲学者ではないといえる。ほか、Popper の哲学を特徴付けるものとして、反・基礎付け主義および、批判的合理主義の特徴がある。我々は常に誤りうるし（可謬主義）、必ずしも真理そのものにたどり着くことはできないが、対話を通じてよりよい真理に漸近的に近づくことができる、という立場である。以上の立場から、可謬主義を取りつつも、むしろ可謬主義と親和性の高いされる相対主義に対しては強い批判を加えていた。Wittgenstein との論争は Edmonds & Eidinow (Edmonds & Eidinow 2002=2003) , Adorno との論争は、Adorno (Adorno 1971=1979) を参照。Kuhn との論争は Kuhn (Kuhn 1977=1998) を参照。ほか、相対主義に対する批判、マルクス主義に対する批判は、Popper 自身の自伝 (Popper 1970=2004a, 2004b) を参照。また、Popper はしばしば「誤読」に晒された哲学者と言われている。この点については小河原ら (小河原編 2000) に詳しい。

iii たとえば Popper の議論は直感的には納得できるものの、論理が飛躍しているケースがあるという指摘がなされることもある。Meiland Jack W. and Krausz Michael ed. 1982, *Relativism*. (=1989, 常俊宗三郎・加茂直樹・戸田省二郎訳『相対主義の可能性』産業図書.) 等を参照。

2 客観的知識論と図書館情報学

本章では、まず 1980 年代に図書館情報学の領域で行われた、図書館情報学者 Bertram C. Brookes (1910-1991) による Popper の客観的知識論を図書館情報学の基礎理論としようとした試みについて紹介する。次に客観的知識論とは何かを論じ、客観的知識論の重要な観点として「自律性」の概念があることを指摘する。その自律性を捉えるために、Popper 前期の概念である「反証可能性」の概念を紹介する。そののち反証可能性の概念と、Popper の論じた概念である「開かれた社会」の概念が接続していることを示す。さらに客観的知識論における「相互作用」が開かれた社会の概念と関連していることを示す。客観的知識論には、自律性および相互作用の概念が含まれている。自律性は反証可能性と関連し、相互作用は開かれた社会と関連している。これらを示す作業を行った上で、相互作用の視点から Brookes の誤読を訂正し、客観的知識論を反証可能性および開かれた社会の概念と統一的に捉えることで、現在でも Popper の理論は図書館情報学にとって有益であることを論じる。

2.1 Brookes の試み

1980 年代、Popper の客観的知識論を図書館情報学の基礎理論として定位させようという試みがなされた。この試みを行ったものがイギリスの計量書誌学者、B. C. Brookes^{iv}である。Brookes は 1980 年から 1981 年にかけて提示した一連の論文で、Popper の客観的知識論の図書館情報学への導入の意義を論じるとともに、後に Brookes の基本方程式と呼ばれる、図書館情報学では広く知られている情報の定義、「受け手の知識構造に変化を与えるもの」を表現する式を提唱した。

Brookes はこの一連の論文—情報学の基礎と題されている^v—によって、図書館情報学における基礎理論の必要性を表明している。

Brookes による Popper 理論を導入する試みは、図書館情報学の基礎を見つけるために、Brookes の言葉によれば形而上学的解釈の礎、つまり哲学的な基礎づけを模索したことから始まった。Brookes が客観的知識論を導入する論文 (Brookes 1980=1982) には「現代哲学者の中で、私の性分に一番合った人物はカール・ポパー卿であった」とある。また「われわれの時代のほとんどの職業哲学者が彼の考え方に不賛成であるという理由から、そうなのである」(Ibid.) とも述べている。この発言の背景には、Brookes の、図書館情報学と他の学問の区別を行い、図書館情報学を独立した学問領域にしようとする努力・配慮があった。

Brookes によると、図書館情報学は様々なジャンルの学問をかき集めた混成学問と見なされてきた。彼は北米のある情報学の大学を訪ねたときの体験をもとに、図書館情報学には統一的なカリキュラムはなく、学生は複数にまたがる分野を自己で学んで統一せねばならないと論じている。たとえば、Brookes は、様々な領域について、統計学、コンピュータ科学、コミュニケーション論、言語学等をあげている。それら断片的な知を自ら統一し、それを図書館情報学として学生は学ばねばならないという。この現状に彼は大きな不満を抱き、図書館情報学自身を確立した学問領域とするためには<Information Science とは何か>という基礎研究を行う必要性があると唱えていた。たとえば「基礎情報学」を提唱する西垣は、「共通の基盤を欠くならば、情報学は学問として定位することは困難になるだろう」との記述を行っているが (西垣 2004: 7)、Popper の客観的知識論を図書館情報学に基礎理論として導入しようとした Brookes も、同じような問題意識を持っていたといえる。

そこで彼が着目したのは図書館情報学の学問領域に対する哲学的基礎付けであった。そこで、Brookes は Popper の客観的知識論を図書館情報学の扱うべき哲学として位置づけ、客観的知識論の図書館情報学への導入の提案を行った。

Brookes が客観的知識論を図書館情報学に導入することが可能だと述べた理

由は3つある。

- (1) Popper が、客観的知識の例として、図書などのメディアをあげており、Popper の議論をそのまま図書館情報学の領域にスライドさせうる
- (2) 客観的知識論を利用することによって、検証可能で客観視できる学問領域として図書館情報学が成立しうる
- (3) 客観的知識論は他の学問領域が扱っていないので、他の分野と比較してオリジナリティを保つことができる

なお、知識の生産過程を対象にすると心理学、認知科学などとの領域と競合するため、図書館情報学の独自性が保てないと Brookes は主張している。

Brookes のこの導入の試みについては、たとえば我が国においては、村主が丁寧に、Brookes と論争相手の議論を含めて説明を行っている（村主 1986）。また Brookes の論じた情報の定義については、柏木が検討を加えている（柏木 1995）。

ここでは Brookes が Popper の客観的知識論を図書館情報学に導入しようとした経緯および意図について確認した^{vi}。なお日本において Brookes による Popper 理論の導入について言及した主要な研究者に、村主や武者小路がいる。しかし 1990 年代以降、村主はサイバースペース論とも類似性が認められるであろう独自の「情報空間論」を思索する論文を発表するようになった（村主 1997）。また武者小路は、図書館情報学における「知識」の扱われ方において、Brookes の定義について触れているものの、記述されない「経験的知識」について図書館情報学で探求する必要性を提言し、「暗黙的な」知識への研究へ進んでいった（武者小路 2004）。つまり、90 年代以降は、1980 年代に Popper に注目していた図書館情報学の研究者らも客観的知識論そのものからは距離を置きはじめていたと考えることができる。ただし、Brookes をはじめとした先行

研究では、客観的知識論と Popper の他の哲学との関連性を捉えていない点が指摘可能である。そこで、改めて Popper の客観的知識論について、とくに Popper の提唱した他の哲学との関連性を踏まえつつ、再度検討を行う。

2.2 客観的知識論

2.2.1 Popper の論じる三つの世界

客観的知識論は Popper 後期の着想である。Popper は世界を三つに分類し、それぞれを「世界 1」「世界 2」「世界 3」と呼んだ。世界 1 は物理的な身の回りの世界、世界 2 は個々人の頭の中の主観的精神の世界、世界 3 が記録されたものによって成立する世界 (Popper 1972=1974; 1976=2004; 1992=1999) であり、客観的知識の世界であるとする。客観的知識論とは、物理的世界と主観的世界の二つの世界に加えて、イデア論的な「記録物によって成立する世界」を追加したものである。

Popper は自らの理論について、概念的に非常に近接性があるのはプラトンのイデア論であると述べている。Popper は、開かれた社会の概念を論じる中で、プラトンを激烈に批判している。この点について Popper は客観的知識論について紹介する講演のなかで

「私はプラトンとヘーゲルに対する私の反対的態度を聞きおよんでいる人たちに衝撃を与えることができたかもしれない」(Popper 1972=1974: 123)

と断っている。

Popper の客観的知識論を端的に把握するには論文集『客観的知識』(1972)が妥当である。しかし Popper の客観的知識はそれ以外の著書においても登場するため、本章では必要に応じて『客観的知識論』以外の図書に触れつつ、客

観的知識について説明する。

世界3（すなわち、客観的知識の世界）は、粘土板、楽譜、書籍など形態は何でも良いが「記録されたもの」によって成立し、そしてそれ自身は人間の主体的な作用を離れ永続性・客観性を持つ世界のことである。Popper は世界3に存在するものとして、理論、論証や歴史的記述、あるいは芸術なども含めている。

具体的に世界1、2、3を例示すると、二冊の同じ内容を持つ本があるとする。二冊の本が現実世界に存在するという意味で世界1には「二冊」存在する。しかし記録内容は同一であるので、世界3では一つとされる。その本を読み、人間が仮に知識を得ると、それは世界2の知識である。新しい本の著述が行われれば世界1の存在が新たに生成すると同時に、世界3の内容も新しく作られる。つまり、Popper によると、記録物とは世界1の存在でありつつ、世界3の存在でもある。

前述したようにアイデア論を考慮に入れれば、Popper のイメージしている世界3が容易に捉えうる。もしくは科学法則は自然界に「埋め込まれており」、それを発見していくのだという立場も Popper の世界3理論への理解を促すかもしれない。それによって「人間主体から切り離された知識は存在する」という彼の主張が明確になる。

だが全面的にプラトンのアイデア論の立場に立ってでは Popper の強調する観点は見えてこない。人間から離れた知識世界を想定するアイデア論と Popper の客観的知識論は類似しているものの、アイデア論からはある意味全く正反対の立場を Popper は採る。たとえば Popper はこのように書いている。

プラトンの第三世界は神的なものであった。それは不変であり、またいうまでもなく真であった。したがって彼の第三世界と私の第三世界とのあいだには、おおきな懸隔がある。私の第三世界は人間によって作られたもの

であり、変化するものである。それは真なる理論だけでなく偽なる理論も、
また特に未解決の問題、推論および反駁を含んでいる

(Popper 1972=1974 : 142)

ここでひとまずアイデア論と Popper の客観的知識論との共通項と異質項を整理すると以下ようになる。Popper は認識主体（＝人間）から独立した知識世界を想定している^{vii}。つまり経験世界を越えた神的世界が存在するという意味で、プラトンのアイデア論と近接する。しかし Popper が言うには、記録物とは人間が生成したにもかかわらず、人間から独立して存在する。プラトンのアイデア論はア・プリオリに神的世界を想定し、Popper はア・ポステリオリにもかかわらず人間主体から離脱していく神的世界を想定しているという捉え方が妥当である。またプラトンの神的世界は真なるもののみで構成されるが、Popper は絶対的な真という考えを反証可能性に基づき生涯にわたって拒否し、その代わり漸近的な真という概念を採用している^{viii}。

2.2.2 客観的知識の世界の自律性

Popper は記録物が人間の時間的な制約を超越していくことを強調する。B. Magee は客観的知識論を評価して以下のように言う。

世界3に存在するすべてのものは人間精神の所産であるが、……それらはあらゆる認識主体から独立して存在しうる。したがって、人間の頭の中にある知識よりもずっと図書館の知識のほうが重要である

(Magee 1985=2001: 80)

Popper は、世界同士は相互作用すると述べ、飛行場の建設という例をあげる (Popper 1992=1999: 151)。飛行場を建設するためにブルドーザーを設計

する。設計者の頭の中（世界2）の諸概念は書き記され、設計図として物体としては世界1でありつつも、設計者の持つ概念は記録された形として、世界3の存在となる。その設計図を誰か（世界2の存在）が読むことによりブルドーザーを設計、製造、使用し、世界1の体現としての飛行場を構築する。このように記録物を媒介とし、誰かの思考が別の誰かに伝達することを Popper は世界3という装置を用いて説明したといえよう。

一方で人間が生成するからこそ誤った理論等が生成することもありえる。未解決の問題や理論が世界3に属するという考え方は Popper が強調するところである。そこで、Popper は誤った理論がいかに棄却されていくかを述べる。

いくつかの誤りを犯したために、ともに間違った定理—例えば $5 + 7 = 13$ という定理—に到達した二人の数学者をとりあげてみよう。……これら二人の数学者は、世界3の論理構造によって蹴り返されることになるだろう。というのも、世界3の論理構造は、二人の数学者のいわゆる定理なるものが「 $5 + 7 = 12$ 」という客観的に真なる言明に矛盾し、したがって客観的に偽でなければならないことを示すからである。他の人によってというのではなく、算術の法則そのものに蹴られたのである。

(Popper 1992=1999: 153)。

Popper はこのように述べ、誤った言明であろうと世界3に属しうるが、世界3の「自律性」によって棄却されると述べる^{ix}。自律性とは、Popper によると誤った知識が客観的知識論の世界に含まれたとしても、誤っているために棄却されていく作用のことである。この自律性の有無が Popper の客観的知識論とプラトンのイデア論の大きな違いとなる。プラトンのイデアには真偽判定がまだ行われていない知識が存在することはないが、Popper はむしろ真偽判定が行われていない知識を高く評価する。しかし、誤っている知識が客観的知識

の世界に含まれていたとしても、結局、自律性により誤った知識は客観的知識論の世界から棄却されていくという。このような自律性による誤り排除の過程は Popper の反証可能性と密接に絡み合っている。

Popper は著書『客観的知識』のなかで「問題解決の図式」(Popper 1972=1974: 166) という式を提出している。Popper によると、従来の科学的方法における伝統的な見解では、知識を獲得するために、

観察・実験→一般化→仮説→仮説の検証 (テスト)
→立証あるいは反証→知識

という流れがあるという。しかし Popper によると知識の獲得は以下のプロセスによってなされるという。

問題→解決の提示 (新理論) →その理論のテスト可能性の検証→
テスト→競合しあう諸理論からどれを選択するか

「競合しあう諸理論からの選択」とは、ある問題に対してそれを説明する複数の理論が存在する場合、そのなかから、より反証例の少ない、真理らしいものを選択する行為のことである。これが、Popper のいう、「真理らしさ」を高めていき、より強靱な知識を獲得するプロセスになる。Popper によると、この図式は以下のように定式化される。

$$P1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P2$$

この図式は問題 P1→暫定的理論 TT→評価による誤り排除 EE→新たな問題 P2 という構図を示しており、「トライアンドエラー」を表現している。つまり誤

り排除により強靱な知識を獲得するプロセスは、反証可能性によって行われる。このように Popper の客観的知識論は、誤り排除という自律性の観点において反証可能性と連続している。そこで、次節では反証可能性について、客観的知識論の理解の上で必要な部分に絞って記述する^x。

2.3 反証可能性

2.3.1 科学と疑似科学の境界設定

Popper の提唱した諸概念のうち、現代でもしばしば引用される概念に「反証可能性」の概念がある。論理実証主義者は、科学と形而上学の区別の重視を唱え、その方法論として「検証可能性」を用いたことに対して、Popper は科学と非科学との境界設定として反証可能性を提示した。反証可能性は端的に言う、科学と非科学の境界設定である。科学は「そのもの自らが間違っている」というテストを考案できるが、非科学は、それ自体を否定するテストをもたない、というものである。

たとえば Popper は、相対性理論を検証したと言われる、マイケルソン＝モーレ実験を例に出し、相対性理論が科学的であるのは、このように自らの理論と乖離する結果を求めるための反証実験を行うことができるからだと主張する。一方、マルクス主義や Freud の精神分析を Popper は非科学的だと退ける。なぜならば、マルクス主義や Freud の精神分析は、そのもの自体が誤っているテストを考案できないからであると Popper は述べる。つまり、彼らの議論は自らが誤っているテストを考案できないか、あるいは考案できたとしても言い逃れを図るため、いずれにせよ科学的理論ではないと Popper は論じる。Popper は、科学とは、それら反証を求めるテストに耐えることによって、その理論の信頼性を獲得していく一連の営みであると考えた。加えて、Popper によると、科学的理論は様々なテストに耐え続けること、つまり、＜自らへの反証＞を否定し続けることが、より科学的な信頼性を獲得するために必要であるという。

換言すれば、強靱な科学的理論とは、自らが間違っているというテストに耐え続けたものである。ただしテストに耐え続けたからといって、絶対的な「真」には到達できないという点が Popper の考える科学的理論の特性となる。

すなわち、Popper によると、予測と観測が一致したからといって、それは仮説が検証されたことではない^{xi}ということになる。むしろ予測と観測の一致は、テストに耐えただけであるという考え方となる。科学の営みは、実験や観察を行う以前に仮説を立て、次にその仮説が間違いであることを確かめる。その結果、仮説がどのように反証されたかを踏まえ、よりよい仮説を作るというプロセスになる。このよりよい仮説を作る時点において、科学は前進する。したがって現在受け入れられている科学理論も、いまだ反証により棄却されていない仮説であるということとなる。

反証可能性の概念は、Einstein の影響を強く受けていると Popper 自身が後に述べている。Popper はこのように書く^{xii}。

私はニュートンの力学とマクスウェルの電気力学がいずれも疑いのない真理として受け入れられていた雰囲気の中で育った。(略) アインシュタインは自分の理論がニュートン理論よりもずっとすぐれた近似であると確信したけれども、自分自身の理論をより一般的な理論に向って[sic]一步前進でしかないとみなした。(略) 私にもっとも感銘を与えたのは、アインシュタイン自身が、もし自分の理論が一定のテストに落第したのならば支持しがたいものと認めると、はっきり言明したことであつた。(略) ここには、マルクス、フロイト、アードラーの独断的態度と全く異なつた、彼らの追従者たちの独断的態度とはさらにいつそう異なつた態度があつた。(略) これこそ、真の科学的態度である、と私は感じた。それは、私のお気に入りの理論に対するもろもろの「実証 (ヴァリフィケーション)」が存在すると絶えず公言する独断的態度とは、まったく異なつていた^{xiii}。こうして私は、

1919 年の末までに、科学的態度とは批判的態度であり、この批判的態度は実証を求めるものでなく決定的テストー理論を確立することは決してできないけれど、テストされる理論を反駁するテストーを求めるものである、という結論に達した。(Popper 1976=2004a: 66-67)

この、仮説を設定しては反証し、またさらによりよい仮説として設定するというプロセスこそが、Popper の言う問題解決の図式、「 $P1 \rightarrow TT \rightarrow EE \rightarrow P2$ 」の流れとなる。

以上、Popper が、客観的知識の世界には「真なる理論だけでなく偽なる理論も、また特に未解決の問題、推論および反駁を含んでいる (Popper 1972=1974 : 142)」と論じていることを踏まえて、客観的知識論と反証可能性の接合についてまとめる。Popper は、間違った理論については、それは客観的知識の世界の自律性によって棄却されていくものの、未解決の問題は客観的知識の世界に属すると同時に述べている。すなわち、Popper によれば科学的な理論は未解決の問題が含まれている。したがって科学的理論をより強靱な理論にするために、反証可能性によってその理論の確からしさをテストし、それが誤っている場合、その科学的理論は棄却されていく。同様に、真か偽か確定しないグレーゾーンの知識は客観的知識論の世界に含まれるが、偽であった場合、客観的知識論の自律性から棄却されていく。ここから、Popper の客観的知識論は、反証可能性の考え方と密接に繋がっていることが示される。

2.3.2 反証可能性と客観的知識の自律性

これまでに検討した議論をもとに、客観的知識論への批判を行った先行研究の検討を行う。具体的には、浜井および橋本によって行われた客観的知識論についての先行研究を再検討する。なお図書館情報学の領域からは客観的知識論そのものに対する反証可能性を基礎とした批判は見当たらないため、哲学の領

域で行われた批判を確認する。従来、Popper の客観的知識論は Popper の哲学のなかでは独立したものという印象を与えがちという指摘がなされていた。たとえば蔭山は

ポパーの思想には、前期と後期で断絶があるかのような印象を与えがちであるが、反証主義と三世界論は、「自らの産物は無数の未知の帰結をともなっており、これに対応するためにはわれわれの態度をこれに対して開いておかなければならない」という点でつながっていると言える。(蔭山 1997)

と指摘している。しかしだからこそ哲学の領域では、Popper の客観的知識論は「反証可能性」のなさゆえに、彼の理論と整合性がないと論じられてきた。すなわち、客観的知識論と反証可能性との繋がりが批判されてきた。この批判を再検討するのが本節の目的である。

客観的知識論を Popper の反証可能性とは関連性のないものとみなしがちであった議論に対し、浜井・橋本らは反証可能性と客観的知識論の接合性を捉えている。しかし浜井・橋本が示す、客観的知識論は反証可能性から破綻するという批判に対し、Popper の反証可能性の概念から、その批判は回避可能なように思われる。

浜井は、客観的知識論と反証可能性は関連していると指摘する。すなわち、Popper の客観的知識論はプラトンのイデア論的な静的な世界ではなく、人間精神が生み出し、また反証可能性によってそのなかの誤った理論は棄却されていくという動的な世界であるという指摘である。すなわち、客観的知識論は反証可能性と独立ではなく、関係していると指摘している。一方で浜井は以下のように批判する。Popper は世界 3 の住民として「芸術」を科学的知識と同列に考えている。客観的知識論における知識は全て反証可能性に晒されるが、芸術は反証可能性を持たない。ゆえに、客観的知識論は反証可能性と接合してい

るため、Popper 自身の議論から、客観的知識論は破綻に陥ると浜井はいう。浜井は、Popper が反証可能性に拘泥せず、反証可能性と客観的知識は独立のものとして捉えるのであれば、客観的知識論の破綻は回避可能であると論じる。まとめると、浜井は反証可能性と客観的知識の関連性をまずは認めつつも、Popper 解釈として最終的にはそれを否定していることになる。

他方、橋本は世界3の領域を科学的知識のみの世界とし、芸術を世界3の領域外に位置させる。橋本は、反証可能性の有無で科学的知識と社会的知識—たとえば Popper が客観的知識論の「主要な住民」としてあげる芸術など—を切り分ける。そして社会的知識については、別の「世界4」の概念に分類するのが妥当であると論じる。この世界4の概念の導入により、世界3と反証可能性の円滑なつながりを橋本は試みる。

これら両者には、反証可能性と客観的知識論の接合を模索する発想が通底する。この視点は Popper 理論の図書館情報学への導入においては欠落しているものであった。しかし浜井、橋本の議論は反証可能性の適用のありかたからすると再批判が可能なようにも思われる。そこで、次では浜井らの批判の妥当性を検証する。

浜井らが示す客観的知識論は反証可能性ゆえに破綻するという考え方は説得力がある。たしかに Popper の知識観は、科学的知識に主眼が置かれている。客観的知識論を論じるテキストには芸術についての論及はほとんどないにも拘わらず、知識の典型を科学的知識に求めた上で、客観的知識論の議論を進める Popper を批判することは可能であろう。

しかし『实在論と科学の目的』に記された反証可能性の概念からは、浜井の批判は回避可能であり、橋本の世界4を導入する意図も不要に思われる。反証可能性とは、自らを科学とみなすものがあきらかに体系から反した場合、偽として棄却される緩やかな方法論である。ここには真偽判断が行われていない「問題状況」に留まりうるグレーゾーンが存在する。

すなわち、反証可能性の有無と、反証可能性によって棄却されるか否かの二つの水準の混同で、従来の批判が行われていたと思われる。

浜井らの議論では前者の反証可能性の有無のみを芸術、科学全てをひっくるめて適用し、反証可能性のないものを客観的知識の世界に含めると矛盾が生ずるという議論であった。一方、筆者は、反証可能性の有無ではなく、反証可能性によって棄却されるか否かの水準で検討する。客観的知識論と反証可能性の関連とは、反証可能性があるか否かの水準ではなく、いかにして棄却のプロセスが生成され、偽の知識が棄却されるかという観点に立てば、Popper の文脈から従来の批判を回避することができる。

以下に回避法を示す。

反証を受けたとしても棄却されず生き残る領域を積極的に肯定し、それらは客観的知識の世界を構成すると想定すれば、反証可能性と客観的知識論は矛盾なく接合する。反証可能性の有無に拘わらず世界3の住民として棄却されずに生き残るのは、以下の3パターンになると思われる。

1. その時点の学問の水準における真なる言説（反証可能性によるテストに耐え続けている言説）
2. 問題状況にあるがゆえに、真偽判定が行われない、あるいは行われ得ないグレーゾーンの言説
3. そもそも反証可能性の有無を問われないがゆえに、棄却されようがない領域（＝芸術等）

以上のように考えれば、反証可能性と接合を保ちつつ、客観的知識論にPopperが芸術を含めたことをPopper自身のテキストから擁護できる。すなわち、浜井の指摘する「反証可能性の無さ」から客観的知識論は破綻するという議論は、回避することが可能となる。

反証可能性は科学、ないしはそれに準ずる科学を装った疑似科学への批判理論として成立していた。自らの理論を科学的理論と詐称しない限り、反証可能

性は発動せず、棄却プロセス自体も生成しない。

このように『实在論と科学の目的』から議論を組みたてていけば、客観的知識論は破綻が生ずるという、浜井、橋本らから従来唱えられていた批判は回避できよう。

たとえば、巨大な亀の上に地面が支えられており、それが我々の地球の姿であるという「科学的知識」は棄却されよう。だが、人がそのように考えた歴史があることは真であり、かつ、その歴史は反証可能性を適用したとしても反証されず、棄却されない領域にある、といえる。

以上をまとめる。従来、客観的知識論は反証可能性と関連するため破綻すると考えられてきた。しかし反証可能性における棄却のプロセスに注目するアプローチを採ることによって、客観的知識論の破綻は生じず、また反証可能性と客観的知識は接合を保ちうる。よって、先行研究で行われていた批判は回避可能である。

以上の記述では、反証可能性と客観的知識論が連続しているゆえに客観的知識論は破綻に陥るという先行研究の批判を回避した。客観的知識論には自律性があり、その自律性は反証可能性の概念と繋がっていることを示し、反証可能性による棄却のありかたに注目することで、反証可能性がそもそも無い知識も、客観的知識の世界に含まれうることを論じた。以降では、客観的知識論の特性の自律性に加えて、もう一つの客観的知識論の特性である相互作用について述べる。その下準備として、反証可能性と並んで著名な開かれた社会の概念について論じる。

2.4 開かれた社会

2.4.1 開かれた社会と対比される社会

本節では Popper の「開かれた社会」の概念について記す。開かれた社会とは、お互いに相互批判を行うことが可能な社会のことである。Popper は完璧

な社会にたどり着くことは不可能であったとしても、現在よりもよりよい社会を作っていこうという思想を論じている。このなかの相互批判の概念には、Popper の反証可能性の議論が含まれている。一方でその対比される「閉ざされた社会」とは、エリート層や一党独裁といったものによって運営される社会であり、これは往々にして批判を受け付けない。よって、Popper は「閉ざされた世界」はディストピアに陥る、と論じた。

Popper の『開かれた社会とその敵』は 1945 年に出版されたものである。この書籍によって Popper は政治哲学といった領域で広く知られた。

Popper の『開かれた社会とその敵』は、もともと上下 2 巻で構成されている。上巻は「プラトンの呪文」、下巻は「予言の大渦」と題されている。きわめて大部な書物であるが、ここでは概要を紹介する。上巻ではプラトンの賢人政治に対する批判、下巻では Hegel、Marx、Mannheim への批判が行われている。『開かれた社会とその敵』は、賢人政治がいかに悲劇をもたらすかという点から、反証可能性に基づき、自らを科学と見なす社会理論に対する批判を行った書籍である。

Popper はプラトンを全体主義のルーツであるとして激烈に批判する。Popper はイデア論に則って、プラトンの政治思想を以下のように定式化する。「すべての政治変化を阻止せよ！」(Popper 1950=1980a: 97)。あるいは、「誰が支配すべきかという問いを、われわれはどうすれば悪い支配者ないし、無能な支配者があまりにも多くの損害を与えることを防止できるように政治制度を組織することが出来るか、という新しい問いに置き換えることを強いる」(Ibid: 127) という。

プラトンのイデア論は、人間から離れた永遠的な原型の世界を想定している。イデアの実在というのは永久不変である。不変であるからゆえ、政治変化を阻止することになると Popper は論じる^{xiv}。

Popper のプラトン解釈は以下のように続く。プラトンは国家の変遷を、哲

人王による賢人政治が最初にあり、これがイデアに最も近い政治体制であると考えた。だが、その後名誉制、寡頭制、民主制、僭主制と国家は移り変わる。これはプラトンによると墮落である。ここにおいて、プラトンは歴史法則を見出した、と Popper はいう。そこで、プラトンは「政治変化を阻止」すること、そして身分制度を変革するのではなく、むしろ支配階級の強化を唱えたと Popper は考えた。

Popper は実際に以下のように書いている。

後に『法律』の中で、プラトンは平等主義に対する彼の返答を、「平等でないものの平等な取り扱いは必ず不平等を生む」という定式で要約し、この定式はアリストテレスによって、「等しい者には平等を、等しくないものには不平等を」という定式へと発展させられた。(Ibid: 105)

Popper はプラトンを、平等を逆手に取った不平等を論じたと捉えている。そして、このような作業こそが全体主義に対する種を撒いたと激烈に批判する。このプラトン批判^{xv}は、下巻の Hegel、Marx らに対する批判へと繋がっていく。

この平等主義といった伝統を、Popper はマルクス主義とファシズム、いずれにも見て取る。どちらの理論にも、歴史法則性を主張し、自らの指導者が誤りを認めることはほとんどない。科学的に自らが正しいとみなすがゆえに、＜間違える権利＞を棄却することによって、逆説的に最悪の政治形態をもたらす、と Popper は考えるのである。Popper のこの発想は、可謬主義を認める立場から導き出された。

Popper はファシズムとマルクス主義を、いずれも歴史法則主義を認めているものと同一視し、批判していた。それゆえにマルクス主義者らから批判を受けた。だが、マルクス主義を求めた社会、たとえばソビエト連邦を例にすると、ノメンクラトゥーラを発生させ、官僚の腐敗を招き、社会体制が崩れた。ソビ

エト崩壊を実際に目にしたことは、Popper 主義者たちが、マルクス主義よりも、Popper 理論のほうがより妥当だったと述べることになる^{xvi}。Popper の「開かれている」概念は、非決定論的であり、運命論を拒絶する立場にある。運命論への拒絶の原動力は、Popper の考えでは人間精神である。そして、批判的討論によって我々は社会を漸進させていくことができると Popper は繰り返し論じる。

Popper は『開かれた社会とその敵』で、独裁について、つまりエリート層による「他者を幸せにしよう」とする思想をペシミスティックな筆致でこのように書いている。

人を愛するとは人を幸福にしたいという意味である（ついでながら、これはトマス・アクィナスの愛の定義であった）。しかしすべての政治的諸理想のうちでも、人々を幸福にしようとする理想は、おそらく、最も危険な思想である。それは、われわれの「より高級な」価値尺度を他人に押し付け、そして彼らにわれわれにとって最大に意義を持っているものを彼らの幸福だと思わせ、そしていわば彼の魂を救済するという企てを不可避免的に招くのである。それはユートピア主義とロマンチズムとに至る。われわれのうちの誰れ[sic]にせよ、あらゆる人がわれわれの夢の美しい完璧な共同体で幸福になるだろう、と確信しているのである。そして、疑いもなく、われわれのすべてが相互に愛しあえるならば、地上に天国が出現することになるだろう。だが（略）、地上に天国を作ろうとする企ては不可避免的に地獄を産み出す。その企ては不寛容を導く。その企ては宗教戦争に至り、そして、魂の救済を異端審問を通じて行うに至る。そして、私見によれば、その企ては、われわれの道徳的義務の完全な誤解に基づいているのだ。われわれの義務はわれわれの救助を必要とする人々を助けることであって、他人を幸福にしようとすることはわれわれの義務ではありえない。なぜなら、他

人を幸福にすることはわれわれには依存しないし、それはまたしばしば、われわれがそのような心やさしい意図を向ける人々のプライバシーを侵害することでしかないであろうからである。(Ibid. :218)

Popper の開かれた社会の概念は、初期においては重みづけの方向がマルクス主義批判に偏っている。つまり、1946 年の『開かれた社会とその敵』では、歴史法則主義批判が前面に強調されている。しかし『よりよき世界を求めて』(Popper 1984=1995) や『フレームワークの神話』(Popper 1994=1998) においては、直接的なマルクス主義批判は影を潜め^{xvii}、批判による相互討論によって社会を漸進させていくという面が一層強く打ち出されている。

以上、本節では、開かれた社会とは相互批判による社会の漸進であり、その相互批判は反証可能性と関連した概念であることを論じた。

2.4.2 客観的知識の相互作用と開かれた社会

Popper にとって、世界 3 の概念は開かれた社会の概念とも密接に繋がっている。Popper はこのように論じている。

われわれの心、われわれの自我は、この世界 3 なしに存在できない。われわれの心や自我は世界 3 にしっかり結び付けられている。われわれの合理性、批判的ならびに自己批判的な思考と行動の営みは、世界 3 との相互作用のたまものである。われわれの知的成長は世界 3 のおかげである。(Popper 1978=1984b)

Popper によると、我々は世界 3 と相互作用を行い、その結果、知的成長が行われるという。そこで、相互作用について細かく Popper の議論を確認する。

Popper は、世界 1 と世界 3 は世界 2 を通してそれぞれ相互作用を行うと論

じている。またその相互作用が、そのまま Popper における客観的知識の世界の实在の論拠に繋がっている^{xviii}。世界1は世界2を通じて相互作用し、世界2は世界3を生み出していく存在である。世界2が世界3に触れ、世界1を結果として変化させる作業であると考えられる。たとえば Popper は 2.2.2 で論じたように、ブルドーザー、設計図、エンジニアの例によってこの図式を説明する。エンジニアが設計図を引くとする。設計図そのものは物体としては世界1の存在であるが、その記録された内容は世界3的存在になる。そして世界3の住民である、その設計図の記録された内容を別の人間が読み、ブルドーザーを動かして世界1の現実世界を変容させていく。ここにおいて Popper は紙媒体などに記録されたものによって、人間が数々の行動を行っていくことを示している。換言すれば、記録物を介した人と人とのコミュニケーションが行われることを描き出しているともいえる。

小河原は客観的知識論について以下のように論じる。我々の産み出した知識は常に可謬的である。それゆえに批判的な再検討に開かれている。誤った客観的知識の存在を暴力的な方法でなく、理性的討論によって排除することが Popper の批判的合理主義の中心概念である（小河原 1994: 67）。

Popper 研究者である B. Magee は、記録されたものは、批判を受け付け、それによって更に新しいものを生み出してゆく機能を持つと論じる。これら言語によって理論を書き留めていく作業は、人間の社会的進化とも接合するという。Magee はこう述べている。

科学以前の段階では、人びとはしばしば誤った理論のために淘汰された。人びとは誤った理論とともに死んだのである。科学的な段階では、われわれは誤った理論を意図的に排除しようと努める——自分の代わりに誤った理論を死なそうと努めるのである。

人間が最早理論と死を共にしなくなったとき、人間は大胆に冒険するよ

うになった。知的伝統はかつてはもっぱら防衛に重点を置き、既存の教義を保存することに努めてきたけれども、今やそうした態度は探求的態度に取って代われ、変革への力となった。(Magee 1985=2001: 83-84)

小河原や Magee が論じているように、記録されたものと相互作用することにより、われわれは様々な異なる意見に対して、批判的な検討を加えることができる。すなわち、開かれた社会の礎として、客観的知識論が位置づけることができる。以上より、Popper の客観的知識論は、相互作用という観点から、開かれた社会の概念と接続していることを示した。以降では、これまで行ってきた反証可能性、開かれた社会、客観的知識論を統一的に捉えた作業を踏まえ、1980 年代に図書館情報学の領域で行われた議論を再度検討する。

2.5 Brookes の誤読の修正

これまで、Popper の客観的知識論には、世界 1，2，3 の相互作用 が重要な役割を果たしており、なおかつ、世界 2 のみを通じて世界 1 と世界 3 は相互作用が可能であることを示してきた。ここからは相互作用の概念を踏まえて、Brookes の Popper 理解の誤読を訂正する。Popper は客観的知識論について、以下の 3 点を強調する。

- (1) 世界同士は相互作用する
- (2) 世界 3 は自律性を持つ
- (3) 棄却される以前に存在する、問題（問題状況）は世界 3 の住民たりうる

この三つのうちどれか一つでも欠けていると、Popper の客観的知識論の理解は困難である。科学哲学の領域と比べ、これまでの図書館情報学における研究では、この三つを統合的に捉える視点が欠けていた^{xix}。

たとえば、Brookes は、客観的知識論を説明する際には図 2-1 の表現を行っている。

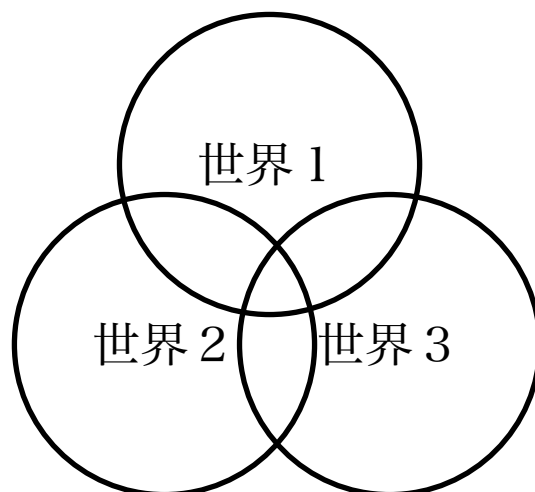


図 2-1 Brookes による Popper の三つの世界

ref. Brookes 1980=1982

このように、Brookes の説明では三つの世界が並列的に表記される。だが、この図はあきらかに誤読が見られる。なぜならば Popper は世界 3 が世界 1 に直接影響を与えているという考え方については、注意深く避けているからである。Popper は「世界 1 と世界 3 が相互作用できるのは、世界 1 と世界 3 の媒介者としての世界 2 を通じてだけである (Popper 1976=2004b:160)」と述べている。

世界同士が相互作用するということの根幹は、上記で述べたように、人間を媒介にして、物質世界の各種の物事を見つけ出したり、それを書き留めたり、あるいは逆方向として書き留められたものを人間が学び、その結果新しい事実を見つけ出したり、現実世界を（たとえば建造物などを作ることによって）変化させていくといった振る舞いのことである。Popper はこのように論じている。

世界3の理論を用いて世界1に働きかけることができるためには、ふつうはそれ以前にその理論が把握され、理解されていなければならない。しかし、理論を把握したり理解するのは、精神的なことから、つまり世界2の過程である。すなわち、世界3は通常は精神的な世界2をつうじて、世界1と相互作用する (Popper 1991=1999: 151)。

つまり、Brookes らの説明の図式はベン図を想起させるものである上に、世界1と3が直接相互作用を行っているように読めるため、以下のように書きなおすことが必要となる。

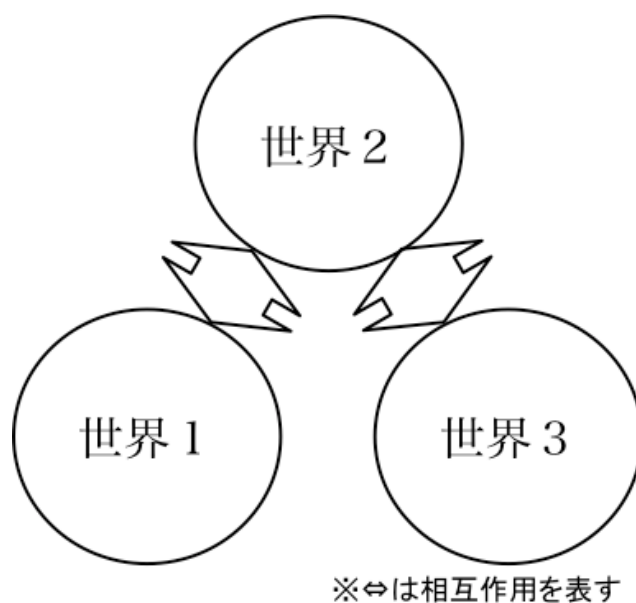


図 2-2 筆者による Brookes 提唱図の再構成

この図においては、世界1と世界3の直接的な相互作用が存在しないことが示される。ここから、世界2の存在のみが、世界3と相互作用していることがあきらかとなる。つまり、従来の Brookes の図式では、世界1も、世界3の実在の証拠になりうるという誤読に繋がりがねないと考えられる。

そして、もうひとつ、こちらの図式ならば、世界2の特権性が明確に理解可

能な形で提示できる。世界2は、世界1にも世界3にもアクセス可能な存在としての特権性を持つ^{xx}。

Popper は客観的知識論を説明する中では、世界2についてはそれほど紙幅を割いているわけではないが、世界1と3について相互作用を行う、世界2の特権的作用について Popper が認めていると考えることができる。

ここで Brookes の議論を確認する。Brookes は、客観的知識の世界を扱うことが図書館情報学のミッションだとしたものの、Brookes は計量書誌学者でもあったためか、客観的知識の世界は計測可能なものであるとして、文献生産量の測定を主眼に議論を行っていた (Brookes 1980)。つまり、Brookes の発想のなかには、「相互作用」についての考え方は優先順位の高いものではなかったといえよう。

村主は、1980 年代の客観的知識論の議論は、1990 年代における人間の認知科学の影響を受けた観点によって目立たなくなったと論じているが、同時にこのような指摘も行っている。

情報の問題を考える際に、人間の認知過程のメカニズムのみを追求していればよいのだろうか。長い歴史で、文献やデータベースというかたちで、われわれ人類は自分たちによって「知られた事柄」を蓄積している。このような側面を記述するのは、「主観的な」概念だけでなく、この「客観的知識」の概念が必要になる。

Popper の用語法にしたがって単純化すれば、認知的パラダイムというのは、subjective knowledge を重視する立場であり、objective knowledgeこそ重視する立場からは、一見すると相反する。しかし、実は先鋭的な対立点はないのではないか。(略) 実際、Popper は本来、厳密に共有されたり完全にコミュニケーションできるかどうかは問題とせず、数学のモデルから社会思想にいたるまで、共有できる可能性のある理論や概念・

観念というものを重視している（村主 1995）。

この指摘を踏まえた上で、Popper の客観的知識論の相互作用を考えると、90 年代に行われた認知過程のメカニズムについての研究は、いわば世界 2 と世界 3 の相互作用の研究として位置づけることもできるだろう。したがって 1990 年代の認知過程のメカニズムについての研究が図書館情報学の中では主流だったと言われるが、村主の「先鋭的な対立点がない」と論じるよりもむしろ実態としては Popper の客観的知識論と認知過程のメカニズムの研究は接合性がある考え方といえる。しかし図書館情報学における客観的知識論についての研究のなかで、相互作用についての言及が積極的になされなかったことによって、1980 年代の客観的知識論の研究と、1990 年代の認知過程のメカニズムを研究する研究の間に、断絶を感じさせるものであったことは指摘できよう。つまり、Brookes は、Popper の客観的知識論の自律性および相互作用の議論をそれぞれ捉えそこねていたといえる。自律性の概念を捉えるには反証可能性の議論を踏まえなければならないし、相互作用の概念を捉えるには開かれた社会の議論を踏まえなければならない。このように、客観的知識論に着目しつつも、Brookes の捉えそこねていた Popper の他の哲学の関連性に着目することで、Brookes とは違った視座の獲得が可能となる。次節ではこの点を確認する。

2.6 客観的知識論、反証可能性、開かれた社会を統一的に捉える必要性

これまで、客観的知識論は Popper 哲学の内部からは逸脱しているものではなく、反証可能性や開かれた社会と連続性を保っていることを確認した。反証可能性の議論は、客観的知識の世界の自律性に深く関わっており、同様に、開かれた社会の議論は客観的知識の世界の相互作用に深く関わっている。

つまり、Popper の客観的知識論が開かれた社会と不即不離にあるということとは、従来の客観的知識論のみに注目する図書館情報学の研究とは異なった議

論が展開しうる^{xxi}。たとえば記録物を媒介とした民主主義的な相互対話を尊重する姿勢の理論的根拠ともなろうし、図書館・文書館が社会に貢献する上での理論的背景ともなりえる可能性は持つだろう。

また Popper の客観的知識論が反証可能性と不即不離にあるということによって、記録された知はどのように棄却されていくのか議論が可能となる。たとえば蓄積された知をどのように組織化するか、どのように取捨選択するかという形において、反証可能性と客観的知識論の議論は活用が可能となるだろう。

したがって客観的知識論の議論は、開かれた社会の観点からは「オープン」や「伝達」を志向する、いわば情報や知識を拡大させる議論であると捉えうる。一方で客観的知識論の議論は、反証可能性の概念からは「棄却」という、情報や知識に対し、精査、縮小を志向する議論であると捉えうる。つまり、客観的知識論は、いわば拡大と縮小の2つの志向する性質があり、二重性を帯びた議論であると指摘できよう。

以上をまとめると、1980年代に行われた Popper の客観的知識論を導入しようとした試みは、反証可能性や開かれた社会といった概念との接続を把握せずに行われた議論であった。しかし客観的知識の世界は自律性を持ち、また相互作用をするという側面を捉えるためには、反証可能性や開かれた社会についての理解が必要となる。また反証可能性を踏まえた客観的知識論は、情報や知識を精査させ、誤ったものを棄却することを主眼とした知識論として捉えうる。同様に、開かれた社会を踏まえた客観的知識論は、知識を伝達させ、拡大することを主眼とした知識論として捉えうる。これら反証可能性や開かれた社会を踏まえた客観的知識論は、従来考えられていたような「記録された知識とはどのようなものか」という議論と比べ、記録された知識の機能を論じるものであって、より図書館情報学に対して応用可能性に富む。

そこで、「はじめに」で論じたように、現代では図書館は社会環境の変化に伴い、従来の図書館では可視化されなかった諸問題に晒されている。そこで、図

書館のミッションである知識を蓄積、あるいは伝達することの延長線上にあるものの、情報環境の激変によって可視化された現代の図書館情報学の問題を Popper の哲学を用いて論じる。

次章からは客観的知識論を踏まえた反証可能性、および客観的知識論を踏まえた開かれた社会を論じる。すなわち従来の客観的知識論そのものを対象とする議論より、より幅広い記録物を媒介とした我々のありかたの様相を論じ、図書館情報学における現代の課題と接続させる。

第三章では反証可能性が図書館情報学の問題にどのように資するかについて具体例を交えて論じる。これによって、客観的知識論と反証可能性による、記録された知識を精査する、知識の縮小的側面が図書館の実際においてどのように行われているかを論じる。第四章ではオープンアクセス運動を例に、記録された知識を円滑に伝達し、拡大することはどのように企図され、図書館情報学の実際において行われているかを論じる。すなわち、知識の拡大的側面である、客観的知識論と開かれた社会の実際がどのように起こっているかについて論じる。

^{iv} 彼はシェフィールド大学図書館長、イギリスの Library Association 会長を歴任している。

^v 1980 年代の当時、少なくともイギリスでは「情報学」は、現代の図書館情報学を指していた。

^{vi} Popper の客観的知識論を図書館情報学に導入した試みによって論争が発生した。たとえば Rudd は『本当に世界 3 は必要なのか？ (Do we really need world III?)』と題された論文 (Rudd 1983) で、客観的知識は静的な知識を扱うため、図書館情報学には便利ではないといった形で Brookes を批判している。Rudd は、客観的知識論は、人間の情報生産のプロセスを軽視していると批判した上で、「これ (客観的知識) は哲学者たちが夢見るものですが、雑多な情報科学での実際には便利ではない」と論じている (Ibid.) しかし、Rudd は、客観的知識の世界を静的な知識の世界と誤読していることは指摘できよう。

^{vii} Popper のいう世界 3 が実在するか否かには議論の余地がある。本章では Popper の文脈に寄り添って考えることを優先させるため実在の有無への問いは発しないが、世界 3 は実在する見方も可能である。活版印刷の発明前までは図書といえば基本的に手書きであっ

た。ここにおいては写本を行うものの主観が入り込むため、しばしば誤字や脱字が発生した。しかし活版印刷の発明以降、機械的に文字を生産することが出来るようになり、写本家は介在しなくなった。つまり活版印刷の意義とは「意味解釈の存在しない情報」を作り上げることに成功した点にあると述べる論者もいる（西垣 1999）。これらの情報空間的な考え方、印刷物に限らず電子情報等も大量に機械的に処理する現代社会状況があるなかで、Popper の思想は先駆的な発想と位置づけることもできる。

^{viii} この、完全な真に我々はたどり着くことはできなくとも、漸近的に真に近づいていくことができるという立場から、Popper は「批判的合理主義」の哲学者であるとされる。詳細については 2.4 および 4 章で触れる。

^{ix} 属しつつ棄却されるというのは一見矛盾するようだが、Popper によると、誤った知識と確からしい知識の間には広大なグレーゾーンがあるとされるため、Popper の議論からは矛盾しない。詳細は「反証可能性」の箇所でも触れた。

^x なお反証可能性については次節では軽く触れるにとどめ、第三章においてさらに詳述する。

^{xi} ただし本節では Popper の立場をやや単純化して記載しており、Popper は「方法論的反証主義」と呼ばれる立場であるとされるが、本論文は Popper 研究を主眼とするものではないので詳細については立ち入らない。反証可能性のより詳細な記述については第三章を参照。方法論的反証主義については Lakatos (1980=1986) を参照。

^{xii} 同時に、Popper がこの個所で行っている Marx、Freud、Adler に対する攻撃も指摘しておきたい。Popper は自らの理論を科学的と称し、また自らの理論を支持する検証が多く存在するという態度に対し、生涯一貫して攻撃し続けていた。

^{xiii} 本論文では、後の章においては Popper の哲学を図書館情報学の実際に応用させた議論を行う。ただしここで留意しておきたいのは、Popper の哲学はこのような検証があるから正しい、という議論を行うわけではない。したがって本論文は Popper が批判した、Popper 理論の「実証」として構成されるものではない。Popper の哲学を分析視座として用いることにより、より深く図書館情報学の事象が分析できるという視点に本論文は立脚する。

^{xiv} なお Popper はプラトンの賢人政治を批判する一方で客観的知識論については、プラトンのイデア論に相似すると論じている。

^{xv} Popper のプラトン批判が妥当であったかどうかは議論の余地があるといわれる。

^{xvi} 独裁主義に対する自由主義陣営の優越性の根拠として『開かれた社会とその敵』は読まれてきたが、同じく優越性の根拠として、Hayek『隷属の道』も読まれてきた（橋本 1994）。なお Popper と Hayek は親交があった。

^{xvii} ただし、『より良き世界を求めて』（Popper 1984=1995）では、全面的ではないにせよ、Popper は依然としてマルクス主義に対する批判を行っている点について言及しておく。

『よりよき世界を求めて』に収録された「大言壮語に抗して」と題されたこの書簡は、副題に（もともと公開するつもりがなかった一通の手紙）とあり、実証主義論争の後に行われた、ある手紙によるインタビューに対する回答である。Popper は Adorno の弟子筋である Habermas の難解な文章に対し、このような批判を行っている。「あらゆる知識人には、まったく特殊な責任があります。知識人には、学問をする特権と機会が与えられているのだから、仲間に対して（あるいは社会に対して）自分の研究成果を、もっとも簡潔でもっとも明瞭に、かつもっとも謙虚なかたちで説明する責任があります。もっとも悪いこと―大罪―は、知識人が自分の仲間に対して、大予言者気取りで立ちまわり、彼らを御神託の哲学で感化しようとすることです。単純、かつ明瞭に述べられないのであれば、そのような者は、沈黙して、言いたいことがわかりやすくなるまで仕事を重ねるべきです。

（Ibid.:p144）」

^{xviii} 実在の定義について、Popper は詳しくは述べていない。これは、Popper 自身が「定義」を拒否する反基礎付け主義に立脚しているためである。ただし、実在の論拠としての相互作用説を持ちだしている。

^{xix} なお相互作用説については、科学哲学の領域では指摘されている。例えば伊勢田(2006)を参照。

^{xx} ただし、Popper は論じていないものの、世界2の「我々」の範囲はどこまでが範囲なのか、という疑問を差し挟むことはできるだろう。この議論こそ世界3の実在の有無について論じるものであろう。これは認識論的相対主義、あるいは自我論、他我論といわれる領域で扱われる研究であるものの、本論文で主に扱う内容とは離れるため、深くは立ち入らない。これらについては、概念相対主義を批判した D. Davidson (1973=1989)、また Davidson を再批判した R. Rorty (1982=2014) が参考になる。とくに概念相対主義については入不二 (入不二 2009) を参照。

^{xxi} 付言すると、80年代の Popper 理論を図書館情報学に導入しようとした試みは、情報空間論などの認識主体なき情報観を図書館情報学の中に醸成するに効力があつた (村主 1996)。また、Brookes の提案は、情報空間のなかから情報を取捨選択する行為の「検索」の理論的背景と捉えられていた (Ingwersen 1992=1995)。

3 反証可能性と図書館情報学

3.1 科学的合理性に著しく反する図書を図書館はどう取り扱っているのか

本章では、Popper の反証可能性の概念が図書館情報学にどのように裨益するかを描き出す。具体的には、図書館の蔵書（すなわち記録されたもの：客観的知識）に対して反証可能性がどのように機能するのか、その結果、図書館の蔵書構成において、どのようなことが起こるのかを論じる。すなわち、従来、図書館情報学の領域で行われてきた、客観的知識論をそのまま援用するのではなく、記録された科学のふりをしているものが、科学ではない記録物として、どのように棄却されていくのか、あるいは棄却しきれないのかといった現状を描く。本章では客観的知識論の持つ二重性の、伝達の性質と棄却の性質のうち、後者の性質を捉えつつ論じる。同時に、Popper の客観的知識論以外にも、反証可能性は図書館情報学に裨益することをあきらかにする。

3.1.1 図書館の蔵書構成論と疑似科学問題

本章では「科学的合理性に著しく反する図書」を公共図書館はどう取り扱っているのかという実態を調査し、その結果に基づいて、反証可能性の概念が図書館にどのように資するのかを論じる。科学的合理性に著しく反する書籍というのはいわゆる「疑似科学^{xxii}」の書籍である。ここでは疑似科学とは何かを論じた書籍ではなく書籍で扱っている内容そのものが疑似科学のものである場合を論じる。さしあたっては「科学的合理性に著しく反する書籍」と「疑似科学書籍」は同一視する。

本章は、Popper の反証可能性のアイデアに基づいている。反証可能性は、疑似科学と科学を但し書き付きにせよ線引きのために用いる方法論であるためである（伊勢田 2003）。近年、疑似科学に対する批判が社会において緩やかに高まっている^{xxiii}。きっかけとしては 2006 年の TOSS (Teacher's Organization

of Skill Sharing：教育技術法則化運動、教師の教育方法の提唱・共有を行う活動）において『水からの伝言^{xxiv}』という写真集を肯定的に取り上げ、それが教育現場の道德の科目において導入されたことにある。これらの経緯についてはウェブ上の記事をはじめとし多くの記述が存在するため、詳細はそちらに譲る。

このような疑似科学に対して自然科学者やサイエンスコミュニケーター（科学や科学者と市民を接続する職業）からの批判は多く存在する。代表的なものとしては、大阪大学の菊池誠による活動があげられる。NHKの「視点・論点」における菊池の「まん延するニセ科学」と題された番組は、放映後、動画共有サイトに転載され、多くの注目を集めた。ほか、サイエンスコミュニケーター側からは内田麻理香による『科学との正しい付き合い方』（内田 2010）がある。内田には疑似科学に対して掣肘を加えつつ、一方で科学者や科学者サイドに立つ人間が疑似科学を貶める姿勢にも注意を払うなどのバランス感がみえる。

これらの議論が科学者やサイエンスコミュニケーターからは様々に提出されている一方、図書館界・図書館情報学界限からは疑似科学問題に対する反応は皆無に近い^{xxv}。北米においては知的自由論の関係で論じられるケースもある。後述の先行研究の系列において説明するがたとえばキノコ事典において毒キノコを可食と誤記した場合の思考実験などがあるものの、我が国においては間違った科学的知識に関する議論はほとんど見られない。図書館は知識を蓄積し、伝達する装置である以上、疑似科学、すなわち間違った科学的知識を蓄積していくことについて、およびその是非についての議論はむしろ図書館界が行なっていくべきである領域であると考えられる。そこで間違った科学的知識を棄却するための方法論に、反証可能性を求めることができる。

本章では疑似科学の図書に図書館が実際にどう対応しているか、インタビュー調査に基づきあきらかにする。つまり本章は、図書館はどのように疑似科学図書を取り扱うべきかという問題解決アプローチは採用せず、どのような状況に図書館は現在晒されているか、という現象を把握する問題発見アプローチを

採る。

最も単純なものとして、図書館に疑似科学図書を入れるか否かについて論じると、この議論は図書館情報学における「選書論」の領域に属する。選書論という用語は他に「図書選択論」、「コレクション形成論」と、さまざまな呼び方がある。これは図書館が取り扱う資料が時代とともに多様化したことと、個々の図書の選択からコレクションとして図書館蔵書を考える、といった時代による変化があるように思われるが、本研究の対象とするものはあくまでも「疑似科学図書」であるため、さしあたって本章では選書論という語を用いる。

図書館における選書論の再検討については、いくつかの理由により繊細な配慮が必要とされる。理由の一つとして、戦前の公共図書館^{xxvi}は思想善導のための社会教育施設であり、検閲機能を持つ機関であったという背景があるとされる。そして、戦後の図書館は思想善導機関への反省に立脚しているということとはよく知られたところである。たとえば、明治一五年、文部省は「示諭事項」において、図書館の蔵書選択方針について「要件中ノ重要件」として各地にこのような通達を行なっている。

善良ノ書籍ハ乃チ善良ノ思想ヲ傳播シ、不良ノ書籍ハ乃チ不良ノ思想ヲ傳播スレハ即チ不良ナルモノヲ排棄シ而シテ其善良ナルモノヲ採用スルヲ要スルナリ。(略) 其學校生徒庶民ノ為メニ設ル所ノ書籍館ニ準備スル書籍ニ至テハ殊ニ然リトナスナリ (略) 不良ノ書ハ読者ノ心情ヲ攪擾シ、之ヲシテ邪徑ニ誘陷シ、遂ニ少ニシテハ身家ヲ滅亡ヲ招致シ、大ニシテハ邦国ノ安寧ヲ妨害シ、風俗紊乱スルカ如キ、其流弊タル実ニ至大ナリト謂フヘキナリ^{xxvii}。(国立教育研究所第一研究部教育史料調査室編 1979:110)

このような志のもと、思想善導機関として、戦前の図書館は存在していたという見方が一般的である。このような過去がある以上、現代の図書館において

は、特定の知を排除し、あるいは推奨することは、一種の忌むべき行為になっているとっていいであろう^{xxviii}。

また「図書館の自由に関する宣言」（日本図書館協会 1979）において述べられている資料収集の自由と資料提供の自由の文章が、選書論に関する大原則となる。図書館の自由に関する宣言の下で活動する以上、疑似科学図書の収蔵や提供は理念上、正当化される。それゆえに疑似科学図書を図書館に入れるべきではないという議論は、一見、図書館の自由に関する宣言に対立するように見える。一方、予算の制約のある中小の市町村立レベルの資料選択においては、通常の図書を差しおいて積極的に疑似科学図書を収蔵するのを肯定する理由はどこにあるのかという疑問も同時に成立する。ただし往々にして「図書館の自由に関する宣言」が問題として顕在化する状況は、人文・社会科学的知識においてであるということは指摘しえよう。この点については次節で述べる。

ともあれ、図書館の資料収集は公平であるべきであると金科玉条的に論じるのではなく、本章では現実的にどのように理想とのすり合わせが起こっているか、ということを論じる。

3.1.2 本章における疑似科学の捉えかた

本研究では、科学のふりをしているけれど科学ではない疑似科学について、とりわけ、科学的手続きを経していないにもかかわらず科学のように自らの見かけを装っている図書を中心に取り扱っていく。疑似科学を批判する文脈においては、批判的価値のニュアンスを持つ「エセ科学」あるいは「似非科学」が用いられるケースが多い。付言するが疑似科学・似非科学と非科学はその語の指示対象は異なる。第二章の客観的知識論と反証可能性の繋がりで見たとように、非科学は端的に科学ではないものであり、善的知識、美的知識、宗教的知識なども含まれており、この語には Popper の議論の文脈からは排除の語としてのニュアンスはない。

これらの資料の収蔵の是非について論じる際、即座に提出されるであろうものの、図書館の自由に関する宣言の 1-2 に記述されている、“多様な、対立する意見のある問題については、それぞれの観点に立つ資料を幅広く収集する”は外すことができない。たしかに宣言のこの箇所は、人文科学ないしは社会科学領域における多様な対立的意見がある問題については考慮されるべきであろう。しかし自然科学分野においてはその「多様な対立的意見」が人文・社会科学と同様な意味で成立するか否かは議論の余地があるように思われる。なぜならば、科学ないしは科学者コミュニティは「合理的」に進歩するというある種の期待がある。言い換えれば、科学（あるいは科学的知識）は「体系」を目指すものであり、「あきらかに誤った知識」を排除するプロセスであるともいえる。

もちろん、前述のように科学は体系性を求めるがゆえに自浄作用が働くというのは、ある種の楽観的な観測にすぎないという批判は成立する。たしかに各種の科学者コミュニティがある種の政治性のある背景を持ち動いていることは、さまざまな科学論者が繰り返し論じているところであるし、ルイセンコ学派やナチスのアーリア人優越主義に見られるような「科学的知識」が政治に利用された場合のディストピアについて論じる論者も多くいることは事実である。しかしだからといって科学は時代や文化によって相対的であり現在の科学の真実性など何一つ担保できないと論じる、ある種の「ポストモダン」の相対主義者の断言は図書館の現状を捉えるには適切ではない^{xxix}。

したがって多様な意見が担保されるべき人文・社会科学分野と異なり、自然科学的な知識においては誤った知識の蓄積については、図書館における必要性の様相は違うのではないだろうか^{xxx}。むしろ、あきらかに間違っている知識を伝達することを図書館が積極的に行うとしたら、それは、図書館は知識を保存・伝達する機関といつつも、社会的責任を放棄していることと捉えうる^{xxxi}。

もちろん図書館の規模や館種（たとえば研究者向けの図書館）によっては誤った知識の図書を積極的に所蔵していくことはむしろ推奨しうるものであろう

し、追試等のためには先端的な研究領域における誤った知識はむしろ有用な知識とも言える。

しかし一方で科学的手続きをあきらかに踏んでいない、科学者コミュニティを満足させる水準にない図書等を、先端的な研究による誤った生産物と同一視することは困難である。科学の手続きを踏んだにもかかわらず「誤った科学的知識」とあきらかに科学的手続きを踏んでいない「誤った科学的知識」は語の表現は同一であるが指示対象は大きく異なる。

本章において対象とするのは後者の疑似科学である。科学哲学者の伊勢田哲治は疑似科学そのものの字面から疑似科学は（１）科学のよう：自分たちがやっていることは科学だと主張している、用語やプレゼンテーションの仕方に科学の装いをまとっている（２）科学でない：科学者たちによって科学と認められていない、客観的に「科学」としての条件を満たしていない の二点があるとしている。またその理論が疑似科学か否かについては個々の判断においては具体的な基準に照らしているというより直感的に判断されているというのが実情であると指摘している（伊勢田 2011）。なお伊勢田は疑似科学の説明のために具体的な事例として、「創造科学と ID 説」、「水からの伝言」、「ゲルマニウム健康食品」、「神経神話」をあげている。ID 説とはインテリジェント・デザイン（Intelligent Design）の略で、何らかの知性ある存在によって宇宙や人間などが設計されたという説、神経神話（neuromyth）とは、実験結果の誤った解釈や飛躍した発想からなる根拠の乏しい脳科学の説のことである。

とくに北米においては公教育の場で ID 説が進化論と同時並行で教えられるなど問題化している。学校図書館と ID 説については、M. K. O'Sullivan と C. J. O'Sullivan が報告を行なっている（O'Sullivan, M and O'Sullivan, J 2007）。ミネソタ州の高校の蔵書の構築をテーマにしたこの論文は、ID 説を信奉した図書を選択するか否かについて、学校図書館側は ID 説信奉者の戦術には対抗できていないと報告している。しかしながら我が国では ID 説は問題視されるほ

ど広まっているわけではないし、また ID 説は往々にして背景に宗教的思想が介在するために、自然科学的様相と同時に人文・社会科学的様相を複合的に纏ったものである。ゆえに ID 説といった宗教的背景を持つ疑似科学問題については別稿に譲り、本章では科学のふりをしているけれど科学ではないもの限定して論じていく。次節では、本章の資する研究の系列である、選書論あるいはコレクション形成論といわれる領域の先行研究を素描する。

3.1.3 本章における先行研究

本節では、「選書論」および「図書館の知的自由論」に関する最低限必要だと思われる先行研究を紹介する。

まず、選書論の動向を歴史的に俯瞰したものとして、河井による『アメリカにおける図書選択論の学説的研究』（河井 1987）がある。これは川崎が「日本における図書館学の最高峰」（川崎 1988）と称するように、註、引用文献だけで 63 ページにもわたる、幅広い議論をまとめあげた浩瀚な労作である。この河井の議論に大きく依拠し、Bourdieu の象徴的権力論に触れながら議論をまとめあげているものに、安井による『図書館は本をどう選ぶか』がある。安井によると、公共図書館における図書選択とは、私設の図書館とは異なり、自らは利用者に属さない図書館設置者が利用者に代わって行う代理行為であるため、「図書選択論」が要請されるという。

図書館史的に辿ってみると、たとえば図書館員は情報の「検閲官」であるべきであるという 20 世紀初頭の Bostwick の議論や、あるいは疑似科学図書の収蔵は控えると宣言している、1959 年の Akron 図書館の資料収集ガイドライン（Akron Public Library 1959）、さらには図書館の「知的自由 対 社会的責任」論（Samek 2001=2003）の先行研究や事例などは参考になる。

河井・安井らの指摘において重要な点は、現在の我が国の図書館界では未だにしばしば言われる、要求論・価値論という二項対立は、アメリカにおいては、

すでに 20 世紀初頭において提出されているという状況の紹介である。安井は「カーノフスキーの業績で最も有名なのは、「価値論」と「要求論」を対立的に定義づけ、1890 年代に前者から後者への推移が起こったと指摘したことである」(安井 2006: 13) と述べている。

このようなアメリカにおいて、100 年近く前にはすでに要求論・価値論という軸が提出されたことを河井らが指摘していることをおさえつつ、翻って我が国の選書論を現代から過去にたどりつつ、素描していこう。

2012 年の選書論のレビュー論文としては、山本、あるいは前述の安井によるものがある。2000 年代において目を引くものには、図書館のベストセラー提供問題をきっかけとしつつ、要求論の理論の再構築を目指した根本(根本 1994)がいる。1990 年代の選書論については、利用者のニーズを全面肯定する立場の伊藤、山本らによる、「現場」の意見を背景とする『本をどう選ぶか』がある(伊藤・山本 1992)。また今もしばしば引用されるものに、三浦らによる『コレクションの形成と管理』(三浦 1993)があげられる。『現代の図書選択理論』の収録論文として、伊藤・山本らは「1970 年以降の公立図書館図書選択論」(伊藤・山本: 1989)と題した文章を書いている。加えて、『市民の図書館』(日本図書館協会 1970)、『中小都市における公共図書館の運営』(日本図書館協会 1963)が我が国の図書館に果たしたとされる役割については論を俟たないであろう。

さらに論者によっては、自説の正しさを補強するために他の議論を貶める論理展開を行うものも多く^{xxxii}、現在の図書館情報学においては客観的な視点で選書論の流れを把握することは困難に陥っているとされる。事実、安井は、

(図書選択論の論者による) これらの相異なる記述には、言語行為論が指摘するパフォーマティヴ(行為遂行的)な性質があるのかもしれない。…その記述によって読者の認識を「望ましい」方向へ誘導しようとするも

のだとも見ることができる。(安井 2006: 23-24)

と指摘している。たしかにこれまでに行われてきた言説はいくつかにおいては参考とすべき点もあるが、一方で図書館界においては、感情的かつ自己の「信念」を発揮するための記述が数多くなされてきていることは事実であろう。たしかに先の「パフォーマティヴな性質」についての安井の指摘は、本章にもあてはめうるものである。ただし本章では実際の図書館ではどのようなことが起こっているか、という現象を把握し、価値中立的に問題の所在をあきらかにする手法をとるため、安井の指摘からは距離を置いていると念のため付言しておく。

先で紹介したレビュー論文等ではそれほど指摘されていない、現在の選書論にかかわるであろう論争としては、2004 年から数年間に亘って行われた、『図書館界』誌上の討論があげられる^{xxxiii}。2004 年 9 月号から「現代社会において公立図書館が果たすべき役割は何か」と題する特集は、数年間にわたっての論争を巻き起こした。『『市民の図書館』を歴史的にどう評価するか』『貸出中心のサービスを発展させるのか転換させるのか』『現行の資料購入のありかたをどう考えるか』という 3 点をポイントにし、論文やコメントを募ったものである。2004 年 9 月の 56 巻 3 号、2005 年 3 月の 56 巻 6 号、2005 年 11 月の 57 巻 4 号、2007 年 1 月の 58 巻 5 号、2007 年 11 月の 59 巻 54 号の、5 回にわたった特集においては研究者、現場の図書館員、現場経験のある研究者らから多くの持論や批判等が寄せられ、百家争鳴であった。たしかに個々人の主張には汲むべき点が多くあるのは事実であるものの、論争が噛み合っていない点は指摘できる。事実、根本は、『理想の図書館とは何か』の第 8 章において、以下のように論争を振り返り、種々の感情的な意見を切って捨てている。

公立図書館をめぐる「論争」の「当事者」としてひとまず思うのは、筆者

自身の役割はひとまず果たせたのではないかということである。というのは、若い人たちに図書館改革の課題を引き継ぐのが筆者の目的であり、それができつつあるのではないかと考えるからである。……筆者の主張（第七章）を積極的に批判した人たちは、基本的に 1970 年代から 90 年代にかけての図書館サービスを率先して引っ張ってきた人たちであり、大方はすでに現役の図書館員ではない。……彼らの主張は、当時のやり方でうまくいっているのだから大きく変える必要はないというものである。筆者は、その当時の論理はもはや通用しないから新しい論理が必要だと述べたので、すれ違わざるを得ない。（根本 2011: 132）

選書論の先行研究をまとめると、図書館がいかにして本を選択するかという議論は膨大かつ様々な見方が存在するため、理論の「正史」を描くことはきわめて難しいということがいえる。しかしあえてそのなかでの構図を取り出すと、戦前の図書館で主流であった、利用者に良書を届けるのが使命であるという「価値論」に反省・反対し、利用者の要求を最大限に叶えることこそが図書館の使命であるという「要求論」がある。これは 1990 年代当時、第一線で活動していた現場の職員によるものが多い。一方、図書館では予算が限られている以上、図書の選択については優先順位を付けざるを得ないという研究者による論も存在する。この二者は往々にして論争を引き起こしている。

いずれにせよ、選書論の流れを捉えるといった研究は本章の主たる目的ではないため、詳細な選書論の枠組み自体については、以上で紹介した先行研究のレビュー部分あるいはそれぞれの文献リストに譲る。

以上、図書選択論の先行研究における、利用者のニーズがあればどのような本であっても届けるべきであるという要求論と、図書の選択には優先順位を付けざるをえないという反論の構図を紹介した。一方で本研究が注目する、「図書館の知的自由論」についての研究も、いくつか紹介する。疑似科学の図書を図

書館でどう扱うかという問題は、図書館における資料収集・提供の自由と、一方で偽の知識を伝達して良いのだろうか、という社会的責任論との衝突の場となりうるからである^{xxxiv}。つまり図書館は利用者の知的自由を守る存在か、それとも社会的責任を負っているために積極的に特定の図書を推薦すべきか（あるいは議論そのものはほとんど見られないにせよ、その裏返しとして、理念的には不適切な図書をいかにして取り扱うか、ということも考えられる）という構造がある。すなわち、資料収集・提供の自由を極力重視する立場を採れば、図書館はいかなる図書であつても提供すべきだという議論に繋がり、社会的責任を重視する立場を採れば、図書館は社会的装置（しかも教育的施設）の一部であるから、誤っている知識を取り扱っている資料は提供すべきではないという議論に繋がる。この二者のせめぎあいを論じる。

先の選書論の先行研究と同様に、知的自由論に関しても膨大な先行研究が存在する。これらを逐一紹介することはとうてい不可能であるため、4区分に基づき和書を紹介する^{xxxv}。

表 3-1 図書館の知的自由について取り扱った図書

区分	説明	代表的な先行研究例
教科書、ガイドライン	図書館情報学を学ぶ学生、あるいは実務に携わる図書館員向けに書かれた対応事例等を記述したもの	<ul style="list-style-type: none"> アメリカ図書館協会知的自由部『図書館の原則 図書館における知的自由マニュアル第3版』 河井弘志『蔵書構成と図書選択』 三浦逸雄,根本彰『コレクションの形成と管理』 日本図書館学会研究委員会『現代の図書選択理論』 <p>ほか,いくつかの司書課程の教科書など</p>
事例集: ケーススタディ	図書館の知的自由が脅かされた事例を紹介。図書館における知的自由の理念とは何か、という理論を構築しようと試みる事例集であり知的自由とは何かという理論的面までは踏み込まない	<ul style="list-style-type: none"> 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会『図書館の自由に関する事例 33 選』 J. アンダーソン『図書館の自由と検閲』 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会『表現の自由と「図書館の自由」』 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会『図書館の自由に関する事例集』 日本図書館協会図書館の自由委員会『図書館の自由ニューズレター集成』

		<ul style="list-style-type: none"> 日本図書館協会図書館の自由委員会『図書館の自由ニューズレター集成2』
事例的アプローチ：帰納	図書館の知的自由が脅かされた事例を紹介し、図書館における知的自由の理念とは何かという理論を構築しようと試みるもの	<ul style="list-style-type: none"> シャーリー・A・ウィーガンド「現実の一撃:レトリック、権利、現実の衝突と『権利宣言』『図書館の権利宣言を論じる』」 塩見昇『知的自由と図書館』 トニ・セイメック『図書館の目的をめぐる路線論争』 川崎良孝『図書館の自由とは何か』
理論的アプローチ：演繹	図書館の知的自由の理念から、現実起こってしまったり、あるいは起こりえるであろう事例を対象に分析	<ul style="list-style-type: none"> 山下信庸『図書館の自由と中立性』 根本彰「選択か?、検閲か?」『収集方針と図書館の自由』 渡辺重夫『図書館の自由と知る権利』 渡辺重夫『図書館の自由を考える』 <p>など</p>

以上の区分は便宜的なものであり、複数の区分にまたがるものもある。また主として図書館の選書および知的自由を主題とした図書を列挙したが、無論、網羅的なものではない。

本節では、なぜ疑似科学問題を取りあげるのかという下地作りのために「選書論」および「図書館の知的自由論」に関係する先行研究を紹介した。しかし、図書館と疑似科学図書の問題を正面から取り扱った文献の存在はそれほど見当たらない。なぜならば、先行研究では、差別、犯罪、プライバシー、警察権力、

ポルノグラフィ、政治思想といった諸問題に関係する課題が取り上げられることが多い。つまり我々の知識を人文科学・社会科学・自然科学に関するものと区分した場合、図書館の知的自由に関する議論は、人文科学および社会科学のみに注目としているといえる。ゆえに、自然科学についての「疑似科学図書」をいかにして図書館で取り扱うかという事例や、あるいは思考実験すらほとんど存在しない。

我が国でも、図書館の自由に関する宣言の文中にある「資料提供の自由を有する」に抵触するとされた、科学的合理性に反した図書についての事例は存在する。これは 1989 年に出版された遠藤周作の対談集『こんな治療法もある』に関する事例である。

同書は、正当医療とは認められていないが、少数には効果があったように思われた医療法を紹介した図書である。まえがきには「(この治療法は)『絶対的』だと思えないでいただきたい」と断り書きがあったとともに、さらに治療法について注意喚起を行っていた。しかし同書内で紹介した治療を受けた読者から、副作用が出たとの苦情を受け、出版社は同書を 1992 年 7 月に絶版にするとともに、1992 年 8 月、全国の図書館に同書の閲覧・貸出の禁止を要請した。

これに対し、図書館問題研究会は会長名で、閲覧及び貸出の禁止要請は国民の知る自由を侵害するものとして抗議文を送付した。版元も、図書館への説明文のうち、どの内容を具体的に問題視し、絶版を決定したのかの説明を省略していた。そのため、図書館問題研究会の危機意識にならって除架・除籍を行わなかった図書館は多く存在した。一方でマスコミが大きく報じたこと、医療関係書籍であること、出版からかなりの年数が経っていることを理由に、同書を除籍した図書館も存在した。結局のところ、日本図書館協会の図書館の自由委員会は、読者には、書籍の内容についてリスクを含めてどう評価するか判断が委ねられているため、安易な図書館からの除籍を拒否する姿勢を薦めている。

本件に関し、図書館問題研究会は翻訳本の誤訳に対する発売元の責任が問わ

れた訴訟において、書籍の内容は読者の側に判断能力があり、読者の良識で選択がなされるべきであるとの判例を裁判所が示したことを引用し^{xxxvi}、図書館は読者の判断力に全てを委ねるべきという方針を提示している（日本図書館協会図書館の自由委員会 2008）。

ただし図書館問題研究会の方針に端的にあらわれているように、本件については、科学的（つまり、医療に関する）知識が問題になっているにもかかわらず、翻訳本の誤訳と同一視していることは指摘できよう。もちろん図書館内部に蓄積された知識をすべて一つの水準とみなし、図書館が自然科学的知識と人文社会科学的とを同一視する姿勢をとることはひとつの見識である。しかし反証可能性の概念からすると、自然科学的知識と人文社会科学的知識の質の差から、同一視は困難であると考えられる。

すなわち、Popper の反証可能性の概念をあてはめると、人文社会科学的な知識（社会的知識）については、反証可能性は発動せず、棄却されるプロセスは生成しない^{xxxvii}。一方で自然科学的知識（科学的知識）については、反証可能性によって、疑似科学として棄却すべきプロセスが生成する。

したがって後世から見た場合の後付けの枠組みではあるが、従来の自由宣言を適用していた領域と、実はそうでない部分についての領域を切り分けて考えてみたい。図示すると以下のようなになる。

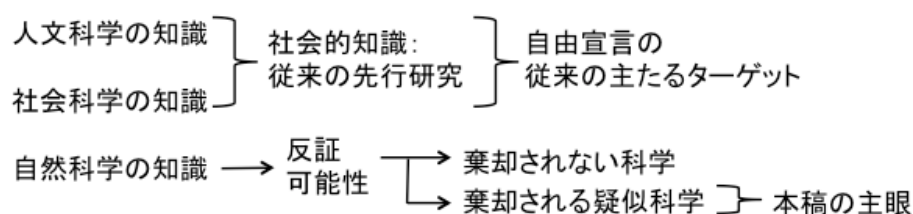


図 3-1 これまでの議論と本章の主眼

一方、海外の、あるいは邦訳された図書のなかには、誤った科学的知識を取

り扱った図書に対した場合の、1、2の事例が存在した。たとえば、先に紹介した毒キノコを可食と誤記した場合の思考実験 (Wiegand 1996)、あるいは、「カロリーが問題じゃない」 (Anderson 1974=1980) と題された文章は、本章における疑似科学図書と図書館を考える上で手がかりとなるものである。この文章はある大学図書館の書架に、あきらかに間違った知識を記載した食物栄養学の図書が存在し、それを批判する準教授 [sic] への対応、および、その図書にニーズのある学生の対応を図書館員はどうすべきか、という思考実験を行う教科書である。しかしこの事例は、「関係者の立場を守るため、カモフラージュされており実在の事象と類似があったとしてもこれは全くの偶然である」、とまえがきで断りを入れている。またさらに、これは答えを提示しないスタイルであり、あなたが館長の立場だったらどうしますか、という質問で終わっている。

また目を引くものに Collection Management 誌に収録された Graham Howard による“Pseudoscience and Selection” と題された論文がある。これは図書館の選書について、本章も依拠する反証可能性の議論を下敷きにしている。

Howard は以下のように指摘する。科学には科学たらしめる客観的な規準が存在する。Howard によると、客観的な規準は反証可能性によって担保される。一方で客観的な規準を完全にあてはめると図書館の蔵書構成が常に利用者に「正しい」ものを押し付けかねない「帝国主義的」な面に接近しうる。そこから逃れるためには社会構成主義を下敷きにすることで非エリート的、民主的な図書館像を目指すことが可能という。しかし一方でその立場では普遍的な蔵書選択の規準が喪われうると Howard は述べる (Howard: 2005)。

以上、Howard が示唆するように、疑似科学と図書館の蔵書というのは、利用者のリクエストがあるから疑似科学図書も蔵書とすべきである、あるいは科学の体系に反するので棄却すべき、といった単純な二分法に留まらず、思想哲

学的な議論につながっており、はるかに混みいった議論が必要である。ただし Howard の議論は、反証可能性の議論や社会構成主義といった理論的な面を紹介しているものであり、現実の図書館・図書館員がどのような判断を行なっているか、という実務面にまで踏み込んだものではない。

以上のように、図書館の選書、あるいは知的自由に関しては、数少ない例外を除いて、膨大な先行研究が存在するにもかかわらず、疑似科学図書に関する図書館の議論はほとんど存在しないか、あったとしても社会的知識と同一視している、あるいは、思考実験といった水準にとどまっている。言い換えると、疑似科学に関する図書選択に関しては、先に述べた4区分のうち、(1)、(2)のような事例として単発で見られるのみで、指針の策定や対応時の根拠策定といった理論化・一般化まで行われた議論は存在しない。

先行研究における議論では、実は社会的知識に関する図書の取り扱いがこれまでは主であった。しかしながら、疑似科学問題を図書館で捉える際には、さまざまな困難も存在する。

科学的知識に関する図書を図書館の蔵書として所蔵する際に、科学的知識を扱おうと社会的知識を扱おうと、同じような水準で取り扱うべきであるという考え方は当然可能である。科学的に間違っているから本書は図書館に入れるべきではない、という議論は、容易に社会的知識に関する本をも排除する議論に敷衍しうる。したがってこのような図書を区別するような議論はすべきではないという論法は成立する余地がある。

たとえば、伊藤らは、図書館の利用者のニーズを徹底的に応えていく図書選択論を進めていくなかで、

この論法（筆者註. 利用者のためではない、図書館の「目的」からはじまる図書選択論）ではビニール本が、例えば、マンガやハーレクインに替えられても何もおかしくない。（日本図書館学会研究委員会編 1989: 47）

と批判し、図書館がいわゆる「良書」を利用者に押し付けることへの忌避感を繰り返し唱えている。

このようにある面では知的自由を擁護し、利用者の要求を推し進めた幾人もの論者が果たした功績は大きい。繰り返しになるが、本章は図書館からは〇〇の本を排除すべきである、とは主張しない。社会的知識に関する知識は、図書館において、多元主義的にさまざまな形で提供されるべきであるという立場に完全に賛同する。一方で科学的知識が社会的知識と異なった性質を持つ可能性がある以上、社会的知識とは異なった取り扱い方がありえるのではないかという観点のもと、疑似科学の図書を図書館はどう取り扱っているのかについて、インタビュー調査を行った。

3.1.4 反証可能性の蔵書構成論への適用可能性と限界

本項では疑似科学を捉える上で反証可能性の重要性を論じると同時に、反証可能性は必ずしも蔵書構成論に全面的に資するとは限らない点をあきらかにする。すなわち、反証可能性は新たな蔵書構成論を考案する上での一つの手がかりであることは間違いないが、同時に図書館の蔵書構成論に全面的に援用するには限界があることを論じる。反証可能性については 2.3 で素描したものの、客観的知識論の自律性を議論する上で必要な範囲の紹介にとどまっていたため、ここではさらに本章で必要な観点から、反証可能性の特性について更に論じる。よって、ここからは、本章が依拠する理論的背景を素描しつつ、同時にその限界をも指摘する。

反証可能性は、端的に言うと、科学と非科学の境界設定を目的とする方法論である。科学は「そのもの自らが間違っている」というテストを考案できるが、非科学は、それ自体を否定するテストをもたない、というものである。このように、自らの反証を考案することができるかどうか、科学とそうでないもの

の区別する特性であると Popper は論じている。また強靱な科学的理論とは、自らが間違っているというテストに耐え続けたものである。ただしテストに耐え続けたからといって、絶対的な「真」には到達できないという点が Popper の考える、科学的理論の特性となる。以上が反証可能性の概略であった。

テストにどれだけ耐えても真であると言い切れないのと同様、ある科学理論が疑似科学でない、科学理論であるという決定的な証拠は絶対に証明できない。しかしテストに耐え続けた理論ほど、強靱な理論であることが示される。これは漸近的に真理に近づいていく方法論である。その点で Popper の思想は、われわれは必ず誤りうるという「可謬主義」と呼ばれる。

反証可能性の概念によって、Popper は帰納の持つ全称命題の導出不可能性の議論を解決し、ウィーン学団がはまり込んでいた袋小路から抜け出すことが出来たと主張する。Popper からすると、論理実証主義者は、個々の要素を検討しているために問題が起こるわけである。Popper はこれら、論理実証主義者の問い方の水準をずらしたと考えることが出来る。全称命題を帰納から求める、つまり検証するためには、全ての事例を調べなければならないが、反証を求める作業はすべての事例を調べる必要はない。全てのスワンが白いと調べることと、ある日、黒いスワンを見つける作業を行うこととは、作業量が非対称的である。これは「検証と反証の非対称性」と呼ばれる。

ここにおいて、黒いスワンを見たからといって、即座に「スワンは白い」という理論が棄却されるわけではないことに注意しておくべきである。反証があるかないか、ではなく「反証可能性」があるかないかによって科学的理論か否かが決定するというのが、Popper の論じる観点である。「黒いスワンを探すことが出来る」という点においては反証＜可能性＞が含意する水準であり、黒いスワンを見つけたか否か＜反証＞が存在したか否かの水準である。この二者の区別はきわめて厳密に峻別すべきであるというのが Popper の主張である。この場合、黒いスワンを発見した、という事例があっても、スワンが白いという

理論は、即座に棄却されるわけではない。ただし「スワンは白い」という理論は「絶対的」ではなくなる。

Popper の議論は多くの誤読にさらされてきた。これについては『批判と挑戦』（小河原編 2000）に詳しい。とくにそのなかで論じられる、Popper の反証可能性を踏まえる上で重要な点としては、反証可能性は科学と疑似科学を単一の線で峻別する厳しい方法論ではないことを指摘しておく。

たとえば、水に「ありがとう」というと綺麗な結晶となる、というものを「科学的理論」と称するかぎり、これは現段階の科学の水準から言えば、間違いなく疑似科学の領域に属する。ただし Popper は、反証がひとつ見つかったからといって、即座にその理論を放棄するように働きかけるといった、反証可能性を単純に厳しい方法論に落としこむことは忌避している。反証が見つかるということは、その理論体系の「どこかがおかしい」という目印となる。科学と疑似科学の境界には単純な線引きがあるのではなく、その間には広大な「グレーゾーン」があるとされる。たとえば、まだその真理性が確定し得ない最先端の議論や、あるいは実験装置や理論の発展に伴い、過去、疑似科学的とみなされてきたものが改めてすくい上げられるケースが存在するからである。彼は「なぜ疑似科学でさえ有意義なのか—科学のための形而上学的プログラム」と題された一節で以下のように書いている。

たとえば、潮汐を月によるものとする理論は、歴史的には占星術的言い伝えの末裔である。ニュートンによってそれが受け容れられる以前は、この理論は占星術的迷信の一例として、ほとんどの合理主義者によって拒否されていた。ところが、ニュートンの万有引力の理論が示したのは、月が、「月下の出来事」にも影響を及ぼしうるということだけでなく、月より上の天体のいくつかも、アリストテレスの説とは反対に、重力による引きの影響を地球とか月下の出来事に及ぼすということであった。(略)ここには、

疑似科学理論をもてあまして追いだしてしまうと、このうえなく重要な着想がいかにも簡単に失われてしまうかが示されている。(Popper 1983=2002 :264-265)

またたとえばニュートン力学は Einstein による相対性理論によって反証された、という事実は Popper も認める。しかしだからこそ、ある妥当範囲内(たとえば光速のある一定範囲以内)において、ニュートン力学は安全に用いることができる理論であると Popper は考える。したがってなにからなにまで間違っている科学は疑似科学としてひとまず棄却するにせよ、Popper は科学の水準の進捗によっては再評価されうる事実が存在することを認めている。一方で現実的には自らに対する批判に対して容易に言い逃れを行う、あるいは、自らへの反論を受け付けない独断的態度については、彼はこれをまったく科学的ではないと退ける。

たとえば、Popper の批判者は、1905 年に Einstein によって解かれた水星の近日点移動を例にあげる。

楕円軌道で回る天体が最も太陽に近寄る位置のことを近日点という。水星の近日点は、古典力学における計算と実際の観測データでは 100 年あたり 43 秒の誤差が生じていた。したがって 19 世紀の天文学者らは、水星よりもより内側の軌道に未発見の惑星(バルカン)があると考えた。しかし一般相対性理論によるとそれは否定され、水星は太陽のごく至近を回っているために、重力の影響により時空が歪むために、観測との誤差が生じていたと説明される。さらに、一般相対性理論の計算結果は観測数値のずれを説明することに成功した。つまり、光速に近い領域や巨大な重力場のなかでは古典力学で扱いきれない事例が存在し、その特徴的な例が水星の近日点移動である。

Kuhn らは古典力学においては既に「謎」として知られていたその問題を、古典力学の反証例と捉え、反証が実際に一つみつかったといって、Einstein が

水星の近日点移動の謎を解くまで、古典力学は正しいものとして受け入れられ続けていたことから、反証には理論を全て覆す力はないと論じる。しかし Popper は、そのようなアノマリ（原則では説明できない逸脱事例）は理論体系全てを棄却するものではなく、我々が現在受け入れている理論体系のどこかがおかしいことを示す有効な指標として用いることができるのだと反論する。すなわち、ここでも Popper の反証可能性は、何か説明のできない事実があったからといって、その理論の即座の棄却を要請するものではないことが示されている。したがって何から何まで間違っている、たとえば本節での議論となったきっかけである『水からの伝言』といった図書はひとまず疑似科学として棄却するにせよ、Popper の反証可能性は、何か説明のできない事実があったからといって、その理論の即座の棄却を要請するものではないことが示されている。つまり、Popper による境界設定問題は、専門的訓練を受けた科学あるいは科学者コミュニティにおいては一定の有効な機能として働きそうであるが、図書館の実際に落とし込んだ際には、一部では参考になるには間違いのないにせよ、全面的に機能しうるとは考えにくい。すなわち、Popper の反証可能性は科学者コミュニティ、あるいは科学理論といった専門的な訓練を受けた人々のなかでは有効に機能しうると考えられるものの、現代の図書館の状況に対しては反証可能性が全面的に資するとは限らないことは指摘できよう。

たとえば、Gibbons は現代の知識生産の過程が変容しつつあることについて、「モード論」という議論を提出している。Gibbons はこう書く。

変化は、知識生産の伝統的モードとならぶもう一つのモードの発生として記述される。われわれはそれをモード2とよぼう。モード1ともよぶべき伝統的知識が、ディシプリン（個別学問領域）の本来認知的なコンテキストのなかで生み出されることと対照的に、モード2の知識は、より広いコンテキスト、トランスディシプリナリな社会的・経済的コンテキストのな

かで生み出される。(Gibbons 1994=1997: 20)

つまりモード論は、現代の知的生産の場は、「象牙の塔」たる伝統的な大学のそれに限らず、社会のさまざまな領域によって行われ、またそれが拡大していると主張する。ここからは、科学あるいは科学者コミュニティといった「狭い領域」においては斬れ味の鋭い反証可能性の議論は、必ずしも現代の知の生産状況を射程内に全て収めているわけではないことが示唆される。たとえば伊勢田は、モード2科学の台頭によって科学の多様化が認められ、また市民の持つローカルな知がそこに取り入れられつつある以上、科学とそうでないものを一律の基準で区別する理由は減ったように見え、境界設定問題は最近あまり論じられなくなった、と指摘する(伊勢田 2010)。

しかしだからといって反証可能性という考え方を全て放棄するわけにはいかない。伊勢田は、モード2科学が台頭し、知の利用のされ方が多様化しつつある現状を踏まえての議論を再度改めて考える必要があるがゆえに、個別的な境界設定の重要性を唱えている。その際の手がかりとなる概念として、反証可能性を求めることができる。このような試みとして、前述の Howard の議論を位置づけることも可能であろう。

したがって図書館も多様化する知的世界と向き合うことを望むのであれば、従来行われていたような要求論-価値論といった二項対立の軸の選書論の議論を超えて、今後の課題として改めて選書論・蔵書構成論に向きあう必要が出てくるようにも思われる。そのための新たな蔵書構成論の視座として、疑似科学図書を蔵書とすることに対し、反証可能性がどのように活かされるかを調査し、論じることとする。

以上をまとめると、Popper の反証可能性は、間違った内容が含まれているからといって即座にその理論の放棄を要請するような単純な方法論ではなく、見かけよりもはるかに込み入っている。よって、図書館において、間違ってい

る本が存在するからそれを除籍しようといった単純な方法論にはそもそもどうやっても敷衍しようがない。しかしだからといって、全てなんでもかまわない、という質保証をも排除したアナーキズム^{xxxviii}に陥ることも、これは図書館を実際に運用する中では望ましい姿勢ともいえない。

伊勢田は現在、社会において知の利用のされ方が多様化しつつある現状を踏まえて、知の質保証の議論を再度改めて考える必要性があると論じている（伊勢田 2010）。同様に、図書館は知を扱う社会的な機関であるから、図書館も、蔵書の質保証の問題と向き合う必要性があらわれてくる。そのために万能ではない可能性はありつつも、疑似科学図書と向き合うための手がかりとして反証可能性を位置づける。また反証可能性がどのように図書館の蔵書構成には機能しているか、また全面的に機能していなくとも、どのように部分的に機能するかをあきらかにする。

次からは本章における主たる目的、「実際の公共図書館はどのように疑似科学図書」とつきあっているのかについて論じる。

3.1.5 実際の運用のレベル

図書館における資料の収集・組織化・提供・保存の四段階を考えると、それぞれにおいて資料の運用方法がある。選書の後、資料にどのような「意味付け」を行っていくかは各図書館で行われる業務であると考えられる。分類番号を付与する、悩ましい図書については但し書き付きで提供する、書架分類をどう行う、閉架書庫に保存する…といったケースが想定しうる。しかしどのような営みが図書館の実態においてなされているかを文献そのものから拾い上げるのは困難である。たとえば取り扱いが困難な「悩ましい本」は閉架に所蔵するといった現場のノウハウの事例報告は、筆者の経験からはインフォーマルコミュニケーションの場において耳打ちされる程度で、まず論文誌上には出てこない。これは図書館員自身の自制により、公式の場で語られにくいものであるとも考

えられるため、ラポール（相互の信頼性）の形成が未熟な段階ではこのような話は採取できないようにも思われる。このような背景のもと、単館の事例報告ではなく、複数館を対象とし、疑似科学図書といった「悩ましい図書」に対する図書館の営みが一般化できるような形を目指しインタビュー調査を行った。インタビュー調査にあたっては独自に次のような調査倫理規定を設定し、機微情報の提供に配慮した。

- （１）社会学でいう Weber の価値中立に留意し、肯定的意図および否定的（弾劾的）意図がないことを事前に十分に伝える。
- （２）被調査者は匿名とし、被調査者の属性（年齢、性別、居住地等）等も言及しない。ただし館の運営を論じる上で必要な場合に限って（たとえば正規職員／非正規職員など）の情報は公開する。
- （３）被調査者の所属する図書館についても匿名とする。ただし論じる上で図書館の規模や地理的特性が必要な場合においては言及する。
- （４）用語の定義については問われぬ限り被調査者の主観に任せ、筆者によるバイアスをなくすよう努力する。

とくに（１）の、価値中立的にインタビュー調査を行っていることについてはインタビュー調査の準備段階で強調した。今回の調査は、ややもすれば検閲の実態を捉えに調査に来たとみなされかねない。そこで検閲の現状を捉えるといった否定的意図はないことと、図書館の実態がどのようにあるかをあきらかにすることが筆者の目的であるということは繰り返し強調した。これらによって、これまでは比較的言及されてこなかった図書館の実態を聞き取ることができ、「図書館の自由に関する宣言」に対する教条主義的な言説とはまた異なった、図書館の重層的な実態のありかたをとらえる手がかりができたと考える。ゆえに、結論先取的な言い方になってしまうが、今回の報告結果をもってして「図

書館の自由に関する宣言を“厳密に”守っていない」と批判するのではなく、それをむしろ守りたいがゆえに理想と現実の狭間で様々な振る舞いを行っている実際の図書館・図書館員の姿のありかたを捉える。

3.2 調査設計

3.2.1 調査対象館

調査にはある程度の質問の枠組みをインタビュアーが構成しつつ、自由に被調査者に喋ってもらう半構造化インタビューを用いた。調査時期は2009年10月～2010年2月であり、対象は北海道から関西までの公共図書館8館とした。大規模公共図書館と小規模公共図書館の対比を狙い、また積極的な発話を期待するために『図書館雑誌』や『カレントアウェアネス』といった各種図書館業界誌に取り上げられたり、積極的な発言を行っていたりする図書館を優先した。大規模公共図書館とは県立、ないしは地域の中核都市に位置する図書館、小規模公共図書館とは、地方の町村レベルという形で設定した。大規模図書館の奉仕人口対象は、15万（ただしここは地域の中核都市、これに次ぐ少なさの奉仕対象人口は80万）～500万人程度、図書館費の規模は1億5千万円～15億円程度である。一方、小規模図書館の奉仕対象人口は5000～1万人程度、図書館費は2000万円以下である。被調査者に次の調査者を紹介してもらう雪だるま式サンプリングおよびソーシャルウェブサービスを用いて被調査者を探索した。質問は対面で行うこととし、ICレコーダー、メモで随時発話を記録した。

ここで、なぜ大規模・小規模の軸をとりあげたかについて説明する。現在の選書の要求論の流れを決定づけたといわれているのは、1963年の『中小都市における公共図書館の運営』（いわゆる『中小レポート』）の提出および1970年の『市民の図書館』と一般的には解されている。当時、貧弱であった各地の公共図書館を実際に視察した上で目指すべき道を説いたこれらの書は各地の図書館に大きな影響を与えた。その中にはいくつか目を引く記述が行われている。

たとえば、『中小レポート』の中には「中小公共図書館こそが公共図書館の全てである」（日本図書館協会 1963: 22）、「大図書館は、中小図書館の後盾として必要である」（Ibid.: 24）と述べられている。中小公共図書館こそ公共図書館である、という挑戦的な記載は、当時の中小図書館に勤務する職員の、大図書館に対する劣等感、羨望という意識を覆すための戦術的文言であるとされる。しかしこの流れからすると、要求論というのは、中小都市を本来はターゲットとした選書論であったはずである。にもかかわらず、筆者の見る限り、現在の時流においては、要求論はさながら全ての図書館にも適用される議論のように用いられている。つまり、現代において大規模図書館をも要求論の対象範囲として議論することは、前提条件の拡大解釈が行われているのではないか、という疑問が生じる。また中小レポートは、ウェブに代表されるような、現代の多様な情報へのアクセス可能環境と異なり、身近な図書館くらいしかおそらく知識へのアクセス手段がなかった時期に記述されたものである。中小レポートでは、「彼ら（筆者註. 利用者）は実際に借りることのできる一冊の本、生活上の疑問の解決にかけつけることのできる図書館さえ在れば、府県立図書館その他の大図書館について感知する必要はないと言ってよい」（Ibid.: 24）とすら記述されている。

当時の、中小都市に住む人と、知識を文字という形で媒介するシステムは、小規模な図書館や、あるいは小規模な書店程度しかなかったであろう。しかし現代はウェブ環境をはじめとし、多くの情報環境の激変がある。社会的な情報環境がこのように変化した以上、図書館は変わらずにいる（べき）機能と、変わらざるを得ない機能があるはずである。

したがって以上をまとめると、

- （１）大規模図書館での職員らの意識は要求論的なニーズをどのように受け止めているのか

(2) 中小レポートで描かれたような要求論を肯定する立場は、未だに中小図書館の職員のなかで受容しうるものであるのか

という疑問が生じる。したがって本章では主たる軸として、大規模・小規模図書館という分析軸を採用した。

当然、それ以外に選書方針、コレクション形成に与える要因は多いであろうことは容易に想像がつく。たとえば地理的特性や住民の志向、選書体制、選書カタログの利用の有無といういくつかの要因は即座にあげられるものの、それらの要因と様相は各図書館によってさまざまであり、それぞれを独立変数として捉えた場合の全体の傾向性といったものはとうてい捉えられず、単なるケーススタディで終わってしまう可能性がある。したがって客観性・検証可能性があると考えられる大規模・小規模図書館という軸を本調査は採用する。

なおインタビュー調査を行う中で、本調査での主眼ではないものの、選書カタログの利用の有無や、その利用の方法については重点的に尋ねた。一般的に現在の図書館における図書選択の実際には、書店などから書籍の実物を持ち込んでもらう「見計らい」と、新刊情報カタログ利用の2つを併用することが多い。しかし館によってその利用比率や利用のありかたは様々である。ただ、書店の店舗が近所に存在しない立地にある図書館すなわち往々にして小規模図書館では、選書カタログの重要性は高まると思われる。選書カタログの利用実態について言及している研究はほとんど存在しないので、参考として重点的に尋ねた。なお選書カタログはアメリカにおいてはじまった。「書評」が文芸評論と化し、図書館自身にとって使いにくくなってきたため、アメリカ図書館協会が中心となり図書館向けの「書評誌」“Booklist”を1905年に構築するに至ったとされる。日本においては、TRC（図書館流通センター）による『週刊新刊全点案内』のシェアが最も多いとされる。

3.2.2 調査対象者

調査対象者は前述の通り、北海道から関西までの公共図書館の8館である。大規模図書館5館と小規模図書館3館であり、大規模図書館に関しては選書担当の職員に依頼した。大規模図書館に調査対象が偏っているきらいはあるが、『中小レポート』がそもそも念頭に置いていないものの『中小レポート』の影響下にある大規模図書館をさらに細かく見ていく必要性から、このようなサンプル数となった。ここでは、基本的にNDCの1次区分における5、6類（自然科学、技術・工学）担当者に依頼した。また選書担当が明確に区分されていない図書館の場合は、通常の選書担当者に依頼した。

以下に被調査者のIDを記す。

大規模図書館の被調査者はA、B、C、D、Eの5人である。小規模図書館の被調査者はi、ii、iiiの三人である。インタビュー調査にかけた時間は、最短で30分、最長で3時間である。

3.2.3 調査票

半構造化インタビューであるため、基本的な質問の枠組みをこちらから提示しつつ、被調査者に適宜話題を膨らませてもらいながら発話してもらった。なお本文中では必ずしも発話順に取り上げるのではなく、再構成して記述する。なお被調査者には自由に喋ってもらうため、疑似科学とは何か、地域性とは何かといった定義問題は質問を受けた時点で答えることにし、事前に説明することとは行わなかった。

表 3-2 インタビュー項目

選書全般	<ul style="list-style-type: none"> ・ 選書体制 ・ 見計らいの利用方法 ・ 選書カタログの利用 ・ 選書規準の明文化の有無、運用方針 ・ リクエストの実態 ・ リクエストの謝絶実態
図書館・利用者層のイメージ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自館は教育的な機関か、それとも娯楽的な機関か ・ 利用者の図書館利用の想定される目的 ・ 利用者の情報探索行動（ブラウジングか OPAC 利用か）
他館連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館間相互貸借（ILL） ・ 分館・本館の連携 ・ レフェラルサービス
分類	<ul style="list-style-type: none"> ・ 選書カタログの分類番号の利用方法 ・ 分類番号の振りなおし ・ 開架・閉架書庫の利用
疑似科学の図書	<ul style="list-style-type: none"> ・ 疑似科学問題を認知しているか ・ 収蔵の有無や是非 ・ 書架分類の位置 ・ リクエストの対応 <p>[スピリチュアルや占いについての発話が得られた際] → ・ その図書の扱い</p>
司書の持つ前提知識	<ul style="list-style-type: none"> ・ 科学的訓練の経験の有無 ・ 司書課程受講前と受講後の意識の変化
取り扱いに困る図書全般	<p>[性的な事象を扱った図書や特定の政治的な主張を行う図書等について]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 利用者のクレームに対する対応 ・ 図書館内部での取り扱い、運用方針
除籍	<ul style="list-style-type: none"> ・ 除籍理由 ・ 除籍規準の有無と運用 ・ 閉架書庫への移籍
地域性	<ul style="list-style-type: none"> ・ その図書館固有と考えられる図書の取り扱い
図書館の自由に関する宣言	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宣言自体の理解、感想 ・ 業務中における意識 ・ 司書や図書館の中立性について ・ 実現方法
ライフヒストリー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館職員を目指した理由 ・ 家庭環境

以上の質問項目を尋ねた。被調査者の反応や発話の表現の方法によって質問

の順序を適宜入れ替え調査を行った。

以降、筆者が被調査者の大意をまとめて記述した部分には“ ”を用い、発話をそのまま引用する場合は「 」ないしはインデントを用いる。また筆者が文脈に応じて発話を補った場合は（ ）を用いる。なお被調査者にはライフヒストリー以外の箇所においては、図書館を代表したつもりで発話を行うよう要請した。

3.3 インタビュー調査の結果

本節ではインタビュー調査の結果を適宜引用しながら報告する。

まず、疑似科学図書に限らず、「一般的な図書」に関する業務について質問した結果を報告する。具体的には質問項目を図書館業務の収集・組織化・保存・提供に分類し、質問と応答を本文中で再構築する。その後、本章で主題とする疑似科学図書の問題に焦点化し、論じていく。以下では、収集・保存・蓄積・提供の各業務ごとにまとめる。

3.3.1 「悩ましい図書」全般について

各図書館の選書体制については、大規模図書館は NDC 一次区分に沿って、それぞれの専門の担当者を設置し、科学担当の選書者の場合、5 類のみ、ないしは 5、6 類と複数束ねた状態で選書にあたっていることがわかった。ただし業務は持ち回りであり、特定の主題（あるいは関心）を持っているから選書業務に配属されるわけではないという証言はみられた (B)。小規模図書館では職員がほぼ全員で選書業務にあたっていた。

選書業務の担当者の立場は様々で、選書担当者は図書館によって正規職員／非正規職員、司書資格あり／司書資格なしとさまざまな属性から構成されており、館ごとに大きく異なっていた。たとえば、D では選書こそが図書館員の専門性の根幹であるため、非正規あるいは非司書資格取得者は選書担当には従事

させないという発言があった一方で B は、それぞれさまざまな立場から、3、4 人を分野の担当として充て、総合的な立場から選書するとの発言があった。ただし B の場合は選書で迷うケースにおいては全体選書会議にかけ、最終的には正規職員で判断すると証言があった。このように、組織的には最終的な判断は正規職員が行うケースがほとんどであるが、実際のところは最終的な決定権はなくとも、実質の選書は非正規職員に任せられており、それを最終的には正規職員が形式的にチェックするのみであるというケースもみられた (ii)。

どこの図書館であろうと、基本的に選書用のカタログ^{xxxix}を用いて選書していることがあきらかになった。

カタログは多くの図書館で用いられているものの、本調査においては一館、選書カタログを用いて選書することに強い忌避感をあらわす発言を行う図書館があった。

i: 「わたしひとりでやっているの、わたしが全部、あと利用者からのリクエストだけです」

「ツールはとくに TRC を入れていないので、新聞だとか、書店の広告であるとか、そういったもので選んでいます」

「(外の) 書店では見るだけ…注文は町内の書店に発注を出しています」

筆者: (なぜカタログを使わないのか?)

i: “予算がない、町内の書店とのつながりを持っておきたい”

「司書の仕事とはなんなのだろう。これではカタログショッピングのよう」

「だからうちはそれ (カタログ利用) は一切していないで、選んだものを書店さんから裸のままできて、それをぜんぶ装備して、分類つけて、登録もして、ぜんぶやってるんです」

「(カタログに頼りすぎると) 司書はそれでいいのかな、と。あと、(選書の) 勘が鈍るような気がします」

この i にみられるような選書カタログへの忌避感、利便性の高さに対する一定の警戒心として捉えることができるだろう。カタログそのものを利用することについて問う研究はこれまではそれほど見られないものの、これを選書論の枠組みから問い直す研究が我が国において近年数少ないながら登場しはじめていると安井は指摘している（安井 2010）。

これらは図書館が能動的に、利用者のために図書を選択する段階である。では一方で利用者からのニーズを直接すくい上げる形であるリクエストはどうかを尋ねた。

基本的にはどの図書館でもリクエストは却下せず、ほとんど要求を通していった。特徴的な発話を紹介する。

A：「基本的には買ったりする方です。リクエストがあると、最新のものはよその図書館から借りられなかったりするので、リクエストがあったので買いましょうね、と」

C：「ほぼ買っています。こういうの（選書基準に合わない）がない限り落とさないんですよ。ほぼ買う形で検討して行って、でも予算が限られていますよね、だから落として行かないとしょうがないってときにこういうので（リクエストを）落として行くって感じ」

E：「8割がた買ってると思います」

i：「（リクエスト数は）多いと思います」

「却下しない」

ii：「うちで請け負った分のリクエストは大体 8 割程度は購入。残りは 2 割は却下ではなく相互貸借にまわしてる」

なお B、D、iii もリクエストはほとんど通していると発話している。これら

を確認したあとで、実際にリクエストを謝絶しているケースについて尋ねていった。いくつかのケースで興味深い謝絶の事例がみられた。

- ・コミック本等は傷みが激しいので受け付けない (A)
- ・予算があるときは全点買いをしていたが、予算がないので基準にあてはめて落としていく。類書、たとえば刑法の本等はたくさんあるので謝絶する、しかけ絵本や変な付録がメインのもの、問題集や付属の CD-ROM がメインのものもあり買わない。ボーイズラブ^{xi}の図書はレーベル切り^{xii}をしているが、外には (基準を) 公表していない (C)
- ・リクエスト用紙にあらかじめ買わない本を記述させてある。たとえば漫画本や赤本といった問題集は買わない (ii)
- ・リクエスト謝絶のためのルールは内規として各種存在する。しかしそのルールを外部に明文化して伝えてはいない (A、 B、 E)

一方で i、iii の小規模図書館では、リクエストが来た本はまず買うと強調した。i による象徴的な発言をとりあげる。

i : 「できるだけいろんな本を見せたい。本屋さんもちよっとしかないしこれだけのスペースしかないけども、でもやっぱりいろんな本をあつめてみんなに来てもらったら、ああこんな本があるんだっていう意外性がないとつまらないでしょ」

i の勤務する図書館は他の都市と隔絶した立地である。近辺の書店も小規模であるため、図書館が利用者への様々なタイプの図書への接触頻度を与えるために多様性のある蔵書構築を試みていることがわかる。同様の小規模図書館としては、iii もリクエストはほぼ認めていると言いつつも、「特定の利用者の人か

らの繰り返しのリクエストが増えてきて…」との悩ましさをあらわす発言も見られた。

ここで、ILL と絡めて興味深い発言をした図書館を取り上げる。A は口籠りながらも「中には買いたくない本もある」「リクエストが来たら仕方なく買う」との表現をしつつ、以下のようにリクエストの積極的な実現と、図書館としての志のすり合わせに困難があることを述べていた。

A：「出版物がよその図書館から借りられそうだったら借ります。持ってなかったり、リクエストを受けてうちで所蔵がなかった場合、基本的には買うツールと、あと県内で持っている館をまず調べます。それで、出版から過去6カ月だとかよその図書館もなかなか貸してくれないので、一応それは来ちゃったら買いましょうと」

ここで特徴的にあらわれてくるように、リクエストは蔵書構成のみならず、ILL とセットにして考えなければならないということである。iiにおいても、リクエストで応えられない2割はILLで代用するという発言があった。以上をまとめると、収集においては、

- (1) 図書館は基本的にリクエストを謝絶しない
- (2) 謝絶する場合は内規を持つ館もあるが、その内規は必ずしも外部に公表するものではない
- (3) 図書館にとっては収集したくない本もあるが、そのような本については利用者に提供するため、購入ではなくまずILL利用の検討が行なわれている

という事例が認められた。

次に、資料組織化にまつわる、資料への「意味付け」について報告する。図書館はさまざまな文脈において図書を扱うことが「許されて」いる。この文脈とは書架分類であったり分類番号の付与であったりする。そこで、図書へのメタデータの付与を通じた意味付けの実際を尋ねた結果を報告する。

前述の通り、選書カタログを利用しているために選書カタログで記載されている分類番号を通常そのまま用いる、という図書館がほとんどであった。無論、カタログ利用を行っていない i では、自らが NDC を付与するとの発言が見られた。

ただしカタログにある所与の分類番号をどのように扱っているか、という点については図書館ごとに大きな違いが見られた。分類番号の振りなおしを行うか、という点を問うたところ、いくつかの事例が見られた。

E：「ほぼそのまま入れてるんですが、職員は選書のとに見てて、こんな MARC がついてるけどおかしいってなって直す」

「(ある漫画の社会評論本について) 7 類 (芸術・美術) のひとが買いたくない…じゃあ 3 類 (社会科学) で。分類担当同士での調整がある」

ここにみられることは、分類番号の振りなおしは、カタログの所与の分類番号が間違っていると判断されるがゆえに振り直されるケースと、当該図書がそれぞれの分野の担当者同士の調整によって分類番号が振り直されるケースがあるということである。後者のように、図書館としては持っていたほうがよい図書であろうが、その図書は自分の担当の書架には置きたくない、という担当者同士の心情がみられる。選書や排架の発言権を巡る図書館内の小規模なヘゲモニー争いともいえるケースは同様に C でも見られた。C の場合は、ライトノベルを担当者同士がヤングアダルトコーナーに置くか、それとも一般書コーナーに置くかでしばしば交渉が行われると証言した。

ここでは個々の図書館職員としては、悩ましい図書であっても図書館として持つべきであるのは認めつつも、それを自分の担当とはしたくないとの心情がみられる。

他の事例として、純粹に利用者の利便性に供するために分類番号を積極的に振りなおす図書館も見られた。A は、拉致被害者の手記は当初、伝記に分類されていたが、国際情勢に分類しなおしたほうが「出る」（利用される）ので分類番号を振りなおすと発言した。また分類番号の振りなおしの事例として、A は「利用者から指摘をいただいて、この分類はおかしいでしょって。でも中見て納得できたんで、変えました」との証言があった。このように、A のようにカタログの分類番号を所与のものとせず積極的に分類を振りなおす図書館も存在する。

一方、大規模図書館であったとしても分類番号の振りなおしを行わない、という発言を行った図書館もあった。B は、筆者が分類番号の振りなおしをするケースもあるようですが、と質問を展開したところ、B は沈黙の後に、「振りなおしというのは可能なのですか、いや、たしかにできますね。今度からやってみます」と発言した。以下も B の発言である。

B：「よくもわるくも TRC さんの MARC 頼みになっているので、そのものだよな、って、機械的になってます。MARC についでる分類で引き受けている感じ」

なお小規模図書館においては担当者同士の押し付け合い、棚争いというケースは見られなかった。

ii は、図書館の分類番号によって図書の意味は変化するだろうが、利用者がそれをどこまで理解できているかはわからないし、OPAC 全盛の時代に図書館側が思うほど分類番号が有効に図書への意味付けとして機能するかという分類

番号への懷疑を発言した。

以上をまとめると、

- (1) カタログに付与されている分類番号を振りなおすことがあるが、振り直さない図書館も存在する。
- (2) 以下の状況においてカタログの分類番号の振りなおしが観察された。
 1. カタログの所与の分類番号が間違っていると判断される場合
 2. 図書館としては入れる必要があるとは認識しているが、自らの担当書架に置きたくない場合
 3. 利用者の利便性のため

となる。

さらに、悩ましい図書に対する保存について報告する。公共図書館に限らず、図書館における資料保存というのは、ほとんどの図書館においては除籍の業務と表裏一体である。除籍を適切に行うことは資料選択以上に困難であるとしばし言われるが、とくにいったん収集した悩ましい図書をどのように廃棄しているかの実態を調査した。

利用者からのクレームによって図書を廃棄することがあったかについては、どの図書館もないと断言した。ただし性教育の本でクレームがついたことがある (C)、や、宗教書についてのクレームがついた際は、「まず、(宗教書は) 買ってないと。(書架に既にあるものは利用者から) いただいてますと」と言い返すと発言した図書館もあった (i)。

一般的に除籍は、汚損破損でどうしようもなくなったときにのみ行うようである。この傾向はどの図書館においても共通であった。利用者からのクレームをもってして図書を安易に廃棄するような図書館は今回の調査においては存在しなかった。また公共図書館にもかかわらず、そもそも除籍を行わないという

図書館も存在した(B)。Bは、B以外の大規模図書館が近隣に存在しないため、B自身は、公共図書館であるが自館は保存図書館の性格も強く持つと発言した。

以上は利用者からのクレームによって除籍したケースは皆無であるという報告であるが、一方で図書館職員自身の自主規制と図書の除籍について興味深い発言を行ったものがいた。

ii:「クレームがつくだろうということを想定して早々に除籍した本ならいろいろ知ってますよ」

「よりみちパン!セのシリーズで、『人はみな裸になれ』、とかそんなタイトル^{xiii}」。児童書です。なんだけれども、イラストもイラストだし、内容も内容だし、っていうことで早々に引き揚げた気がする」

「登録前に内部で指摘があつて購入担当者に連絡をしたら、破棄しますということで登録すらされなかった。間違つて買ったんだよね」

どうしてこのようなことが起こるのか、とiiに更に尋ねたところ、iiは、図書館の上部組織に司書資格を持っていない市役所からの出向者が占めていること、地域性ゆえに利用者や職員に「わがままな人が多く」、それらのクレームを想定して自主規制してしまっている、と自館批判の発言を行った。そこでさらに筆者が、では司書資格のための教育を受けていなかったら、司書資格を持っていない人、つまりクレームにおびえて除籍を是とする人と同じように考えていたかと問うたところ、「(除籍を)していたと思う。やはり、利用者からのクレームはこわい」という返答があつた^{xiii}。

以上をまとめると、

- (1) 利用者からのクレームで除籍は行わない
- (2) しかし図書館員の自主規制は存在するという証言がある

となる。

なお除籍はしないものの、提供の水準で図書の運用方法をコントロールする図書館は多く見られた。そこで、悩ましい図書をどのように提供しているかというケースについて報告する。これについては、多くの図書館が閉架書庫を利用していることがあきらかになった。

A：(『週刊新潮』で酒鬼薔薇事件の子の顔写真が出たとき)“書庫入りにする。分類を変えて取っておく”

B：「ここ1年半ほどではない(過去にはあった)」 「これって図書館で置く本? というものは正直ありますけど」

C：「基本は新しい本は開架で、ハーレクインの一部とか、最初から書庫に入れたりするやつとか、少しはあります」

「(萌え系について) 図書館で別に買わなくてもいい本だよね、って。なんかどれにも(図書館の収集方針に反する点に) あてはまらなくて、類書もないよねって言って。でも、別にわざわざ入れるほどのものでもないような気もするし、最悪書庫で買うか(開架に置かず書庫置き前提として買うか)、みたいな」

「本当にひっこめなきゃいけないような本は外に出していない、基本的に(書庫に) 入れたりはしないですけど、よっぽど裁判で負けたとかで閲覧制限された、個人の侵害が載ってる本とかありますよね、そういうのはわかった時点で閲覧制限をかけて、閲覧も手続きをして見ていただく」

E：「(閉架に入れることが) あります。主任たちと相談して、書庫に入れた方がいいんじゃないってなったら入れる」

なお D、i、ii については直接的な閉架書庫行きの話は聴取できなかった。

いずれにせよ、ここで皆が共通して発話したことは、図書館に図書をいったん入れてしまうと、恣意的な運用では廃棄は行えないことである。また図書館にとってはふさわしくないと思われるものの、しかし図書館である以上、悩ましい図書は持たざるを得ないため、一時的貯蔵のバッファとして閉架書庫を利用している実態があった。

なお付言しておくが、閉架を「喜んで」積極的に活用している図書館は、今回の調査においては存在しなかった。悩ましい図書は入れざるを得ないが、積極的な公開はしたくないという悩みの着地点として閉架書庫の機能があると捉えるのがより現状を捉える上で正解だろう。これをパターンリスティックだと断じたり、あるいはアーキテクチャ（濱野 2008, Lessig 2001=2002）の悪意の発露だと論じることは容易であるが、むしろ筆者としては、図書館が悩ましい図書とつきあう上での「バランス」の発露だと捉えるほうが適切であろうと考える。

以上をまとめると、

- 図書館は「悩ましい本」について、所蔵しなければならないが、積極的に提供できないがゆえに閉架を利用している

となる。以上、疑似科学に限定せず、いわゆる「悩ましい本」をどのように図書館は取り扱っているかについて報告した。次からは、疑似科学図書を実際に図書館はどう取り扱っているかについて報告する。

3.3.2 図書館の疑似科学図書の実際的な運用方法

先述のように、疑似科学とは何かを精密に定義することは難しい。しかしこの調査を行った時期は疑似科学問題として『水からの伝言』が前景化していた

時期であるので、被調査者はそれを念頭に発言を行ったケースが多くあった(A、C、E、i、ii、iii)。また疑似科学問題が具体的なイメージとして掴めない被調査者には、筆者から「疑似科学図書とは、たとえば『水からの伝言』やマイナスイオンについての本など～」と補足を行った。この場合、これら疑似科学図書が社会問題になっていると全員の被調査者が認識していた。

ただし予め断っておくと、半構造化インタビューの手法をとっていたため、被調査者の発話にある程度任せた部分がある。科学哲学領域では、占いや、いわゆる精神世界（スピリチュアルと呼称されることも多い）については、それらを疑似科学と同一のものとは捉えないようである。そもそも、人口に膾炙している疑似科学の定義自体が「科学のふりをしているが科学でないもの」であり、占い・精神世界の本はそもそも科学のふりをしているとは言いがたい。しかし被調査者がそれらを同一視して議論する場合においては、その発話の流れをあえて遮ることはしなかった。ここからは大規模図書館における疑似科学図書の扱いと、小規模図書館での扱いに区分して論じる。

大規模図書館における疑似科学図書の扱いについて、ほぼすべての図書館で共通していたことは、「すでに自館に入ってしまった疑似科学図書をどう扱うか」という視点であった。また同時に、そのような疑似科学図書へのリクエストが行われたらどうするかという筆者の質問には「実体験をもとに」言及するケースが多くあった。以降では、図書館における収集・組織化・蓄積・提供の業務に倣って報告する。

収集について：

A：(免疫力を高める健康情報の本について)「あんまり買いたくなかった方だったのかな？でも予約が結構いっぱい来ちゃったので買い足しをしました」

筆者：(積極的に買ったりするのか?)

「リクエストがなければ買いません」

筆者：(来たら?)

「仕方なく買う」「よその図書館で持っていればラッキーと思ってよそから借りますし、ない場合はしょうがないねーって言って買います」

「(精神世界の本の) リクエストはあった。根強く来ます」

「その人が信じてるならそれでいい。自分(の蔵書として個人で)で買うのはいや」

B：「(疑似科学図書は) 入ってはいますね」

「(リクエストを却下することは) なくはないんじゃないでしょうか」

「やっぱりそのときの話題とかになるとわーっと予約集中したりするんで、これはそんなに複数必要なのかという話が出ることもありますけど、あまりにも1冊だけで何十人もの予約をまわすのはリスクが大きいのので(複本を買う)」

C：「そういうものとして(疑似科学は) 世の中に存在するので、そういうものだからといって排除するのは困ったことですよね、図書館としては」

「そういうのが好きな人もいるから、そういう人の要求もある程度はくんであげた方がいいのかなあと」

「買い控えはするけれど…」

「明確な理由がないと、要望があるものは断れない」

D：「たとえば、市町村の図書館から、こういうのが世の中に出てるんで買ってくれませんかというのはある」

E：「リクエストが多かったら買っているかなという程度(であって、積極的に買っているわけではない)」：

「リクエストがあれば買う。出版点数とか、この人は売れているとかで差をつける」

「まるきり信じるのはどうかなと思うけれど、まあそういう思想があって

もいいかなと思う。(だから図書館にあっても) まあいいと思う」

ここで特筆すべきは A の ILL 観である。A は潤沢な予算を持つ公共図書館であり、所在地の市の財政力指数も 1 を超過している。したがって自分たちは他館と比べて予算が豊富であるという自覚ゆえの特徴的な発言が何度かなされていた。

A：「予算がありますから、(悩ましい本であっても) 周りの市町村には (A なら) 買ってもらえる、という期待を受けている感じはします」

このように、自館は予算の豊富な県内の中心館であるがゆえに、玉石混交な本を持つことをむしろ他館から要求される圧力があると自覚しつつも、一方で全点揃えるといったデポジットライブラリのようなことは不可能である、という現状の裏返しに「よその図書館で持っていればラッキーと思ってよそから借ります」という発言につながっている。また A は疑似科学図書について、図書館員としての自分の責務ゆえに、プライベートな自分という立場からは好ましくないと考えていても、利用者自身のニーズに沿うならば図書館は資料の提供をせざるを得ない事情について、以下のように述べている。

A：「必要としている人がいるから (リクエストが) 出るんでしょうから、基本的にわたしたちはなんとか言える立場ではないので、幸せになるんだったらいいわよね、と」

このように、自分自身のプライベートな意識の段階においてはその図書への忌避感があっても、図書館員としての行動の段階においては、「悩ましい図書」を収集している姿が浮き彫りになっている。このように、図書館員としての業

務と自分自身の意識の乖離について言及したものに C もいる。C は以下のように述べている。

C：「自分だけの価値観でやるものではないというのは、なんとなく思い始めましたね。はじめのころは漫画を買うのも違和感があったし、こんな本まで買うの、いらないよね図書館にはって思ってたけれど」

「図書館がお高くとまっても、市民のためのものなので、ある程度使ってもらえなければ意味がないことなので」

「利用があればそれなりに対応していかないと」

ここにあらわれるように、図書館員自体にも自らの意識と行動の差があるようである。むしろ、そのように図書館を相対化する視点があるからこそ、違和感を持ちつつも悩ましい資料の提供を行う、という重層性がある。

疑似科学図書の組織化について：

図書館は疑似科学図書をどのように排架分類しているかを報告する。ただし本節における議論はほとんど前述の分類番号の振りなおしと重複するため、疑似科学に絞った発言のみを抽出し、紹介する。

C：“スピリチュアルは占い、人文科学。疑似科学は科学に排架。TRC のまが多い”

D：「占いとかそういう本は 147、科学は科学の本だから、それは分類によって分けられる」

E：（クレームをつける人がいたとき）「隣に『これ（反対意見の本）も並んでますよ』というので、（科学という同一分類で）並んでいる意味はあるかなって思います」

「たしか『水からの伝言』は分類番号が（選書カタログのなかで科学から占いに）変わったのでは^{xiv}？」

ただ、図書館員が積極的に図書の内容を精査して、疑似科学図書であるから科学の分類番号から別の分類番号に振りなおすといったケースは見られなかった。

ここからは、疑似科学図書の除籍や提供について報告する。疑似科学図書であるからといって除籍されるケースは認められなかった。つまり、除籍については通常の他の資料と同等の取り扱い方法であるという発言が共通してなされた。

提供についても同様である。ただし B は、疑似科学的な健康情報の図書を例にあげて、自製品の積極的な販売を目的とした図書の場合は閉架に収蔵するという発言を行った。iii も同様の発言を行なっている。具体的には、ページの奥付に健康食品の購入先を記してあるようなケースである。

B：「あきらかに売り込みみたいなの、連絡先書いてある、みたいなのだとちょっとまずいんじゃないって感じですけど、その一步手前みたいなのだと、あとは判断するのは利用者さんだからね、と（開架に置く）」

B は広告としての連絡先が書いてあるかどうかという基準で、疑似科学図書か否かと捉える理由を以下のように説明した。

B：「正直なところ、私自身が科学の分野の選定に対するスキルがかなり足りないと思うんですよね。だからもっと見るべき目のある人に」

「きちんとしたものを教えてくれる方がいれば選書の参考にご意見を伺いたい」

「もっと知識のある人がきちんと選ぶべきじゃないかなって言うのはあります」

このような悩みを吐露する図書館員がいる一方で自分の図書選択に大きな自信をもつ図書館員もみられた。

D：「図書館は不偏不党の立場。たとえば左がかった雑誌や図書を買ってくれという人が来る。それはあなたの意見であって、判断するのは利用者ということ。我々が選んでいる本であるが我々のあり方は中立だと」

「我々は常に中立で、それは継続的に変わりません」

「本を収集しているからこの本を買ってくれとか、貴重だから買ってくれとかいうものではなくて、収集方針の選定基準に沿って買うので、それは図書館に任せろと。それがなくなったら図書館ではない、ということです」

なお D は選書について以下のように語っている。

D：「非正規職員もいるけれども選書には関わっていない。もちろんそれは正規の職員で。選書はやはり司書の根幹の部分だから、それは司書がやる」

このように D は司書の専門性としての自らの判断への自信を覗かせる。再掲になるが D は「占いとかそういう本は（NDC の）147、科学は科学の本だから、それは分類によって分けられる」と発言している。

以上、大規模図書館における疑似科学図書の取り扱いについて説明した。ここからは、小規模図書館における疑似科学図書の扱いについて報告する。しかしそれほど記述に耐える分量の発言は採取できなかった。というのも、先に論じたように、巨大図書館において疑似科学図書は「既に自館に入ってしまったて

いるのでどう扱うか」という、既に自明になった問題であった一方で小規模図書館では疑似科学図書は「(少ないが) ある」という発話を行っており、前述の大規模図書館のように、どのように対応したか、というケーススタディがそれほど得られなかったのが要因である。

i : 「(収蔵されて) いるところもある。前から入っていた部分もあるし」

筆者 : (疑似科学の本のリクエストがあつたら入れるか?)

ii : 「(もし来た場合は) 内容、難易度、値段、大きさ、量などを考慮して入れるかどうか判断する。」

「(疑似科学図書を利用して) 自分で判断する力、探していく力 (つまりリテラシー) は少しずつでいいから身につけていってほしい」

iii : 「(健康食品の) 連絡先のある本なんかは、閉架に入れたり」

ここで i、ii に見られるように、小規模図書館における疑似科学本への対応は「次に来たらどうするか」という将来への想定をもととして議論しているものであり、既に入っている疑似科学図書をそれほど問題視していないともいえる。これは大規模図書館が「既にある図書に対してどうつきあうか」という悩ましさを吐露した傾向にあるのとは対照的である。たとえば i は、のちに「もっと入れてもいいんじゃないか」という発言を行ったように、玉石混交な書架を積極的に肯定する発言も行っている。もちろんこれは i の所在地においては、多くの図書を一箇所にとめて所蔵している他の社会的装置が存在しないがゆえに、利用者への多様なニーズをかなえようとする背景のもとでの発言である。同様に、ii は、そのような科学的手続きを持っていない資料がもしあるからといって、リテラシー教育に資することができる、と発言したように、疑似科学図書を蔵書ないしは利用者の資料へのアプローチの多様性と捉えているふしが見受けられる。いずれにせよ、i は、図書館の中立性についての質問に対して、

即座に「いろんなひとにサービスできて、みんなが満足するのが中立なのかな」と答えるように、楽天的であり、積極的である。図書館の理念を忠実に目指しており、i の発話はきわめて参考に富むが、一方でそれは「悩ましい図書」へのリクエストといったニーズが日常的にそれほどないがゆえの発言と言い換えることはできるかもしれない。

3.4 本章の考察、まとめと今後の課題

3.4.1 大規模図書館と小規模図書館の差異

ここからは、採取した図書館員らの発話を踏まえて、発見できた傾向について述べる。まず、小規模図書館の職員であろうと、大規模図書館の職員であろうと、今回の調査対象者の図書館職員全てが疑似科学は社会問題となっていることは認識していた。また疑似科学図書の存在についても認識していた。しかし大規模図書館と小規模図書館では、疑似科学図書の運用方法は異なっていた。大規模図書館の職員は疑似科学図書を既に自館に入り込んでしまっている、いわばアノマリ（例外）として捉えている一方で小規模図書館では蔵書の多様性を担保する存在である、とみなしているように思われる。

また大規模図書館では疑似科学図書に限らず、取り扱いの難しい本を押し付けあう棚争いが見られた。ここから理解されることは、予算があるということは必ずしも大規模図書館員にとって喜ばしいものではないということである。自館のみの水準で議論するのであれば、予算が多いことはおそらく喜ばしい。しかし ILL といった図書館ネットワークの網の中で捉え直すと、玉石混交の石のほうの図書は他館から購入を要請されているように思う、との A の証言があったように、いわば予算の豊富さが当人たちにとって、「裏目に」出てしまっているケースがある。被調査者によって、図書館という組織全体を俯瞰したときの自らの意識と、その一員としての図書館員としての意識と、図書館員とは別のプライベートな自分の意識が混在的になっていることを自覚しているものが

みられた。たとえば個人としては「悩ましい本」は持ちたくない。自分の担当の書架にも置きたくない。しかし図書館全体としては持たないといけないと理解している、といったケースである。

このように、大規模図書館では、疑似科学図書は図書館にはふさわしくないと思われつつも、図書館全体のことを考えると置かざるを得ないという悩みがある。このような意識の多層性に自覚的でありつつ、業務に従事している図書館員がいることがあきらかとなった。ここにおいては「ニーズがあるから図書館には何だって本を入れるべきである」といった平板な議論が入りこむ余地はおそらくない。むしろもっと重層的で、個々人の持つ悩ましさと、日常の業務のすり合わせをしている姿がみられる。これは、小規模図書館の職員が、蔵書の多様性の担保として疑似科学図書を捉えていることと対照的である。なお付言しておく、積極的に疑似科学図書を喜んで収蔵しているというケースはない。

3.4.2 本章における発見

ここでは、本章であきらかになった、いくつかのパラドキシカルにも思える事実について述べる。

閉架書庫が図書館の一時的な貯蔵庫機能、いわばバッファ機能を持っていることが発見されたことも特筆できる。所蔵はしなければならない。OPACでもデータそのものは供している。しかし書架の並びを「汚したく」ない、という、複数の矛盾する意識が焦点化し、それが閉架書庫への収蔵に繋がっている。千代田区立図書館の元館長である柳はリクエストが来たからと機械的かつ従順な受け入れしか行わない図書館員に対する異議申し立ての文脈で、書架の並びが次のリクエストへの影響を与えると論じているが（柳 2010）、この議論とも関連する。

また発見の一つに、選書カタログ、とくに選書カタログの所与の分類番号が、「悩ましい図書」を図書館においてどこに位置付けるかを定める機能を持って

いることがあげられる。選書カタログはもはやほとどの図書館においても必須のものと化しているし、これによって業務量の削減が行われていることは否定できない事実である。ただし i が警戒心をもってカタログを捉えている発言が象徴的に示すように、カタログを利用せざるを得ない状況においては、図書館は知をあつかう機関である以上、カタログの分類番号を所与のものとせず、各図書館が批判的に問い直すことが必要になってくるのかもしれない。たとえば、i は、小規模図書館に勤務している。地元の小規模書店との関係を重視すると同時に、出張等で大規模都市に行った際には必ず書店に立ち寄り、自分の選書のカンを磨くという発話を行っている。簡単にカタログ選書に依存し得る地理的環境であるからこそ、むしろ i はカタログを忌避するという意識的な行動も見られた。i ほど徹底したカタログ忌避は現実的には難しいかもしれないが、少なくとも、カタログに付与されている所与の分類番号を批判的に問いなおす行為そのものは、現在でも十分に可能であると考えられる。つまり、ゼロから自分で目録を作るような目録作成能力を育成するよりも、むしろ所与の目録等に対して批判的検討を加えることができるか否かという能力のほうが現実的には求められるのかもしれない。これは、疑似科学批判を精力的に行なっている科学者の天羽優子による、

あるものを「ニセ科学」と呼ぶのは、「レッテル貼り」じゃなくて「レッテル剥がし」。科学でないものに誰かが先に「科学」というレッテルを貼ったから、剥がすという余計な作業が必要になっただけ。(天羽 2011)

という発言とも関連するだろう。すなわち、疑似科学の図書であるが、それに科学の分類番号を付与された場合、それに対して批判的討議が挟まれ、結局、超心理学といった疑似科学の分類番号が改めて付与されるケースが認められた^{xiv}。これは反証可能性のいう、「誤った知識の棄却」のプロセスとして捉えうる。

つまり、蔵書を構築する段階では、図書館員は反証可能性を意識して蔵書構築を行っているとは到底言えないものの、構築された蔵書については、利用者などからの批判という、反証可能性のいうところの「誤りの知識の棄却」というかたちで、分類番号の振りなおしが行われている、と指摘しよう。

ただし疑似科学図書と、社会的に悩ましい図書を比較した場合、特定図書を開架から除架する判断水準がある程度異なっていることもわかった。たとえば、健康情報を推薦する本で、かつ連絡先が明記されているような本は疑似科学的だと見なし、図書館に入れることを忌避する図書館員が存在することがそのあらわれである。しかし連絡先の有無といった明快な基準がない場合は、なしくずしにリクエストを受け付けざるを得なく、科学者コミュニティなどではおそらくある程度有効に機能しているであろう反証可能性といった境界設定は図書館の実際の運営、図書館員の直接の方法論としての援用は行いにくい。

また連絡先の記述されている疑似科学図書はむしろ販促的な意図をもって出版されていると思われる。したがって連絡先の有無で疑似科学図書か否かと判断する手法は、たとえば連絡先の書いていない疑似科学図書を除架する手法たり得ない。たとえば特定の投資会社を薦める図書というのもありえるだろうが、連絡先の有無のみをもって議論すると、疑似科学図書と特定の投資会社を推薦する図書の除架の水準はおそらく接近してくる。しかしながら今回の調査においては、社会的知識に関わる図書で連絡先の有無を問題視する発言は見当たらなかった。疑似科学図書と投資先推薦図書の出版物の流通量の違いや、あるいは、いわゆる「波動」や「浄水器ビジネス」といった疑似科学とされがちな領域は、よりビジネスおよび宣伝に繋がりやすく、今回の調査において可視化／不可視化に繋がった可能性はある^{xlvi}。

いずれにせよ、連絡先の有無をもってして疑似科学図書と捉える手法は疑似科学の図書と認識するための必要十分条件の手法ではありえないが、選書や閉架収蔵への判断基準の一つとして捉えている図書館があることが報告できたこ

とには一定の有効性があると考える。

また小規模図書館はいわば疑似科学図書を蔵書の多様性を担保するための存在と見なし、未来向きに、もし入ってきたらどうするか、という議論を行う傾向がある一方で大規模図書館は、既に疑似科学図書が書架に存在してしまっているため、どのように対処すべきか悩んでいるという傾向がある。

また繰り返しになるが、『水からの伝言』は、当初「科学」に分類されていたが、批判的討議によって、超心理学の分類に振り直されたという経緯がある。図書館の運用の現場においては反証可能性が必ずしも直接的に機能しなくとも、その図書館を裏側で支える仕組みといったところでは反証可能性は有効に機能したと論じることができるだろう。

実際のところ、科学者コミュニティと一般市民との知の接続において、現代の図書館がいかに直截的に役割を果たしうるかについて論じることが難しい。反証可能性の考え方を理解し（また同時にその限界をも把握している）、たとえばサイエンスコミュニケーターといった外部のインタープリター（通訳・媒介者）の働きが今後望まれるであろう^{xlvii}。

3.4.3 本章の問題点と今後の課題

本章における諸問題および今後の課題を整理する。

本章では調査者がそもそも持っている、図書館システム全体・図書館員・そして図書館業務外の自分といった、多層的な意識を明快に切り分けていない。それゆえ、議論に矛盾や混乱が生じている可能性は否定できない。これらの問題に対しては、量的調査でフォローするか、さらに調査範囲を広げていく必要がある。また選書カタログについては軽く触れるに留まった。選書カタログが作成される段階において、どのような図書が選書カタログへの選定基準になっているか、どのように図書分類が付与されているかといった点について、今後調査を行う必要がある^{xlviii}。

以下では、本論文全体のなかで、本章がどのような意味を持つかということを示す。本章では、従来行われてこなかった「疑似科学の図書」をどのように図書館の蔵書として扱うかという議論を行った。そのための手がかりとして、Popper の反証可能性を用いた。疑似科学図書を捉える上で反証可能性は参考となりうるが、反証可能性をそのまま直接的に適用することは、図書館の選書業務といった点においては、理論・実践両面において限界はあり、全面的な機能は難しいことを論じた。しかし図書館を支える仕組み、たとえば選書カタログにおける分類番号付与と、それに対する利用者による批判による分類番号の振りなおしによって、科学の領域からそうでない領域へ棄却されることを示した。このように反証可能性は図書館内部の業務では全面的に機能していなくとも、社会的な装置として図書館として捉えた場合、利用者からの批判による分類番号の振りなおしという機能を果たしていることを指摘した。言い換えると、本章では、科学のふりをしているが、科学ではない記録された図書（客観的知識論の扱う対象）が、反証可能性によって、いかにして科学の領域から棄却されていくかということを描いた。

以上、これまでの図書館情報学の研究では、Popper の客観的知識論のみを取り扱っていたが、他、反証可能性も、図書館情報学に用いることができる議論だと示した。なお本章の研究は平成 21 年度、22 年度の筑波大学知的コミュニティ基盤研究センター公募研究（研究代表者：後藤嘉宏）の助成を受けた。

^{xxii} 疑似科学と非科学の語のニュアンスの違いについては関（1990）を参照。

^{xxiii} 田崎晴明、「水からの伝言を信じないでください」（2011 年 11 月 3 日取得、<http://www.gakushuin.ac.jp/~881791/fs/>）。など。

^{xxiv} 江本勝，1999，『水からの伝言——世界初!! 水の氷結結晶写真集』波動教育社。

^{xxv} 詳細は後述する。

^{xxvi} ここでは公共図書館と記したが、館種によってさまざまな形で国家権力との緊張関係が生まれていたことに対し、近年さかんに研究が行われている。例えば、当時の図書館人が検閲や思想善導を積極的に受容しながら、天皇制を利用しつつ全国への図書館設置を試みた歴史については東條（2006）を参照。

^{xxvii} なおこの個所の解題については（角家 1997: 27）も参照。

- xxviii このあたりの状況については（日本図書館協会図書館の自由委員会 2004）を参照。
- xxix この点については、佐倉（佐倉 2011）における「はじめに」に記載されているスタンスにならう。
- xxx 本章の主眼とする、Popper の反証可能性と図書館の知識については、図 3-1 に記す。
- xxxi もちろん知的自由論と社会的責任論の二項対立の構図はたびたび繰り返されてきたものである。たとえば「図書館の自由に関する宣言」を成立させるに至った前哨戦ともいえる、1952 年 8 月の『図書館雑誌』における、有山崧の筆による編集後記から発生した「図書館の中立性論争」などもその象徴的なあらわれともいえる。破壊活動防止法の採決や終戦記念日という社会的背景のもと、有山は、図書館はインフォメーションセンターであり、図書館は能動的な政治的行動をせず、情報を提供することこそが使命だとした。一方で論争相手（およびおそらく編集委員会の一部）からは、中立を獲得する運動こそが図書館の中立性だという論陣が張られた。これらについては、1952 年 8 月～1953 年 4 月の『図書館雑誌』を参照。なお本件は「図書館の自由に関する宣言」の成立過程を辿るには必須だと思われるが、日本図書館協会による 2004 年の復刻版には採録されていないため注意が必要である。
- xxxii 一例として、後述する『図書館界』誌上の討論などが参考となろう。
- xxxiii 各文献についてリファレンスを付与すると煩瑣となるため、文献リストを参照。
- xxxiv 本章で扱う、疑似科学の図書の取り扱いでないものの、図書館における知的自由と社会的責任論の衝突については、例えば Samek（2001=2003）なども参照。
- xxxv 各文献についてリファレンスを付与すると煩瑣となるため、文献リストを参照。
- xxxvi 図書館問題研究会は朝日新聞 1981 年 11 月 19 日の夕刊の記事を引用している。
- xxxvii なお Popper が批判したマルクス主義や精神分析は「人文科学的知識」としても捉えられよう。しかし、Popper はマルクス主義者らが、自らの理論を科学的理論と見なした点について、反証可能性の概念から、マルクス主義を批判していた。これらについては、（Popper 1976=2004a、2004b）を参照。
- xxxviii なおこの箇所については、Popper の批判者である Feyerabend による、科学的仮説が思いつかれるプロセスそれ自体は「なんでもかまわない（Anything goes）」という表現を下敷きにしている。
- xxxix 一般的に蔵書構成（Collection Building）論においては、選書ツール、選択ツールという言われ方もするようだが、選書ツール等と指した場合は新聞の書評等も含まれより広義の選書に資するためのツールを指すため、本章では選書カタログあるいは単にカタログという語を採用する。これはその週に出版された新刊図書の情報を数行の内容案内とともにリスト化した冊子である。冊子内において紹介される各図書には予め日本十進分類番号が付与されており、記載のバーコードを読み込むだけで目録のコピーカタログが可能となっているなど、図書館での利用に資するようになっている。選書用のカタログでもっともシェアがあるものは株式会社図書館流通センター（TRC）による『週刊新刊全点案内』である。ほかにも日販図書館サービス発行『ウィークリー出版情報』や大阪屋の『新刊案内』なども図書館向け新刊情報として知られている。
- xl なおボーイズラブの定義は困難であり、さしあたっては、男性同士の同性愛を取り扱った漫画や小説のジャンルのことであると記しておく。
- xli ここでいうレーベルとは、出版社による図書の発行用の位置づけ・いわばシリーズのようなものである。往々にして「○○文庫」という記述がなされる。レーベルごとにターゲットとする読者層の違いといった特性があり、例えば、どここの出版社から出される性的表現を全面的に押し出した図書は「××文庫」のレーベルで出版される、といった暗黙的了解が読者層には存在する。したがってその暗黙的了解に則って、特定のレーベルの書籍群は性的表現等が強調されているため「図書館にふさわしくない」、ゆえにそもそも図書館

の蔵書としないことが「レーベル切り」である。

^{xlii} バクシーシ山下, 2007, 『ひととみな, ハダカになる。』理論社, のことであろう。

^{xliii} このように、図書館員による自主規制が想像以上に多く行われている件には、アメリカ図書館界に衝撃を与えた記念碑的な調査にコロンビア大学のフィスク (Marjorie Fiske) による実態調査がある (Fiske 1959)。わが国においても大場博幸が「暗黙の選択基準：市町村立図書館における新聞・雑誌所蔵」(大場 2004) において報告を行っている。

^{xliiv} TRC の選書カタログにおいて、当初は「科学」に分類されていたが、その後、超心理学といった分類番号に変更された経緯があった。また、利用者が「この図書が棚にあるのはおかしい」という指摘を行い、結果、配架場所を変更した図書館もある。

^{xlv} たとえば E の発言である、選書カタログから分類番号が変化したケースなどがそれにあたる。ほかに Web 検索で「水からの伝言 and 分類」で検索すると、各地の図書館において、利用者らの批判によって分類番号の変更が行われた複数の事例が確認できる。また、図書館、異議申し立てを行う利用者、一般の利用者の三者による双方向的科学コミュニケーションの場としての公共図書館の存在を論じたものとして田辺・新津 (田辺・新津 2004) を参照。

^{xlvi} なお、調査設計上、不可避であった調査上の問題点について断っておきたい。本調査では検閲的な意図はないことは繰り返し強調したものの、疑似科学が社会問題として議論されていた時期とも重なっていたため、調査設計のいわば理論負荷的な面があらわれた結果、被験者が疑似科学図書を「問題」として捉えた可能性はある。

^{xlvii} たとえば、Popper から敷衍した、あるいはまったく違うアプローチを取りうる可能性もあると考えられる。以下に素描する。たとえば、近年盛んになっているものに、Narrative Theory (物語論、物語り論) がある。歴史学者の Danto (Danto 1965=1989) によって「無色透明な単一の「正しい」国家の歴史」を破壊するために提出されたこの議論は、近年、医学や看護といった領域において盛んに受容されている。物語論を援用した、著名な心理学者の Bruner は、人間の物事の認識構造を、論理-科学的様相と物語様相の2つに分け、人間の認識は両方の様相によって相互補完的に働いていると論じている (Bruner 1987=1998)。ここで、物語様相は必ずしも科学的に正しい必要はないことが特徴的である。心理学や看護で物語論がよく受容されていることが示しているように、この論のもつ特性は、例えば「医師」のみに通用する論理-科学的様相だけでは、患者の不安といった「語り」は吸収し尽くせないことを暴きだす。つまり、物語論とは、「科学的に必ずしも正しくなくても構わない」語りと、それによる救済の重要性を指摘するものである (田村 2007)。乱暴に言い換えてしまえば、仮に疑似科学的であったとしても、物語的なものは科学的な軸でのみで成り立つものと相互補完的な関係として機能しうる。翻って、我が国の図書館では健康情報棚の設置が盛んである (健康情報棚プロジェクト編 2005)。健康情報棚は闘病記を中心にした特集コーナーであることが多い (北澤・石井 2006)。この物語論に積極的にコミットする立場からすると、必ずしも「科学的に正しくない」図書であったとしても、物語的に有効であれば、むしろそれは図書館あるいは健康情報棚にとっては疑似科学図書の収蔵は望ましい、といった価値の転倒は十分に起こりうる。疑似科学図書の収蔵の是非の倫理についてはひとまずおくにしても、疑似科学図書のいわば「有用性」については、理解しつつも本章では触れなかった。

^{xlviii} 本章ではそれほど選書カタログについて紙幅を割かなかったが、選書カタログについて今後詳細な調査が必要であろう。選書カタログの我が国における展開と受容についても、たとえば TRC の成り立ち、日本図書館協会との関係も含め、検討する必要がある。選書カタログはカタログガーをはじめとした人々の膨大な労力がつぎ込まれた非常に有益で利便性の高いものである。だからこそ、図書館における選書カタログの積極的な利用といった、利用者からは不可視になりやすい、いわば環境管理型権力に対して、それを批判する・肯

定するといった単純な姿勢にとどまらない、このようなものが存在することそのものへの敏感さの必要性は指摘しておく。なお公共図書館における選書カタログの利用についての網羅的な研究は存在しないものの、児童書出版における選定には、片山（2013）を参照。

4 開かれた社会と図書館情報学

4.1 オープンアクセスの思想的根拠としての Popper

本章では、Popper 哲学のなかで反証可能性と並び著名な「開かれた社会」の概念が図書館情報学にどのように裨益するかを描き出す。開かれた社会は、記録されたものと我々が相互作用した結果として実現される。Popper は、開かれた社会の比喻として書物市場を捉えている。同様に、Popper に私淑する投資家である Gorge Soros は、コピー機を開かれた社会の比喻として捉えている。これら、記録物と我々が相互作用する結果、導き出される開かれた社会について論じる。すなわち、客観的知識論が論じていた記録されたものと、我々が相互作用した結果、どのような現象がもたらされるのかについて述べ、開かれた社会をさらに推進するために、どのような意図をもってオープンアクセス運動に資金投入が行われているかについて論じる。

客観的知識論には、伝達と棄却の二重性があることは既に述べた。前章では、反証可能性と客観的知識のかかわりを論じ、客観的知識論の持つ棄却の性質をもととして議論したものであった。本章では、開かれた社会と客観的知識論のかかわりを論じ、客観的知識論の持つ伝達の性質について論じる。よって、前章と同様、客観的知識論を踏まえた Popper の他の哲学は、図書館情報学における現象を考える際の手がかりとして有益であることを示す。

4.1.1 本研究の背景

本章では、近年の学術情報にかかわる主要なトピックの一つであるオープンアクセス運動を取り扱う。これはインターネットを介して学術論文等への障壁のないアクセスの実現を目指す運動である。この運動の直接の契機とされるものが BOAI である。オープンアクセス運動は図書館情報学に限らず大きな潮流になっているが、その背景的な思想まで論じられることは少ない。そこで、オ

オープンアクセス運動の思想的背景をあきらかにする。また同時に、その思想的背景はオープンアクセス関係者からは自覚的に扱われていないことも同時に指摘する。結論先取ではあるが、理解に資するために本章の結論を事前に論じる。Popper の開かれた社会の概念はオープンアクセス運動の始動時の思想的根拠として用いられた。ただしこの意図はオープンアクセス運動の関係者には表立って認知されているものではない。ただし開かれた社会の概念に強く影響を受けた投資家、篤志家である Soros によって、記録物の円滑な循環を通して開かれた社会の実現を図る意図をもってオープンアクセス運動は支援されていた。この論証を本章では行う。

具体的には、オープンアクセス (OA) 運動を支援している財団の一つ、Open Society Institute (開かれた社会財団、OSI) が中心となり発布した Budapest Open Access Initiative (BOAI^{xlix}) とその周辺について論じる。

なお Open Society Institute は現在 Open Society Foundation と改名しているが、BOAI 提唱時には OSI という名前であったので、本章では OSI の表記を採用する。BOAI 以前のオープンアクセス運動の歴史に関するまとめとしては、時実 (時実 2004) や倉田 (倉田 2006, 2007) による論考がある。時実は BOAI 以前のオープンアクセス運動の源流として、物理学分野のプレプリント・アーカイブである e-print archive (現在の arXiv.org) の開設、学術雑誌の価格高騰問題とそれに対抗するためのアメリカ研究図書館協会 (Association of Research Libraries : ARL) による SPARC プロジェクトの存在、アメリカ国立衛生研究所 (National Institute of Health : NIH) による生命科学分野の電子リポジトリ・E-biomed (後の PubMed Central) の試み、Public Library of Science (PLOS^l) の活動、OA 雑誌のビジネスモデルを実現した BioMed Central 社 (2008 年に Springer 社により買収) の存在をあげている。倉田はこれらに加え、1994 年に Stevan Harnad が行った、出版社を紙媒体から電子媒体に移行させ契約コストを削減させる、いわゆる「転覆計画」ないしは「破壊的提案」

と呼ばれる公開メーリングリストへの投稿（倉田 2006, 2007）をオープンアクセス運動の契機として紹介している。これは研究者自身による雑誌投稿論文のプレプリント・リプリントの電子公開を求める提案であり、後に BOAI の中で OA の実現手段の一つとして取り入れられたセルフアーカイブの呼びかけであった。

オープンアクセス運動は複数の起源と推進者を持つものであったが、これら関係者が一堂に会し、一つの運動をなすきっかけとなったのが 2001 年にブダペストで開催された会議と、それを受け翌年に発表された BOAI である。BOAI は OA とは何かを明確に定義し、その実現手段も示したことで、後のオープンアクセス運動の方向性を決定づけたとされる。このように BOAI にいたるまでの背景について、諸活動やその担い手の面からのまとめは存在する。これはオープンアクセス運動を学術情報流通の世界で生じた問題とその解決手段の模索、という側面から捉えたものであるといえる。しかしオープンアクセス運動に関係する諸団体・個人の中には、学術情報流通を専門とするものだけでなく、政治、経済、思想的意図を持って活動に参加したものもいるように考えられる。たとえば BOAI の宣言時の署名者は 16 人いるが、その中には SPARC、PLoS、BioMed Central の代表や Harnad に加え、OSI の職員が 3 名含まれる。

加えて、OSI からの資金援助を受けている参加者は多い。たとえば、BiolineInternational は OSI およびユネスコ等の資金援助を受けている。NextPageFoundation は 2001 年、OSI のスピンオフ組織として成立した。eIFLProject は 1999 年に OSI が始めたプロジェクトである。また BOAI 起草者の一人である、オープンアクセス運動の推進者であり哲学者でもある Peter Suber は著書“Open Access”の謝辞のセクションで、OSI の資金提供に対して感謝を記している。BOAI の起草者のうち、直接的に OSI の資金提供を受けている人間は 8 名と半数にのぼる。おそらく OSI から間接的に資金を受けている者も含めたらさらに増えるだろうⁱⁱ。

2014 年現在のオープンアクセス運動は様々な意図を持って参加している人々から構成されている。また BOAI から 10 年後の宣言である BOAI10 のミーティング参加者は現在 30 名近くにのぼり、その構成メンバーの中では OSI／OSF の職員はごくわずかに限られている。したがって現代の OA に全面的に OSI／OSF が関わっているとは言いがたい。そこで、BOAI 成立当初の状況に立ち戻って、そもそものキックスタートはどのようなものだったか検討していきたい。

そもそも BOAI は OSI の援助によって開催・発表されたものである。実際には OSI に限らず、なんらかの思想的背景、あるいは私的な利害関係に基づいてオープンアクセス運動に参加した個人・団体は少なくないと考えられるが、このような各参加者の思想的な背景まで踏み込んだオープンアクセス運動についての議論はこれまで存在しなかった。しかしこのような背景まで理解していくことが、皮相的な理解にとどまらずオープンアクセス運動とは何であるか、この運動の中で誰が何を獲得し、何を実現しようとしているかを知る上では重要である。それによって、オープンアクセス運動の理念をある意味で素朴に受け入れ、参加している人々にとって自身の立ち位置を見直す契機を与えうる。

以上のような問題意識に基づき、本章前半において OSI の思想的背景とその BOAI への影響を概観する。本章後半では、オープンアクセス運動に関する文献群中での BOAI への言及状況を調査することにより、これら思想的背景がオープンアクセス運動の中で認知されていないことをあらためて確認していく。最後に、これらの結果をまとめ、オープンアクセス運動の伏流水として流れている思想と計画の存在、その運動内に与えうる影響について検討する。

4.1.2 本章の先行研究の系列

BOAI の思想的背景に直接言及する研究はこれまで見当たらない。しかし間接的な意味における先行研究はいくつか認めることができる。

やや結論先取気味になってしまうが、BOAIの根底には、哲学者である Karl R. Popper が『開かれた社会とその敵』において提唱した開かれた社会の概念がある。この開かれた社会への言及や解題書は多く書かれている。ただし「開かれた社会」を図書館情報学に関連させて議論した話題は見当たらない。むしろ、オープンアクセス運動のきっかけに、そもそも何を目的としてスタートアップ用の資金援助が行われたかという指摘はなされていない。

オープンアクセス運動と類似点が認められるもので、ソフトウェア開発手法の一つであるオープンソースの概念を Popper と結びつけて論じるものとしては飯高がある（飯高 2007）。また思想的根拠にまでは踏み込んでないものの、酒井は現代ロシアの図書館がオープンアクセス運動にどう接近しているかを詳解している（酒井 2009）。しかし前者は相互対話的な開発とは何かという、あくまでもソフトウェアを対象とした議論を主眼としており、後者はソビエトという「閉ざされた社会」を開かれた社会とするための OSI といった視点で議論され、興味深くはあるものの、先に述べたように詳細な思想的根拠にまで踏み込んでいるとは言い難い。

そこで、本論文では BOAI の思想的根拠にまで立ち戻って議論をし、オープンアクセス運動の源流を確認しなおす視座の獲得を行う。そのために、まずは、Popper の開かれた社会の概念がどのように記録物の観点と繋がっているかを論じる。

4.1.3 記録物との相互作用と開かれた社会

Popper の開かれた社会の概念は、従来、討論による社会の漸進という点に重点を置いて注目されてきた。しかし Popper が強調するポイントとして、媒介としての記録物が必要という点がある。つまり会話はその場限りで消散するが、記録物を媒介とすることで、現場にいないものも参加可能な批判が可能であるという。

西洋の自由観を念頭に置いていると断っているものの、Popper は、記録物が媒介することにより社会が進歩した嚆矢としてギリシャのアテナイをあげている。Popper は後年、京都賞を受賞しているが、そのときの記念講演「ヨーロッパ文明の起源」（長尾・河上編 1994）は、Popper の哲学を本人自身が晩年から振り返ったものと捉えることが可能である。またこの講演には Popper の客観的知識論と開かれた社会の連関が示されている。

Popper は、『ソクラテスの弁明』を読み直しているときに、ヨーロッパ文明の起源として「書物市場」を位置づけることが可能であると着想したという。

『ソクラテスの弁明』のなかには以下の節がある。

親愛なるメレトス君、君はアナキサゴラスを訴えるつもりなのか。君はこの人達を馬鹿にしきって、彼らはクラゾメノス人アナキサゴラスの著作がこの種の説で充たされていることを知らないほど無学だと思っていられるのか。するとまた青年が私から学ぶといわれているところの智識というのはオルケストラに行って高々ードラクマも出せば時折買うことの出来るもので、従ってソクラテスがそれは我が物であるらしい顔をするならば――ましてそれはきわめて変妙な説なのだから――彼を嘲笑するためとすることが出来るものなのか。（Plato n.d.=1992: 36）

ここにおけるオルケストラが何かということは『ソクラテスの弁明』を研究する研究者らのなかでも、説が分かれているようである。ここで引用した岩波文庫版の訳者注においては、オルケストラについて3、4の異説があるが、どれが正しいかはわからないため紹介するに留めるとの断り書きがある。ギリシャ時代の劇場のオルケストラにおいて、本屋がここで新刊書や有名な作家の著作などを販売した可能性、ソフィストらが講演したオルケストラの入場料という可能性、ただのオルケストラの入場料と解すものもある。ただし市場の図

書販売所と解すと、この箇所の意味は明瞭となると訳者は断っている。

Popper は、ここの箇所を市場の図書販売所と解しているようである。またここから Popper は「書物市場」がアテナイで成立していたことを推定する。古代の 1 ドラクマが現代においてどの程度の貨幣価値であったかは、いまだ研究途上とされるため本論文で言及するのは避けるが、少なくとも『ソクラテスの弁明』の文脈からすると、それほど高価ではないと推測はできる。

Popper はこのような書物市場が繁栄している根拠として、記録物を読む・書くことができる人々が一定数いたことを推定するⁱⁱⁱ。書物市場が成立するためには、書物がそれ相応の量で流通していなければならない。では、相当量の書物が流通するきっかけは何かと Popper は問う。

Popper によると、ホメロスの叙事詩は口承であったが、ペイシストラトスが、文字を解する大量の奴隷を使って書き取らせ、出版を行った。この書物の大量出版が、市場での栄えをもたらし、アテナイの市民のリテラシーを育んだ。それらの営みなくしては、アテナイの文化的発展は行われなかったと Popper は推測する。また Popper はアテナイの人々が文字を解する証拠として、陶片追放を示している。

このホメロスの出版、記録物の流通が、Popper のいう「開かれた社会」の象徴に繋がっている。なぜならば Popper は対話を可能にする社会、つまり自らが間違っている可能性を認め、また同様に相手も間違っている可能性を求め、対話によって漸進的に改良していくという社会こそを開かれた社会と述べているからである。また Popper はその象徴をソクラテスの問答に求めている。ソクラテ斯的問答法は、真理を認めつつも無知の知という形で問答を通して真理に接近するものであり、Popper はそれを反証可能性・批判的合理主義の精神の原点として捉えている。一方でプラトンのイデア論を根拠とした賢人政治は、イデア的である賢人政治は不変であるがゆえ批判的合理主義と反するものとし、結果として「閉ざされた社会」を招くと批判した。しかし同時に、プラトンの

アイデア的な、記録物によって成立する世界（客観的知識の世界）はソクラテス
的問答法を成立させるための根拠として捉えているといえる。

Popper はここから、印刷物の発明、つまり Gutenberg とルネサンスに話を
移し、「(グーテンベルグの発明は) ペイシストラトスの発明を遙かに大きな規
模で反復したものと言えるでしょう」(Popper 1994 : 24) と述べる。商業出
版の父といわれる Aldus Pius Manutius (1450 頃-1515) が、アリストテレ
スの著作集などの学術書を一千部刊行したのは 1500 年のことである、と
Popper は指摘する。そして、アテナイから地中海に書物が広がったことによ
ってアテネ文化が伝播したことと、Gutenberg の活版印刷をきっかけにし、ル
ネサンスの人文主義が花開いた点について、記録物が果たした役割に類似点が
認められる、と述べる。Popper はここから、書物の存在、書物市場が西洋文
明、とくに開かれた社会を構築する背景であったことを述べる。

もちろんギリシャ時代における社会は、発話のほうが記録物より優位性があ
ったことはよく知られている。『パイドロス』にあるように、ソクラテスやプラ
トンは、技術によって支持された人工的な外的記憶（ヒュポムネーシス）を退
け、超越論的内的想起（アナムネーシス）を優先させたことはよく知られてい
る (Chartier 1997=2000)。Popper も同様の注意を脚註で払っている (Popper
1984=1995: 183)。だが、Popper はその当時の思想的優位性がどうであった
かではなく、後世から見て、結局記録物がどういう働きを持ったか（そしてそ
の結果、アテナイとスパルタとどちらが文化的に花開いたか）といったことに
重点を置いて論じているといえる。

Popper の議論に通底するのは、記録物、つまり世界 3 的存在を媒介にする
ことにより、社会が発展するという発想である。つまりソクラテス流の問答法
を書物という媒介をもとに捉えなおしたといえる。Popper はその場限りで消
え去るような発話行為のみをコミュニケーションと捉えるのではなく、記録物
によって過去を参照可能な形にすることが重要であると唱えている。すなわち、

Popper の客観的知識論は、開かれた社会の基礎となるものである。さらに、ここでは反証可能性から見た客観的知識論のように、記録されたものが棄却されていく、排除の志向ではなく、記録された知識、理論が伝達されていくオープン志向が示されている。

Popper はこのように書いている。

われわれの諸々の理論、究極的にはわれわれのおこなうすべての仕事は、われわれの子供のようなものである。われわれの産物はその作り手から大幅に独立していく。われわれはわれわれの子供たちから、あるいはわれわれの諸理論から、われわれがこれまでそれらに与えたよりもずっと多くの知識を入手する。われわれが無知の泥沼からわが身を引き上げることができるのは、こうしてである。またこのようにして、われわれすべては世界 3 に貢献できる (Popper 1978=1980a: 184)。

以上、開かれた社会を支えるものとして、記録物による我々の相互討論があることを示し、Popper はその象徴をアテナイの書物市場として捉えていることを論じた。そこで、開かれた社会の思想がどのようにオープンアクセス運動に影響を与えているか、BOAI を発布した「開かれた社会財団」と Soros の思想、経歴に触れてゆく。

4.2 Soros、Open Society、OSI

4.2.1 Soros と開かれた社会

本項では、BOAI 発表の中心となった OSI を立ち上げた、Soros の経歴や思考等に触れる。Soros は投資家・篤志家・哲学者という肩書きで紹介されることが多い。本節で紹介する OSI および Soros の生い立ちについては、Michael T. Kaufman 『ソロス』(Kaufman 2003=2004) を主として参考とした。

Soros の慈善事業は後述する開かれた社会に深くコミットしている。Soros はハンガリー出身であり、父はエスペラントの話者であった。Soros はユダヤ系でありながらもそれを巧妙に隠しナチスに協力するふりをしつつ戦争中のハンガリーを生き延びた。その後、Soros は 1947 年、17 歳の時にナチスの後に進軍したソ連の占領を受けたハンガリーから脱出し、イギリスに移住している。何年間も両親の援助が受けられなかった Soros は苦学生として様々なアルバイトを行っていた。1949 年に London School of Economics (LSE) に入学する直前の夏休みには、彼はあまり人の入っていないプールの監視員の仕事にありつき、図書館や友人から借りた本を読みふけている。Soros はこれを「人生の中でも指折りの楽しい夏休み」と語っている。そのときに触れた Popper の『開かれた社会とその敵』が Soros の人生のなかで決定的な指針となる。Soros 自身、自著でこう記している。

私の思考は…いちばん身に染みている影響は…ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス最終年度にチューター（個人指導教員）を努めてくれたカール・ポッパー[sic]から受けたものである。…ポッパーの『自由社会の哲学とその論敵』は天啓のように私の心を強く打ち、この著者の哲学の探求へと駆り立てたのである（Soros 2006=2006 :56-57）

Popper は 1946 年に LSE に着任しており、Soros はちょうど直接指導を受けることができた立場にいたことになる。Soros 自身、LSE の在学中は Popper のような哲学者、あるいは John M. Keynes のような経済学者を自らの目標としていたようである。しかし学力及び外国人という点が Soros の夢を阻む。その後の Soros の足取りは他の伝記等に譲るが、Soros の出身であるハンガリーにソロス財団を設立した後に行われた「コピー機事件」（橋本 2000）が白眉であろう。当時のハンガリーは共産党による一党独裁であった。Soros が開か

れた社会を推進し、また共産党にしばしば見られるような一党独裁を大きく攻撃する理由には、Soros の幼少期の記憶が色濃く影響を与えていると言われている。彼が最初にターゲットとしたのは、生まれ故郷のハンガリーと共産党であった。ハンガリー共産党からは Open Society Institute という名前は許可されなかったため、Soros は「ハンガリー科学アカデミー／ジョージ・ソロス財団」という名前で活動をはじめた。財団はまず図書館や大学の司書をターゲットとし、統制下のハンガリーでは入手困難な本をイギリスやアメリカから買い集め、それを販売することを試みた。そのなかにはハンガリー国内では発禁とされる図書も多くあったため、司書らの注目を大きく集めた。次に財団が試みたのが、コピー機事件である。ゼロックス・プロジェクトともいわれるこの事件は閉ざされた社会であるハンガリー共産党の独裁を破壊するというセンセーショナルな結果を巻き起こした。

ソロス財団の中心人物の一人、Miklos Vasarhelyi はハンガリー在住でコロンビア大学に留学経験があったが、アメリカと比べハンガリーでは複写のための労力が膨大なのに気づいていた。機密保持のために複写機は専門機関が鍵を掛けて保管し、複写のためには申込書に必要事項を書き込む必要があり、しかも申込内容を検閲された上でようやくコピーが可能であった。そこで財団は年間 200 台を越えるコピー機を大学等の研究機関に無償で配布した。この配布は数年間続き、情報の伝達力はとたんに上昇した。Kaufman はこう記している。

ソロスはハンガリーに複写機を持ち込めば、まさにこれが「開かれた社会」の重大な隠喩であることに気がついた。誰にも邪魔されずに情報に接触できるというアクセス権を意味するばかりでない。市民それぞれがデータを見つけ、それを自由に利用するという市民参加の概念を象徴するものになるのだ。批判精神を広げ、教条主義的な思考を打破するために、これ以上の手段があるだろうか？ ……この複写機持ち込み計画は、書籍販売計画を

さらに上回る成功を収めた。突如として、何の告知もなく、知的職業に就いている者や大学関係者は、自分の望むは[sic]何でも——研究論文でも、恋文でも、資産記録でも、政治関係や宗教関係のパンフレットでも、むろん検閲ずみの資料でも——すべてコピーがとれるようになった。独裁体制下の主要なルールの一つがいつの間にか変更されていた。つまり、とくに許可されていないものはすべて禁じられる、というルールはなくなったということだ（傍点は筆者による）。(Kaufman 2003=2004: 298)

Soros が篤志家として慈善事業を行う際には、開かれた社会が存在しない地域ではその形成を後押しし、開かれた社会が実現している地域ではその敵を排除するという姿勢（Ibid:p.7-8）がある。またそのためには閉ざされた世界に入り込み、自らの目的を巧妙に隠し慈善事業を行い、結果として開かれた社会を実現するという方法を戦略的に採用している。

ハンガリー共産党一党独裁が破綻した後も、ソロス財団はさらに発展している。たとえば 1994 年から 2000 年にかけて Soros が各財団に提供した総額は 25 億ドル超であり、医学研究にのみ援助を絞った 2 つのある財団を除けば、Soros の提供額は世界最大ということになる。ソロス財団の特徴を指摘して、Kaufman はさらにこう書く。

こうした数字はたしかに関心を呼んだ。だが、Soros の慈善事業は、その莫大な提供金額よりも別の面で際立っていた。ほかの財団と比べてかなり異例だったのは、「オープン・ソサイエティ・インスティテュート」[sic]が、現存の資金提供者が自分の哲学、願望、直感を反映させる一種の道具だったことだ。（Ibid.: 381）

その Soros の資金援助によって成立した BOAI と、それを根拠として活動し

ている様々な OA 関係者について調査をすることにより、Soros の「哲学、願望、直感」がどう伝達されているかを見ていく。

4.2.2 OSI と BOAI

OSI は 1993 年に Soros によって設立された団体で、中央・東ヨーロッパおよび旧ソ連地域を中心にソロス財団の活動をサポートすることを目的とする。33 のイニシアティブからなり、そのうちの 1 つ Information Program 部門は開かれた社会実現のため、とくに貧困地域における知識・情報のアクセス、交換、生産の強化を目的の一つとしている。OSI はこの部門を中心としてオープンアクセス運動に積極的に参加しており、中でも重要なのが BOAI への関与である。BOAI は 2002 年に発表された、学術文献をインターネット上で自由に利用できるようにすることを目的とした宣言である。OA とは何かを定義し、その実現のための 2 つの道（セルフアーカイビングと OA 雑誌）を提示したこと等からオープンアクセス運動の契機とされている。同様の宣言には後に発表された Berlin 宣言ⁱⁱⁱや Bethesda 宣言^{iv}があるが、これらと BOAI の大きな相違点として BOAI ではその第一段落で「文献へのアクセス障壁を取り除くことで研究が加速し、教育の質が高まり、富んだ者と貧しい者の間で互いに学習を共有し、文献を最大限活用し、人類を共通の知的な対話と知識探究の場へ結びつける基礎を築くだろう」とし、オープンアクセス運動の目的の一つとして、Popper が「よりよき世界を求めて」と呼ぶような「人類の共通の対話の場」を作ることを組み込んでいることが挙げられる。BOAI は 2001 年に OSI の主導により開催された会議に基づくものである。また BOAI の草案の起草者である Suber は OSI の経済的支援を受け、FOS Newsletter（現在の The SPARC Open Access Newsletter^v）、Open Access News などのオープンアクセス運動の伝播を担ってきた人物でもある。これらの点によって、他の宣言にはみられない OSI の開かれた社会を実現する意図が BOAI に盛り込まれることになっ

たのではないかと考えられる。

BOAI の本文はウェブ上にて可読である。

当時の URL は <http://www.soros.org/openaccess> であり、ソロス財団のドメイン直下付近に設置されていた^{lvi}。また FAQ のページには BOAI と OSI の関係についての記述がある。OSI は BOAI を招集した機関であり、最初の BOAI の署名者であると明確に記述されてある。また PLoS は OA の議論でしばしば引き合いに出されるが、これとの差別化にも触れられている。PLoS のフィールドが主として科学を対象とするのに対し、BOAI はすべての学問分野に適用されると宣言している。さらに、PLoS は出版社的な機能を持つのに対し、BOAI は出版自体の機能は持たない一方でオープンアクセスジャーナルとセルフアーカイビングの戦略提示を全面に押し出している。2002 年の段階で OSI は OSI Information Program として、オープンアクセス運動を後押しするために 3 年間、年間 1 万ドルの資金を連続して投入した^{lvii}。OSI は持続可能なセルフアーカイビングの策定を行う等といった戦略をコミットメントで謳っている。このように、ソロス財団のオープン志向する戦略のもとに BOAI は成立している。このオープンには、源流としての開かれた社会の思考がかかわっており、Popper—ソロス財団—BOAI と、特定のビジョンを目指す思想は一貫して流れているといえよう。

BOAI の各段落の解題は以下の通りである。

第一段落では OA の背景として科学者・研究者が業績を出版する際に原稿料を求めない伝統と新技術であるインターネットを挙げ、これらによって実現される学術論文への障壁のないアクセスによって前述のように研究が加速し、教育の質が高まり、人類共通の対話の場を作る基礎ができるとしている。

第二段落では OA が経済的に妥当なものであること、利用者にとって役立つものであると同時に著者にとっても多くの読者を得て研究のインパクトを高めるなどの便益があるとしており、多くの人々が OA 実現の取り組みに参加する

ことでそのような便益をいち早く誰もが享受できるようになるとしている。

第三段落では OA とは何かを定義しており、OA の対象は「研究者が原稿料を受け取ることを期待せず公開している文献」であること、BOAI 中における OA とは「インターネット上において、誰もが文献を読み、ダウンロードし、コピーし、再配布し、印刷し、検索し、それらの論文のフルテキストにリンクを貼り、インデキシングのためにクロールし、データとしてソフトウェアに流し込み、その他あらゆる合法的な目的のために、インターネットにアクセスできることそれ自体を除く経済的、法的、技術的な障壁なく文献を利用できるようにすること」としている。

第四段落は OA のコスト負担に言及し、そのコストが従来の学術出版にかかるコストより遥かに低いことから OA の実現可能性の高さにつながるとしている。

第五段落は OA 実現のための 2 つの手段（著者自身が学術雑誌掲載論文を Web にアップする「セルフアーカイビング」と、最初から無料で利用できる雑誌である「OA 雑誌」の創刊）について説明した段落である。

第六段落は OSI が OA 実現のために支援することの説明であり、第七段落は政府・大学・図書館などへの活動参加の呼びかけである。

OSI は BOAI の発表に関わったほか、オープンアクセス運動に関わるプロジェクトに総額 300 万ドルの資金を援助すると発表した^{lviii}。2005 年 4 月までに、45 のプロジェクトを対象に約 177 万ドルが拠出されている。その中には約 15 万ドルの助成を受けた Directory of Open Access Journals、14 万ドルの助成を受けた Directory of Open Access Repositories 等、後のオープンアクセス運動の中で重要な役割を果たすツールへの助成も含まれている^{lix}。

このようにオープンアクセス運動中で大きな役割を果たした OSI であるが、その設立理念かつ活動目的として開かれた社会思想があることが、どれだけオープンアクセス運動関係者の間で認知されているかは必ずしもあきらかではな

い。

そこで以下ではまずオープンアクセス運動関係文書中での OSI および開かれた社会の思想、その提唱者である Popper に対する言及状況について調査した結果を述べる。次いで、BOAI の中で「人類共通の対話の場」について扱った第一段落について、同様にオープンアクセス運動関係文書中での言及状況の調査結果を示し、開かれた社会思想がオープンアクセス運動中でどのように扱われているのかをあきらかにする。このような手法を採った理由として、オープンアクセス運動関係文書中に開かれた社会についての言及がある程度存在すれば、オープンアクセス運動に関して開かれた社会の概念を踏まえつつオープンアクセス運動が行われたことがわかるであろうし、あるいは言及されていなければ、開かれた社会の概念を考慮しているか否かについては可視化できないことがわかるためである。すなわち、BOAI を発布した主体たる OSI は Popper の思想の影響を強く受けていることは明らかであるものの、実際にオープンアクセス運動のプレイヤーらが同じ思想を共有しそれを公表しているかという点を確認することが本調査の目的である。

4.3 開かれた社会の認知状況調査

4.3.1 調査方法

分析の対象とするオープンアクセス運動関係文書群は、Webサイト "Bibliography of open access" (Bailey 2005) 掲載文献のうち、同サイトからリンクされ、オンラインで閲覧可能なものとする。同サイトは2005年に出版された書籍『Open Access Bibliography』を加筆・更新しているものである。『Open Access Bibliography』はOAに関する論文等に関する最も網羅的な書誌としての評価を得ているとされ、その更新版である "Bibliography of open access"^{lx} も網羅性の高いものとなっている。その他のオープンアクセス運動関係書誌としては The Open Citation Project による "The effect of open access and

downloads ('hits') on citation impact: a bibliography of studies^{lxii}があるが、こちらはOAが論文の被引用数に与える影響に関する文献を主として扱うものであり、網羅性に欠ける。さらに"Bibliography of open access"の特徴として、論文や図書のみでなく、Webサイトや著名なブログ記事、メールマガジン等も含んでいる点がある。これら図書や論文といったフォーマルな情報源よりも広範な情報源を対象とすることにより、オープンアクセス運動の成立結果のみならず、運動渦中の議論や参加者の意図等も含めて観察できることが期待できる。以上の理由から、本研究では"Bibliography of open access"を対象とした。

調査は二段階に分けて実施した。はじめにオープンアクセス運動中での OSI、開かれた社会思想、およびその提唱者である Popper に対する認知状況を直接的にあきらかにするために、文献群中でのこれらの語に対する言及状況を調査する。"Bibliography of open access"掲載文献のうち、全文がダウンロード可能なものを全てダウンロードした後、全文検索により"open society"または"Popper"を含むものを抽出し、文献群中での出現回数を集計した。合わせて、"open society"または"Popper"についてどのような文脈で言及しているかを目視により判断した。なお検索時に大文字と小文字は区別していない。"Open Society Institute"については熟語中に"open society"が含まれるため、別に検索し直すことはしなかった。

第二段階は、開かれた社会思想および Popper について直接的に言及はしていないが、BOAI の中でこの思想の影響を受けていると考えられる第一段落に言及している文献の調査である。まず、第一段階と同様に"Bibliography of open access"掲載文献のうち、全文検索により"Budapest Open Access Initiative"または"BOAI"を含むものを抽出した。次に抽出した文献が BOAI のどの部分に言及しているかを、目視により確認・集計した。なおどちらの調査

でも、内容についての判断が主観的にならないよう、筆者と共同研究者の2名がそれぞれ判断を行ったうえで、結果を統合した。BOAIの全七段落中、第一段落のほかに言及される頻度が多いと考えられるのはOAとは何かを定義した第三段落と、OA実現のための2つの道について説明した第五段落である。そこで本論文では抽出した各文献がこれら3つの段落の内容を引用しているか否かを分析した。さらに第一段落を引用している文献については、前述の第一段落の内容のうちOAの背景に関する部分を引用しているか、OAにより実現できるであろうことについて触れた部分を引用しているかを確認し、後者の場合には単に「研究が加速し、教育の質が高まる」という部分を引用するにとどまるのか、「人類共通の対話の場」作りにまで言及しているかも確認した。「対話」とは、Popperが繰り返し強調する、開かれた社会概念の中心的キーワードである。

この対話という表現は、先述のBerlin宣言やBethesda宣言には存在しないものであり、BOAIの起草に際して、OSIの意図が象徴的に込められていると推測される。これにより、BOAIに言及する文献中で開かれた社会思想が意識されているか否かが判断できると考えた。

4.3.2 開かれた社会およびPopperへの言及状況調査の結果

"Bibliography of open access"掲載文献の取得は2009年4月25-28日にかけて行った。調査実施時点での同サイト掲載文献は1509件で、うち282件は有料雑誌等掲載文献または冊子体のみに掲載された文献等、リンクの貼られていない文献であった。同サイトからリンクを貼られている文献は1227件あり、このうち292件がリンク切れによりファイルを取得できず、42件は動画ファイル等、内容の検索が不可能なファイルであった。これらを除いた、全文検索可能な文献ファイル893件を分析対象とした。

分析対象文献893件中、"Popper"を含む文献は1件もなかった。"open

society"を含む文献は 114 件存在したが、すべて"Open Society Institute"に対する言及で、"open society"のみで文中に登場した文献はなかった[38]。OSI に対して強い思想的影響を及ぼした Popper であるが、オープンアクセス運動の中では直接的にはその存在は意識されていないと言える。

4.3.3 BOAI への言及状況調査結果

前述の分析対象文献 893 件中、"Budapest Open Access Initiative"または"BOAI"を本文中に含むものは 123 件であった。表 4-1 はこれらの 123 件が BOAI のどの段落に言及しているかを示したものである。

表 4-1 BOAI の引用状況

		第五段落 に言及	第五段落 に非言及
第一段落 に言及	第三段落 に言及	1	0
	第三段落 に非言及	2	1
第一段落 に非言及	第三段落 に言及	1	24
	第三段落 に非言及	18	76

表から第一、第三、第五いずれの段落にも言及していないものは 76 件、いずれかに言及しているものは 47 件であった。言及していないものの多くは BOAI の名称のみ挙げるか、実際の活動を中心に取り扱うなど本文の内容に言及していないもの、あるいはごく一部のみ取り上げているものである。本文に言及している文献で第一、第三、第五段落以外の段落に言及しているものはほとんどなかった。

本文に言及している 47 件のうち、第三段落 (OA の定義) に言及しているも

のは全部で 26 件、第五段落（OA 実現の 2 つの道）に言及しているものは 22 件であった。大部分の文献は BOAI を OA の定義の文脈か OA 実現の 2 つの道の説明のために引用していると言える。

47 件中第一段落に言及しているものは 4 件のみであった^{lxii}。これらの文献の書誌事項は本章末尾に示す。第一段落に言及している 4 件についても、その文脈は「雑誌論文へのアクセス改善のビジョン」等として該当部分全体を紹介するにとどまる。OSI の意図する「人類共通の対話の場」についての踏み込んだ言及は全く行われていない。

以上 2 つの調査結果より、開かれた社会思想についてはオープンアクセス運動の中で直接的に認知されていないだけでなく、BOAI の中で間接的にこの思想の影響を受けた部分についてもほとんど検討されてこなかった可能性が示された。

以上を細かな差異には目を瞑りつつ^{lxiii}図示すると以下のようなになる。

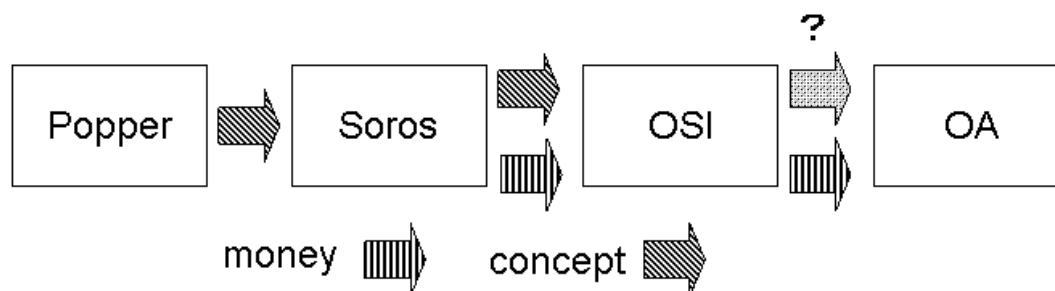


図 4-1 「オープン」の思想と金銭的支援の伝達図

4.4 本章の考察

調査結果より、OSI は BOAI 発布への尽力を始めオープンアクセス運動の中で大きな役割を果たしているが、その活動目的が Popper の開かれた社会思想の実現にあることはオープンアクセス運動中で認知されていないこと、少なくとも公に指摘されてはいない可能性が示された。

しかしコピー機事件において Soros は表立ってはその意図をあきらかにしないままに援助を行い、結果的に当時の共産主義独裁政権の打倒を成し遂げている。オープンアクセス運動は既に欧米を中心とする資本主義・民主主義社会だけではなく、キューバや中国をはじめとする共産主義政権、シンガポール等の独裁政権下にある国や地域にも広まっている。ロシアにおいてオープンアクセス運動によって開かれた社会の実現が期待されているのと同様に、これら閉ざされた社会の状況にある国々でのオープンアクセス運動の普及が、今後第二・第三のコピー機事件となることは十分に考えられる。たとえば OSI の「オープンアクセスプロジェクト」プログラムマネージャである Melissa Hagemann は、オープンアクセス運動に OSI がかわる理由について、開かれた社会思想を明快に引きつつ、「知識とコミュニケーション資源を公平に分配することで—コンテンツ、ツール、ネットワークへのアクセスを提供することで、市民に力を与え、効果的・民主的な統治を実現することができる」としており、OSI のオープンアクセス運動への参加の背景には開かれた社会の実現を目的としていることを強調している (Poynder 2005)。

学術情報の円滑な流通のため、オープンアクセスの動きは今後も加速されていくと考えられる。その目指している世界は、Popper の開かれた社会の概念によってある程度説明できよう。具体的には、開かれた社会のためにはそれぞれの理論を批判的討議に晒す「対話」が必要である。ただし発話といった形での対話は一回限りで終わってしまう。しかし記録物を媒介とした対話はその場にはいないものでも参加可能である^{lxiv}。オープンアクセスの文献はクローズドなものより容易に参照可能であり、対話の礎として用いることが容易である。ゆえに開かれた社会をより推進する根拠となる。それゆえ文献をオープンにし社会における対話を重視させようとするオープンアクセス運動は、OSI のミッションときわめて親和性があつたといえる。

理論と実践という枠組みで説明すると、オープンアクセス運動の理論的背景

としては、開かれた社会があった。しかし実践者は開かれた社会についての言及を行っていなかった。にもかかわらず、結果として、開かれた社会の実現に向かっていたといえる。OSI のミッションのインタビューで明言されているように (Poynder 2005)、Soros および OSI の資金投下は開かれた社会を目指すものとして行われていた。そして、300 万ドルの資金および BOAI によって、オープンアクセス運動は一つの大きなはずみはついた。そのなかのオープンアクセス運動にかかわるプレイヤーらは、OSI がどのようなミッションのもとで資金援助しているかは公には言及していないものの、結果として、OSI のミッションを実現する方向に動いたといえる^{lxv}。記録されたものを円滑に循環させることにより、開かれた社会を実現することが OSI のミッションであった。このことを鑑みると、コピー機事件と同様の構図として、オープンアクセス運動を位置づけることが可能である。

以上、Popper の哲学、とくに開かれた社会は、現代の我々の学術情報流通のなかにも影響を与えている点について論じた。具体的には、開かれた社会は記録物と相互作用することにより実現されることを論じた。Popper の開かれた社会とは、ソクラテス流の対話による問答を記録物による問答という形で読み替えることができる。Popper は開かれた社会の象徴をアテナイの書物市場やルネサンスの商業出版の例に求めていることを論じた。同様に、Popper の影響を強く受けている Soros および OSI は、コピー機を開かれた社会の比喻として捉え、閉ざされた社会を破壊するための道具として用いたこと、またコピー機事件と同じ構図でオープンアクセス運動にも資金を投下していることを論じた。つまり、本章では、客観的知識論を踏まえた開かれた社会の概念が、現代の学術情報流通のありかたを説明する原理となりうることを論じた。

^{lxix} “Budapest Open Access Initiative,” (Retrieved September 30, 2014,

<http://www.budapestopenaccessinitiative.org/>).

<http://www.budapestopenaccessinitiative.org/>

^l PLoS, (Retrieved December 16, 2010, <http://www.plos.org/>).

^{li} なお本章は「Budapest Open Access Initiative の思想的背景とその受容」『情報知識学会誌』Vol.21, No.3, p.333-349, 2011 を元としているが、その後、勉誠出版編集部編『DHjp04 オープンアクセスの時代』(2014)を執筆する際の追加調査で判明した部分を組み込んでいる。勉誠出版編集部の大橋様には快く許諾頂いた。

^{lii} Popper の講演録によれば、この推定の根拠としてキケロによる資料があるという。

^{liii} “Berlin Declaration on Open Access to Knowledge in the Sciences and Humanities,” (Retrieved December 16, 2010,

<http://oa.mpg.de/openaccess-berlin/berlindeclaration.html>).

^{liv} “Bethesda Statement on Open Access Publishing,” (Retrieved December 16, 2010, <http://www.earlham.edu/~peters/fos/bethesda.html>).

^{lv} Suber, Peter, “The SPARC Open Access Newsletter”.

(Retrieved December, 16, 2010, <http://www.earlham.edu/~peters/fos/>).

^{lvi} 現在でも archive.org で確認することが可能である。

^{lvii} これらのミッションは以下の通りである。(1) 公共空間のネットワークにおける技術と能力の獲得 (2) デジタル環境における市民的権利の獲得 (3) 知識へのアクセスの機会均等 である。詳細は OSF の Information Program

(<http://www.opensocietyfoundations.org/about/programs/information-program> (2014 年 12 月 25 日参照) を参照。なお前述の通り OSF は OSI の後継組織である。

^{lviii} Open Access Projects supported by the OSI Information Program as of April 2005”.

<http://www.soros.org/openaccess/grants-awarded.shtml> (2010 年 6 月 29 日参照)

^{lix} “Open Access Initiative Grantee List”. http://www.soros.org/initiatives/information/focus/access/grants/open_access (2010 年 6 月 29 日参照)

^{lx} “Bibliography of open access,” (Retrieved December 16, 2010,

http://oad.simmons.edu/oadwiki/Bibliography_of_open_access).

^{lxi} “The Effect of Open Access and Downloads ('Hits') on Citation Impact: a Bibliography of Studies,” (Retrieved December 16, 2010, <http://opcit.eprints.org/oacitation-biblio.html>)

^{lxii} 4 件の書誌事項は以下の通りである。

- Friend, F. J. 2002, “Improving access :Is there any hope?”, Interlending and Document Supply, 30 (4) : 183-189.
- Olden, Kenneth Goehl and Thomas J. 2004, “EHP moves to open access”, Environmental Health Perspectives, 112 (1) : A13-A14.
- “What is best practice for open access?”, Research Information, (Retrieved December 16, 2010, http://www.researchinformation.info/risummer02soros_open_society.html).
- Morrison, Heather, “Peter Suber: heart of the open access movement”, OA LIBRARIAN, (Retrieved December, 16, 2010, <http://oalibarian.blogspot.com/2006/12/peter-suber-heart-of-open-access.html>)

^{lxiii} Soros は Popper の思想を「再帰的」という概念を用いてさらに拡大していると主張しているため、このような単純な矢印では細かな差異を取りこぼしている可能性がある。なお、Soros の言う再帰性と図書館については (Robinson & Bawden 2001) を参照。

^{lxiv} 4.1.3 で論じたように、Popper はソクラテス流の問答法を高く評価している。しかし、ソクラテスが重視した発話をもととした問答を重視するのではなく、記録物すなわち世界 3 を通じた対話こそを重視していると捉えうる。

^{lxv} したがってオープンアクセス運動とは何か、を捉える際には、学術情報流通のみの問題に留めず、OSI が行ってきた様々な「開かれた社会」を実現する運動の一貫として、広く捉えることが必要になるともいえよう。

5 おわりに

本論文では、科学哲学者、K. R. Popper と図書館情報学のかかわりについて、とくに Popper が重要視する「記録物」の概念から述べた。

第一章では、本論文の研究の目的と意義について述べた。1980 年代に、図書館情報学は Popper の客観的知識論を導入しようとした試みがなされてきたが、1990 年代に入ると直接的な言及は行われなくなったことを指摘した。また 1980 年代と比較し、現代では、社会環境の変化によって、図書館は古くて新しい諸問題に直面していることを論じた。具体的には、図書館の蔵書の蓄積への質的保証の問題およびシリアルズ・クライシスの対抗策としてのオープンアクセス運動である。これらの新しい諸問題について、Popper の哲学の枠組みを利用して理解する必要性について論じた。

第二章では、1980 年代に行われた、図書館情報学に Popper の客観的知識論を導入しようとした試みを再検討した。1980 年代に行われた客観的知識論を図書館情報学に導入する試みは、Popper が客観的知識論のなかで主張している「相互作用」や「自律性」といった観点が抜け落ちていた。つまり図書館情報学は Popper の哲学のうち、客観的知識論のみの一部分のみを抽出して活用しようとしてきたものであったことをあきらかにした。そこで、客観的知識論と反証可能性、開かれた社会の関連を把握する作業を行った。これらから、客観的知識論との関連を踏まえつつ、Popper 哲学の他の概念、反証可能性や開かれた社会といった議論を用いることは、「記録された知識が誤っているため棄却されるということはどのようなことか」「記録された知識と我々が相互作用するということはどのようなことか」という視点に繋がり、現代の図書館情報学をとりまく状況を理解するために Popper の哲学は有益な視座を与えるものであると論じた。

具体的には、Popper 哲学のうち、反証可能性、開かれた社会、客観的知識

論の三つの概念が相互に関係しあっていることを示した。客観的知識の世界に含まれる自律性の概念は、反証可能性とかかわっており、同様に客観的知識論における相互作用は開かれた社会の概念がかかわっていることを示した。Popper 後期の概念である客観的知識論は、従来、Popper 前期の哲学から独立したもの、あるいは異質なものだといわれていたが、逆に連関が存在することを示した。同時に、Popper の客観的知識論に対して行われてきた、これまでの批判からの回避方法を、反証可能性の概念そのものから示した。

これらの作業を踏まえ「はじめに」で論じた、図書館情報学における現代の諸問題について、Popper 哲学を用いて論じた。客観的知識論の持つ棄却の特性からは反証可能性を分析視座として蔵書構成論について議論を行い、客観的知識論の持つ伝達特性から、開かれた社会をもとにオープンアクセス運動の意図について論じた。

具体的には、第三章では、Popper の反証可能性の概念を分析視座として用い、「疑似科学図書」を図書館がどう取り扱っているかという議論を行った。インタビュー調査の結果、反証可能性は、科学者コミュニティの内部等では有効に機能しそうな議論でありつつも、図書館の蔵書構成として直接的には援用は困難である点を論じた。しかし分類や、科学的知識を持つ利用者からの指摘といった形で、反証可能性が図書館の蔵書構成においても機能していることを論じた。

第四章では、現在の重要なトピックとなっているオープンアクセス運動は、Popper の「開かれた社会」の概念が、大富豪の投資家 Soros という媒介者を経てオープンアクセス運動の根底となっている点をあきらかにした。まとめると、第三章および第四章では、これまで図書館情報学では顧みられなかった、Popper の客観的知識以外にも、反証可能性や開かれた社会という概念は、現代においても、図書館情報学の問題やトピックを分析、あるいは深く読み込むために有益な視座であるということを示した。

なお各章のそれぞれの初出については以下の通りである。第一章は書きおろしである。第二章は筆者の修士論文および、「Popper 理論の情報学への適用に対する批判的検討：客観的知識の Popper 哲学内部の関連性に着目して」『社会情報学研究』Vol.13, No.2 p1-11, 2009 が元となっている。ただし修士論文を元にした部分は大幅に改稿したため原型をとどめていない。第三章は中林幸子との共著、「科学的合理性に著しく反する図書を図書館はどう取り扱っているのか：聞き取り調査を手がかりに」『Library and Information Science』No.68, p.85-116, 2012 を元としている。第四章は佐藤翔、逸村裕との共著、「Budapest Open Access Initiative の思想的背景とその受容」『情報知識学会誌』Vol.21, No.3, p333-349, 2011 が元となっている。

本論文における問題点と今後の課題および展望を述べる。

本論文は Popper 研究ではなく、図書館情報学に資するための研究として執筆されたため、Popper の哲学や生い立ち等に対しては、あえて記述を省略した。たとえば、Popper はさまざまな学者と論争を行っており、それら論争をつぶさに見ていくことで、Popper 自体の哲学を浮かび上がらせ、Popper 研究としても有意義なものになったかもしれない。また客観的知識論に対しても、それを自明のものとして取り扱い、客観的知識の世界の実在の有無については問わなかった。したがって Popper 研究としては物足りないものに留まっている可能性はある。ただし Popper 研究のなかでは記録物という観点から反証可能性や開かれた社会を捉え直す研究は管見の範囲では見当たらない。そこで、Popper の哲学には記録物による対話が通底していることを指摘した点は、Popper 研究としても新規性のあるものとする。

また本論文で扱った Popper の諸理論は、Popper 哲学のうち社会的にインパクトがあり、かつ重要であると思われるものを優先的に選択した。しかし脳科学から政治哲学にわたって幅広いフィールドで発言を行った Popper の哲学全体を網羅的に捉えているとは言いがたい。近年では、Popper の哲学に関して

は「確率の傾向性解釈」（高村 2012 ほか）に対して言及される傾向にある。また Popper 研究自体が近年では以前よりずっと盛んになってきている。少なくとも客観的知識論について、本論文で必要な文献については把握したものの、それでも網羅的な調査が行えたかは議論の余地のあるところである。傍証として、近年の Popper 研究の増加の実態を示す。Scopus にてキーワードを「Karl Popper」、検索対象を人文／社会科学に設定し、抄録やキーワード等、全項目を検索対象として行った結果（2014 年 9 月 15 日実施）が下図である。Popper の死去した 1994 年以降、文献数が飛躍的に増加している。



図 5-1 Scopus による Popper の語を含む論文生産推移

現在、Popper 研究はある種のブームを迎えつつある、あるいはもしかするとブームの黎明期であるといってもいいかもしれない。Popper 研究が隆盛を見せている現在、本研究で必要な範囲について Popper 研究の先行研究は追っ

たものの、網羅的な調査は困難であった。

また本論文で扱った Popper の哲学のうち、とくに筆者が検討を行ったものは客観的知識論のみに留まり、むしろ反証可能性や開かれた社会といった概念については、図書館情報学の扱う事象を分析する視座としていわば道具的なものとして用いた。したがって本論文では反証可能性や開かれた社会に対する検討は加えておらず、その点が十分でないという批判を受けるであろう。ただし本論文は図書館情報学に資する研究を目指しているため、あまりに Popper 研究や Popper 解釈に踏み込んでしまうのは、本論文の性質を大幅に変質させるものと考え、あえて本論文では「反証可能性」や「開かれた社会」の批判的検討については踏み込まなかった。

本論文では、1980 年代に図書館情報学で行われた Popper の哲学の導入を、現代の視点から再度捉え直した。本論文では客観的知識論、反証可能性、開かれた社会については扱ったものの、それ以外にも Popper は様々な理論を提唱しており、彼のテキストは多くの示唆に富む。今後とも Popper 哲学と図書館情報学の関係について思索を深めていきたいと考える。

【謝辞】

本稿の着想は、わたしの大学時代に遡ります。当時のわたしは、いわゆる「不本意入学」の状況でした。大学3年生のとき、大学図書館で様々な学術雑誌のバックナンバーを片っ端から漁っていて偶然出会った論文がこの研究のきっかけになりました。愛知淑徳大学の村主朋英先生の「Karl Popper の“客観的知識”概念とその情報学に対する意義」『Library and Information Science』Vol.24,1986. を読了した時の感覚はいまでも思い出せます。正直に告白すると当時はあの論文が何を言っているかさっぱりわかりませんでした。しかし何か面白いことがここには語られていて、図書館情報学は面白いことができる学問領域なのだと直感しました。

「すぐさま社会の役に立つ研究をしろ」「インパクトファクタを稼ぎ出せ」、そういった日々わたしたちに対して強まる圧力のなかで、誰のためともつかない、しかし何十年後かでいいから誰かのためになってほしいという祈りにも似た思いを抱きつつ研究を行うことは楽しいものでした。とくに図書館情報学は「実務」のためにあれという暗黙の圧力のある学問領域だからこそ、それを感じるのかもしれませんが。「哲学的」な学問の営みに近寄ることができたのは本当に幸せなことでした。「額に汗して考えぬく」、青山学院大学の入不二基義ゼミに毎週参加していた院生時代は忘れられません。先生の研究室にお招きいただいたとき、とりとめなく先生がおっしゃった「哲学は越境が得意なはず」という言葉が記憶に残っています。同じようにゼミに参加させていただいた筑波大学の仲田誠先生に感謝します。越境を旨とする筆者から、不十分とはいえ、ごくささやかな返答が出来たとしたらありがたいと思います。

第三章の調査に協力していただいた全国各地のライブラリアンに深くお礼を申し上げます。難しい勤務状況のなか、質問に答えていただいたことに深く御礼申し上げます。

第四章は同志社大学社会学部の佐藤翔先生との共同研究が元となっています。佐藤先生には公私にわたって常に刺激を受けています。いつもありがとうございます。

審査、ご指導をいただきました諸先生には深く感謝申し上げます。諸先生の精読と的確なご指摘により、大幅に内容を改善することができました。改めて深く御礼申し上げます。

産業技術総合研究所の中野倫靖氏には、大学院時代を通じて研究という行為

自体を常に問い直す機会を与えて頂きました。ゼミのリーダー的存在であった聖徳大学の片山ふみ先生からは適切かつ発展可能性のある論理展開をご教示いただきました。白百合女子大学文学部共通科目の今井福司先生、St. Louis の Washington University Library の小牧龍太氏からは議論や会話を通じて、何度も勇気づけられました。

同志社大学学習支援・教育開発センターの濱嶋幸司先生、鈴木夕佳先生には本稿執筆にあたって常にあたたく励ましていただきました。同僚に恵まれた職場のありがたさをしみじみと思います。

筑波大学の逸村裕先生、同志社大学の原田隆史先生には、講義や演習等でご指導していただいたことは全くないにもかかわらず、両先生の学恩は非常に大きなものがあります。「若い時に生意気にならなくていつ生意気になるの」と両先生から頂いた言葉は、幸運にもアカデミシヤンのポストに就いた後、わたしが学問を志す学生に直面した時の指針になっています。筑波大学の原淳之先生には、古き良き時代の大学のあり方をお会いするたびに身をもって教えていただきました。DUALIS（同志社大学図書館情報学研究会）の有志の方々、筑波大学逸村ゼミの皆様（赤山みほ氏、伊川真以氏、池内有為氏、榎本翔氏、大原司氏、大平奈美氏、下山佳那子氏、中田周育氏、西野祐子氏、Pingo Zablon Bosire 氏、前田仁氏）、同志社大学良心館ラーニング・コモンズ情報探索アシスタントである信高佳澄氏には本稿の作業においてお手伝いいただきました。

本稿の執筆に際しては、ほかにも多くの手助けをいただきました。全てを列挙することは叶いませんが、この場を借りて篤く御礼申し上げます。

最後に、これまであたたく支援してくれた両親、妹、親戚、そしてパートナーの美保子、娘の文音に感謝します。新婚旅行でドイツ近辺に行くのなら Popper の墓を見てみたいという提案に即座に OK を出すような器の大きいあなたがパートナーであることを心からありがたく思います。また日々健やかに成長し、いつでもわたしに驚きと喜びを与えてくれる娘の文音に対し感謝します。自宅に帰った時にあなたがくれる舌足らずな「とーちゃ」という言葉は、ありとあらゆる言葉のなかで、私にとって一番大事な言葉です。

【文献】

- Adorno, Theodor, W. and Sir Karl Raimund Popper, 1971, *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, Neuwied u. Berlin: Luchterhand. (=1979, 城塚登・浜井修訳『社会科学の論理：ドイツ社会学における実証主義論争』河出書房新社.)
- Akron Public Library, 1959, *Colo. Materials Selection Policy*, Akron Public Library.
- The Office for Intellectual Freedom of the American Library Association, 2010, *Intellectual freedom manual*. 8th ed. Library Association. (=2010, 川崎良孝・川崎佳代子・久野和子訳『図書館の原則：図書館における知的自由マニュアル（第8版）』日本図書館協会.)
- Anderson, A. J. 1974, *Problems in Intellectual Freedom and Censorship*, R.R. Bowker Co. (=1980, 藤野幸雄・小木曾真・武内博・松井博訳『図書館の自由と検閲：あなたはどうか考えるか』日本図書館協会.)
- Bailey, C. W. 2005, *Open Access Bibliography: Liberating Scholarly Literature with E-prints and Open Access Journals*, Association of Research Libraries.
- Bolter, J. D. 1991, *Writing space*. L. Erlbaum Associate. (=1994, 黒崎政男・下野正俊・伊古田理訳『ライティングスペース：電子テキスト時代のエクリチュール』産業図書.)
- Brookes, B. C. 1980a, "The Foundations of Information Science", *Journal of Information Science*, 2:125-133. (=1982, 岡沢和世・長田秀一・緑川信之訳, 「情報学の基礎-1-哲学的側面」『ドクメンテーション研究』32 (1) : 12-23.)
- , 1980b, "Information Space", *Canadian Journal of Information Science*, 5: 199-211.
- Bruner, Jerome, Seymour, 1987, *Actual Minds, Possible Worlds*, Harvard University Press. (=1998, 田中一彦訳『可能世界の心理』みすず書房.)
- Chartier, R. [et al.], 1997, *Histoire de la Lecture dans le Monde Occidental*, Seuil. (=2000, 田村毅〔ほか〕共訳『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』大修館書店.)
- Chitpin, Stephanie, and Evers. W. Colin. 2012, "Using Popper's Philosophy of Science to Build Pre-Service Teachers' Knowledge. *International Journal of Education*. 4 (4) :144-156.

- Danto, Arthur, Coleman, 1965, *Analytical philosophy of history*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1989, 河本英夫訳『物語としての歴史——歴史の分析哲学』国文社.)
- Davidson D. 1973, “On the Very Idea of a Conceptual Scheme”. Meiland Jack W. and Krausz Michael ed.1982, *Relativism*. University of Notre Dame Press. (=1989. 常俊宗三郎・加茂直樹・戸田省二郎訳「概念図式という観念そのものについて」『相対主義の可能性』産業図書.)
- Edmonds, D. and Eidinow, J. 2002, *Wittgenstein's Poker: The Story of a Ten-minute Argument Between Two Great Philosophers*, Faber. (=2003, 二木麻里訳『ポパーとウィトゲンシュタインとのあいだで交わされた世上名高い一〇分間の大激論の謎』筑摩書房.)
- Fiske, M. 1959, *Book Selection and Censorship: A Study of School and Public Libraries in California*, University of California Press.
- Foucault, M, 1966. *Les Mots et les Choses*, Gallimard. (=1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社.)
- Gibbons, M. [et al.], 1994, *The New Production of Knowledge*, SAGE Publications Ltd. (=1997, 小林信一訳『現代社会と知の創造——モード論とは何か』丸善.)
- Gleick, J. 2011, *The Information: A History, A Theory, A Flood*, Pantheon Books. (=2013, 楡井浩一訳『インフォメーション：情報技術の人類史』新潮社.)
- Harnad, Stevan, “Overture: The Subversive Proposal”. *Scholarly Journals at the Crossroads: A Subversive Proposal for Electronic Publishing*,
(Retrieved December 16, 2010,
<http://www.arl.org/sc/subversive/i-overture-the-subversive-proposal.shtml>) .
- Hayek, F. A. 1972, *The Road to Serfdom*, University of Chicago Press. (=1992, 西山千明訳『隷属への道』春秋社.)
- Howard, G. 2005, “Pseudoscience and selection”, *Collection Management*, 29 (2) : 41-52.
- Ingwersen, P. 1992, *Information Retrieval Interaction*, Taylor Graham. (=1995, 細野公男他訳『情報検索研究— 認知的アプローチ』トッパン.)

- Kaufman, Michael T. 2003, Soros. (=2004, 金子宣子訳『ソロス』ダイヤモンド社.)
- Kuhn, T.S. 1962, The Structure of Scientific Revolutions, University of Chicago Press. (=1971, 中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房.)
- , 1977, The Essential Tension, University of Chicago Press Chicago. (=1998, 安孫子誠也・佐野正博訳『科学革命における本質的緊張——トーマス・クーン論文集』みすず書房.)
- Lakatos, Imre, 1980, The Methodology of Scientific Research Programmes vol.1, Cambridge: Cambridge University Press. (=1986, 村上陽一郎 [ほか]訳『方法の擁護——科学的研究プログラムの方法論』新曜社.)
- Lessig, Lawrence, 2001, The Future of Ideas: the Fate of the Commons in a Connected World, New York : Random House. (=2002, 山形浩生訳『コモンズ——ネット上の所有権強化は技術革新を殺す』翔泳社.)
- Magee, B. 1985, Philosophy and the Real World: An Introduction to Karl Popper, Open Court. (=2001, 立花希一訳『哲学と現実世界——カール・ポパー入門』恒星社厚生閣.)
- Meiland Jack W. and Krausz Michael ed. 1982, Relativism. University of Notre Dame Press. (=1989, 常俊宗三郎・加茂直樹・戸田省二郎訳『相対主義の可能性』産業図書.)
- Ong, W. J. 1982, Orality and Literacy: the Technologizing of the Word, methuen & Co. Ltd. (=1991, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店.)
- O'Sullivan and Michael K; O'Sullivan, Connie J. 2007, "Selection or censorship: libraries and the intelligent design debate", Library Review, 56: 200-207.
- Plato, n.d. $\text{Ἀπολογία Σωκράτους}$, (=1992. 久保勉訳『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波書店.)
- Popper, Karl, R. 1936, The Poverty of Historicism, (=1961, 久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困——社会科学の方法と実践』中央公論社.)
- , 1950, The Open Society and Its Enemies, Princeton University Press. (=1980a, 内田詔夫・小河原誠訳『開かれた社会とその敵 第1部』未来社., 1980b, 内田詔夫・小河原誠訳『開かれた社会とその敵 第2部』未来社.)
- , 1963, Conjectures and Refutations : the Growth of Scientific Knowledge, (=

- 2009, 藤本隆志・石垣壽郎・森博訳『推測と反駁——科学的知識の発展』法政大学出版局.)
- , 1968, The logic of scientific discovery, Harper torchbooks. (=1971b, 大内義一・森博訳『科学的発見の論理 上』恒星社厚生閣. 1972a, 大内義一・森博訳『科学的発見の論理 下』恒星社厚生閣.)
- , 1972, Objective Knowledge : an Evolutionary Approach, (=1974, 森博訳『客観的知識——進化論的アプローチ』木鐸社.)
- , 1976, Unended Quest, an Intellectual Autobiography, (=2004a, 森博訳『果てしなき探求——知的自伝 上』岩波書店. , =2004b, 森博訳『果てしなき探求——知的自伝 下』岩波書店.)
- , John C. Eccles, 1977, The Self and Its Brain, New York:Springer International. (=2005, 大村裕・西脇与作・沢田允茂訳『自我と脳』新思索社.)
- , 1991, The Open Universe : an Argument for Indeterminism, Routledge. (=1999, 小河原誠・蔭山泰之訳『開かれた宇宙——非決定論の擁護——W・W・バートリー三世編『科学的発見の論理へのポストスクリプト』より』岩波書店.)
- , 1982, Quantum Theory and the Schism in Physics, (=2003, 小河原誠・蔭山泰之・篠崎研二訳『量子論と物理学の分裂——W・W・バートリー三世編『科学的発見の論理へのポストスクリプト』より』岩波書店.)
- , William W. Bartley, 1983, Realism and the Aim of Science, Totowa, N.J: Rowman and Littlefield. (=2002, 小河原 誠・蔭山 泰之・篠崎 研二訳『實在論と科学の目的——W.W.バートリー三世編『科学的発見の論理へのポストスクリプト』より』岩波書店.)
- , Kreuzer Franz, 1984, Offene Gesellschaft-Offenes Universum : ein Gespräch über das Lebenswerk des Philosophen, (=1992, 小河原 誠訳『開かれた社会--開かれた宇宙——哲学者のライフワークについての対話』未来社.)
- , 1984, Auf der Suche nach einer besseren Welt : Vorträge und Aufsätze aus dreißig Jahren, (=1995, 小河原誠・蔭山泰之訳『よりよき世界を求めて』未来社.)
- , 1994, 河上倫逸訳「ヨーロッパ文化の起源—その文学的および科学的根源」長尾龍一・河上倫逸編『開かれた社会の哲学—カール・ポパーと現代』未来社.
- , Mark A. Notturmo, 1994, The Myth of the Framework : in Defence of Science

- and Rationality, London ; New York : Routledge. (=1998, ポパー哲学研究会訳『フレームワークの神話：科学と合理性の擁護』未来社.)
- ,1998, A World of Propensities, Thoemmes. (=1998, 田島裕訳『確定性の世界』信山社出版.)
- Poynder, Richard: “Interview with Melissa Hagemann of the Open Society Institute’. Open and Shut?”, (Retrieved Decemer, 16, 2010, <http://poynder.blogspot.com/2005/06/interview-with-melissa-hagemann-of.html>) .
- Libraries and open society: Popper, Soros and digital information
By: Robinson, Lyn; Bawden, David. Aslib Proceedings, May 2001, Vol. 53 Issue 5, p167-178, 12p
- Robinson, Lyn; Bawden, David. 2001, "Libraries and open society: Popper, Soros and digital information". Aslib Proceedings, 53(5):167-178.
- Rorty, Richard,1982. Consequences of Pragmatism : Essays, 1972-1980, University of Minnesota Press. (=2014, 室井尚訳『プラグマティズムの帰結』筑摩書房.)
- Rudd, D. 1983, "Do we really need World III?: Information Science with or without Popper.Journal of Information Science", Journal of Information Science, 7: 99-105.
- Samek, Toni, 2001. Intellectual freedom and social responsibility in American librarianship, 1967-1974, (=2003, 川崎良孝・坂上未希訳『図書館の目的をめぐる路線論争——アメリカ図書館界における知的自由と社会的責任：1967-1974年』京都大学図書館情報学研究会；日本図書館協会（発売）.)
- Stielow, F. J. 1983, “Censorship in the Early Professionalization of American Libraries, 1876 to 1929”, The Journal of Library History, 18 (1) : 37-54.
- Soros, George, 2006, The Age of Fallibility, 1st ed., Public Affairs. (=2006, 越智道雄訳『世界秩序の崩壊：「自分さえよければ社会」への警鐘』講談社.)
- Suber, Peter, “Open Access News: News from the open access movement,” (Retrieved December, 16, 2010, <http://www.earlham.edu/~peters/fos/fosblog.html>) .
- Wiegand, Shirley A. 1996, “Reality bites: The collision of rhetoric, rights, and reality and the library bill of rights”,Library Trends. 45 (1) : 75-86.

- 青木英実, 2006, 「「教育科学」の幻想（その1）：現代科学哲学とポパーの批判的合理主義における「科学的法則」に関する議論を踏まえて」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』38: 1-10.
- 朝比奈大作, 2006, 「日本図書館情報学会研究委員会編, 『学校図書館メディアセンター論の構築に向けて: 学校図書館の理論と実践』, 勉誠出版, 2005, 233p.」『日本図書館情報学会誌』52 (3) , 190-191.
- 天羽優子, 2011-11-4, Twitter/@apj. (Retrieved November 5, 2011, <https://twitter.com/#!/apj/status/132304208648089600>).
- 飯高敏和, 2007, 「日本的相互依存性のオープンソース・ソフトウェアに対する影響について」『情報メディア研究』6 (1) : 1-17.
- 伊勢田哲治, 2003, 『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会.
- , 2006, 「カール・ポパーの生い立ちと哲学」(2008年10月21日取得, http://ocw.nagoya-u.jp/files/45/sp_note03.pdf).
- , 2010, 「認識論的問題としてのモード2——科学と科学コミュニケーション」『科学哲学』43 (2) : 1-17.
- , 2011, 「疑似科学をめぐる科学者の倫理」『社会と倫理』(25) : 101-119.
- 伊藤昭治・山本昭和, 1992, 『本をどう選ぶか——公立図書館の蔵書構成』日本図書館研究会.
- 入不二基義, 2009, 『相対主義の極北』筑摩書房.
- 植木哲也, 2002, 「開かれた哲学が排除するもの」『批判的合理主義 第2巻——応用的諸問題』未来社.
- 浦上博達, 1990. “経済学における三つの世界”『城西大学経済経営紀要』10 (1) , 43-64.
- 上田修一・倉田敬子編, 2013, 『図書館情報学』勁草書房.
- 内田麻理香, 2010, 『科学との正しい付き合い方：疑うことから始めよう』ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 大場博幸, 2004, 「暗黙の選択基準——市町村立図書館における新聞・雑誌所蔵」『Library and Information Science』(52) : 43-86.

萩原能久, 2000, 「日本におけるポパー政治哲学受容の一側面」 小河原誠編『批判と挑戦——ポパー哲学の継承と発展にむけて』 未来社.

蔭山泰之, 1997, 「エンジニアリングにおける客観主義」『Popper letter's』 9 (2)
<http://fs1.law.keio.ac.jp/~popper/plindex-j.html> 取得日

———, 2000, 「反証可能性の理論」 小河原誠編『批判と挑戦——ポパー哲学の継承と発展にむけて』 未来社.

———, 2000, 『批判的合理主義の思想』 未来社.

柏木 美穂, 1995, 「Brookes の《基本方程式》と「情報」概念」『Library and Information Science』 33: 1-18.

片山ふみ, 2013, 『児童書出版社の価値志向と利益志向：日本における児童書専門出版社の図書出版活動に着目して』 筑波大学博士論文.

角家文雄, 1977, 『日本近代図書館史』 学陽書房.

河井弘志, 1987, 『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』 日本図書館協会.

———, 1992, 『蔵書構成と図書選択』 日本図書館協会.

川崎良孝, 1988, 「図書選択論史と図書館史の接点： 河井弘志「アメリカにおける図書選択論の学説史的研究」（日本図書館協会, 1987）を読んで」『図書館学会年報』 34 (4) : 145-156.

———, 1996 『図書館の自由とは何か——アメリカの事例と実践』 教育史料出版会.

鬼界彰夫, 2003, 『ウィトゲンシュタインはこう考えた——哲学的思考の全軌跡 1912-1951』 講談社.

菊池誠, 「ニセ科学入門」 (2007 年 1 月 7 日取得,
http://www.cp.cmc.osaka-u.ac.jp/~kikuchi/nisekagaku/nisekagaku_nyumon.html).

北澤京子・石井保志, 2006, 「価値観の交差点——患者・家族への情報提供を模索する——多職種協働による健康・医療情報の社会提言」『情報の科学と技術』 56 (9) : 406-411.

- 川本隆史, 2005, 『ロールズ：正義の原理』講談社.
- 倉田敬子, 2006, 「機関リポジトリとは何か」『MediaNet』(13)：14-17.
- , 2007, 「学術情報とオープンアクセス」, 勁草書房, 2007.
- 健康情報棚プロジェクト, 2005, 『からだと病気の情報をさがす・届ける』読書工房.
- 国立教育研究所第一研究部教育史料調査室編, 1979, 『教育史資料1 学事諮問会と文部省示諭』
国立教育研究所.
- 須藤靖・伊勢田哲治, 2013, 『科学を語るとはどのようなことか』河出書房新社.
- 高坂健次・厚東洋輔編, 1998, 『講座社会学1 理論と方法』東京大学出版会.
- 小河原誠, 1993, 『討論的理性批判の冒険—ポパー哲学の新展開』未来社.
- , 1994, 「開かれた社会と批判的合理主義」長尾龍一・河上倫逸編『開かれた社会の
哲学——カール・ポパーと現代』未来社.
- , 1997, 『ポパー——批判的合理主義 現代思想の冒険者たち14』講談社.
- , 1998, 「ポパーの科学哲学 — 誤解を種にして」『パリティ』13 (6)：4-8.
- 編, 2000, 『批判と挑戦——ポパー哲学の継承と発展にむけて』未来社.
- 小林傳司, 2000, 「日本におけるポパー哲学受容の一形態」『批判と挑戦』未来社,
- 酒井剛, 2009, 「オープンアクセス・イニシアチブ——ロシアの図書館の現在と未来を象徴するもの」『情報管理』52 (4)：241-245.
- 佐倉統, 2011, 『科学の横道——サイエンス・マインドを探る12の対話』中央公論新社.
- 塩見昇, 1989, 『知的自由と図書館』青木書店.
- 須藤靖・伊勢田哲治, 2013, 『科学を語るとはどのようなことか——科学者、哲学者にモノ申す』
河出書房新社.
- 関雅美, 1990, 『ポパーの科学論と社会論』勁草書房.

- 高島弘文, 1974, 『カール=ポパーの哲学』東京大学出版会]
- 高村友也, 2012, 「Popper の傾向性概念の変遷について : 長期と単発の傾向説」『批判的合理主義研究』4 (1) : 1-10.
- 竹内比呂也, 2014, 「大学図書館は変わり続けることができるのか」『大学図書館研究』100:3-10.
- 田畑暁生, 1999, 「情報の反意語は何か? —反意語から捉える情報概念の構造」『社会情報学研究』(3) : 91-99.
- 田辺直行・新津尚子, 2014 「科学コミュニケーションの場としての公共図書館」『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 the Basis』4: 185-196.
- 田村貴紀, 2007, 『日本のインターネットにおける自己物語的コミュニケーションと意味空間』筑波大学博士論文.
- 団藤重光, 1994, 「ポパー博士との出会い——間主体性のひとつの場面」『Popper Letters』6 (2).
- 東條文規, 2006, 『図書館の政治学』青弓社.
- 時実象一, 2004, 「オープンアクセスの動向」『情報管理』47 (9) : 616-624.
- 長尾龍一・河上倫逸編, 1994, 『開かれた社会の哲学——カール・ポパーと現代』未来社.
- 西垣通, 2004, 『基礎情報学——生命から社会へ』NTT 出版.
- 日本図書館学会研究委員会編, 1989, 『現代の図書選択理論』日外アソシエーツ; 紀伊国屋書店 (発売).
- 日本図書館協会, 1963, 『中小都市における公共図書館の運営——中小公共図書館運営基準委員会報告』日本図書館協会.
- 編, 1970, 『市民の図書館』日本図書館協会.
- , 「図書館の自由に関する宣言」(2011 年 11 月 3 日取得,
<http://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/232/Default.aspx>).
- 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会, 2000, 『表現の自由と「図書館の自由」』日

本図書館協会.

———編, 1997, 『図書館の自由に関する事例 33 選』 日本図書館協会.

日本図書館協会図書館の自由委員会, 2004, 『図書館の自由に関する宣言 1979 年改訂』 日本図書館協会.

———編, 2006, 『図書館の自由ニューズレター集成』 日本図書館協会.

———, 2008, 『図書館の自由に関する事例集』 日本図書館協会.

———編, 2009, 『図書館の自由ニューズレター集成 2』 日本図書館協会.

根本彰, 1989, 「選択か? 検閲か? — アメリカ公共図書館における最近の議論の検討」 日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会編『収集方針と図書館の自由』 日本図書館協会.

———, 1994, 「選書について——要求論の論理を展開するために」『ず・ぼん』(1): 120-127.

———, 2011, 『理想の図書館とは何か——知の公共性をめぐって』 ミネルヴァ書房.

———編, 2013, 『図書館情報学基礎 1』 東京大学出版会.

野家啓一, 1998, 『クーン：パラダイム——現代思想の冒険者たち』 講談社.

———, 2007, 『歴史を哲学する』 岩波書店.

橋本努 1992, 「ポパーの学習論と世界 4 論」『Popper Letters』(4) 1.

———, 1994, 『自由の論法—ポパー・ミーゼス・ハイエク』 創文社

———, 2000, 「ジョージ・ソロス——投資と慈善が世界を開く」『インタ-コミュニケーション』9 (1): 160-176.

濱野智史, 2008, 『アーキテクチャの生態系—— 情報環境はいかに設計されてきたか』 NTT 出版.

ポパー哲学研究会編, 2001, 『批判的合理主義 第一巻』 未来社.

———, 2002, 『批判的合理主義 第二巻』 未来社.

堀内壽夫・西之園晴夫, 1996, 「学習指導技術の客観的知識化の方法開発とその適用 : カール・ポパーの枠組みに依拠した中学校社会科授業研究を通して」『日本教育工学雑誌』 20 (1) , 49-61.

松林正己, 2005, 「情報哲学 (the Philosophy of Information) の誕生:図書館情報学理論研究における新たな動向」『カレントアウェアネス』 283: 18-21.

三浦逸雄・根本彰・岩猿敏生・長澤雅男・丸山昭二郎, 1993, 『コレクションの形成と管理』 雄山閣出版.

武者小路澄子, 2004, 「図書館・情報学諸領域における「知識」の位置付け」『Library and information science』 52:1-42.

村主朋英, 1986, 「Karl Popper の“客観的知識”概念とその情報学に対する意義」『Library and Information Science』 24: 1-10.

———, 1995, 「情報史の枠組みと方法論」『Journal of Library and Information Science』 32: 43-64.

———, 1997, 「情報学における情報空間の概念」『Journal of Library and Information Science』 10: 55-65.

安井一徳, 2006, 『図書館は本をどう選ぶか』 勁草書房.

———, 2010, 「CA1734— 研究文献レビュー—蔵書構成」(2011 年 11 月 3 日取得, <http://current.ndl.go.jp/ca1734>).

柳与志夫, 2010, 『千代田図書館とは何か—新しい公共空間の形成』 ポット出版.

山下信庸, 1983, 『図書館の自由と中立性』 鹿島出版会.

山本昭和, 2010, 「図書館資料の収集と選択—公立図書館蔵書構成論の理論的発展」『図書館界』 61 (5) : 512-518.

山脇直司, 1994, 「後期ポパー思想の特質と可能性—批判的合理主義を越えて」長尾竜一・河上倫逸編 『開かれた社会の哲学—カール・ポパーと現代』 未来社.

渡辺重夫, 1989, 『図書館の自由と知る権利』 青弓社.

———. 1996, 『図書館の自由を考える』 青弓社.

【全研究業績リスト】

①査読制度のある学術雑誌

- (1) 岡部晋典, 「Popper 理論の情報学への適用に対する批判的検討ー客観的知識の Popper 哲学内部の関連性に着目してー」, 社会情報学研究, Vol. 13 No.2, 2009, pp. 1-12.
- (2) 岡部晋典, 佐藤翔, 逸村裕, 「Budapest Open Access Initiative の思想的背景とその受容」, 情報知識学会誌, Vol. 21 No. 3, 2011, pp. 333-349.
- (3) 今井福司, 岡部晋典, 「Twitter を用いた大学間授業実践」, 情報の科学と技術, Vol. 61 No. 9, 2011, pp. 368-373.
- (4) 岡部晋典, 中林幸子, 「科学的合理性に著しく反する図書を図書館はどう取り扱っているのか:聞き取り調査を手がかりに」, Library and Information Science, No. 68. 2012, pp.85-116.

②査読制度のある国際会議

- (1) Ryuta Komaki, Fukuji Imai and Yukinori Okabe, “Expatriate Japanese Families as Unexpected Users of Public Libraries: A Case Study in a College Town Community in the United States”, Poster presentation at Library Research Seminar VI, University of Illinois at Urbana-Champaign, Urbana, Illinois U.S.A. Oct 2014.

③著書

- (1) 図書館情報リテラシー研究会編, 図書館情報リテラシー教本, 筑波大学図書館情報メディア研究科図書館情報リテラシー研究会, 2007, 270p.
- (2) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会, 図書館情報学用語辞典第4版, 丸善, 2013, 284p.
- (3) 岡部晋典, 「オープンアクセスのスタートアップと現在ー開かれた文献とその敵」 pp. 25-30, 勉誠出版編集部編, DHjp No.4, 勉誠出版, 2014, 96p.
- (4) 岡部晋典, 「7章 e-ラーニングとラーニング・コモンズ」 pp.231-265, 河島茂生編著, デジタルの際, 聖学院大学出版会, 2014, 353p.
- (5) 岡部晋典, 原田隆史, 「1章 情報倫理とは」 pp.1-18, 高橋慈子・原田隆史・佐藤翔・岡部晋典, 情報倫理〜ネット時代のソーシャルリテラシー, 技術評論社, 2014, 176p.
- (6) 岡部晋典, 「11章 科学技術と倫理」 pp.133-146, 高橋慈子・原田隆史・佐藤翔・岡部晋典, 情報倫理〜ネット時代のソーシャルリテラシー, 技術評論社, 2014, 176p.

④その他

(ア) 投稿中の未公表の査読付き論文
該当なし

(イ) 査読のない論文

- (1) 岡部晋典,「錆びはじめてきた、図書館の伝家の宝刀を研ぐことは可能か」, リポート笠間, Vol. 53, 2012, pp. 57-61.
- (2) 岡部晋典,「知っておきたい個人情報のコントロール : 博物館学芸員課程受講生を対象として」, Musa 博物館学芸員課程年報, No. 27, 2013, pp. 1-5.
- (3) 今井福司, 岡部晋典,「Twitterによる学修支援(1)」, 文部科学教育通信, No. 334, 2014, pp. 28-29.
- (4) 今井福司, 岡部晋典,「Twitterによる学修支援(2)」, 文部科学教育通信, No. 335, 2014, pp. 30-31.
- (5) 岡部晋典, 鈴木夕佳,「同志社良心館ラーニング・コモンズ揺籃期の一年 : アカデミック・インストラクターの視座を通して」, 同志社大学図書館学年報, No. 39, 2014, pp. 69-77.

(ウ) 口頭発表

- (1) 岡部晋典,「Popper 理論の情報学への適用に対する批判的検討 ―反証可能性と客観的知識の関連性に着目して―」, 情報メディア学会第6回研究大会 2007 年 6 月, 口頭発表。
- (2) Yukinori OKABE, "Can "self" live in the Infosphere? :Consideration with soft Solipsism", ReGIS (Research Group on the Information Society) -FH Stuttgart (HdM) Joint-Workshop in Tsukuba, Oct 2007.
- (3) 岡部晋典, 佐藤翔,「Budapest Open Access Initiative の思想的背景と受容」, 情報メディア学会第8回研究大会, 2009 年 6 月, 口頭発表。
- (4) Yukinori OKABE, Sei MATSUEDA, "The Anime or The Robotics: Seeking Image of Robots Through From Scholarly Information to Subculture", ReGIS x Cybernetics x STI-IE Joint-Workshop on ETHICS ROBOTICS, Oct 2009.
- (5) 松枝世, 岡部晋典,「論文生産量にみる日本のロボット研究の潮流」, 日本社会情報学会 (JASI&JSIS) チュートリアル&第3回大学院生研究発表大会, 2009 年 11 月, 口頭発表。
- (6) 木下朋美, 岡部晋典,「公共図書館の選書における事前選定の実態分析 ～図書館流通センターとの関係を通して～」, 情報メディア学会第9回研究大会, 2010 年 7 月, 口頭発表。
- (7) 岡部晋典, 福島幸宏, 村田良治, 後藤真,「小特集 人文科学とコンピュータ研究を支える資料を考える-MLA の立場から-」, 人文科学とコンピュータ研究会, 2011 年 1 月, 口頭発表。
- (8) 川上一貴, 岡部晋典, 鈴木誠一郎,「Web 上の地域映像アーカイブの調査と検証 : デジタルアーカイブズの持続性に着目して」, 情報知識学会研究大会, 2011 年 5 月, 口頭発表。
- (9) 岡部晋典,「これからの公共図書館の存在意義を考える第一回 一次世代に向けたサービス」, 京都府図書館等連絡協議会, 2012 年 12 月, 口頭発表。

- (10) 平山陽菜, 佐藤翔, 山下聡子, 岡部晋典, 「図書館における非正規職員の意識調査：直営/指定管理の異動を軸としたインタビューを通じて」, 情報メディア学会第11回研究大会, 2012年7月, 口頭発表。
- (11) 岡部晋典, 「図書館の自由の「理念」と「現実」?」, 連続セミナー「みんなでつくる・ネットワーク時代の図書館の自由」, 2013年4月, 口頭発表。
- (12) 小牧龍太, 今井福司, 岡部晋典, 「在外日本人の読書行動－アメリカ中西部の大学町を例にして」, 情報メディア学会第12回研究大会, 2013年6月, 口頭発表。
- (13) 岡部晋典, 「同志社ラーニング・コモンズはどのような要請のもとで何を目指し何を行なっているのか」, 第22回京都図書館大会, 2013年8月, 口頭発表。
- (14) 岡部晋典, 鈴木夕佳, 野末俊比古, 「図書館員のための ICT 活用／アクティブラーニング体験講座：“学び合い場”を創り出すために」, 第15回図書館総合展・学術情報オープンサミット, 2013年10月, 口頭発表。
- (15) 岡部晋典, 鈴木夕佳, 野末俊比古, 「教育・学習支援に取り組む図書館員に今、求められるもの～事例から探る“教育・学習センター”としての図書館の未来像～」, 第15回図書館総合展・学術情報オープンサミット, 2013年10月, 口頭発表。
- (16) 岡部晋典, 「レファレンス協同データベースと高等教育：ラーニング・コモンズ及び図書館司書課程での活用を通じて」, 第10回レファレンス協同データベース事業フォーラム, 2014年2月, 口頭発表。
- (17) 鈴木夕佳, 岡部晋典, 「同志社ラーニング・コモンズの統計から見た学習支援の内容と傾向」, 大学教育研究フォーラム, 2014年3月, 口頭発表。
- (18) 岡部晋典, 「ラーニング・コモンズって何?－新しい学びの場」, 佐賀県立図書館協議会, 2014年3月, 口頭発表。
- (19) 岡部晋典, 「図書館の次世代に向けたサービスについて～ラーニング・コモンズの発想、思想から～」, 福井県立福井県図書館協会研修会, 2014年3月, 口頭発表。
- (20) 岡部晋典, 鈴木夕佳, 浜島幸司, 「同志社良心館ラーニング・コモンズのエスノグラフィ」, 京都情報図書館学学習会, 2014年5月, 口頭発表。
- (21) 岡部晋典, 「ラーニング・コモンズとこれからの学習支援」 阪南大学スチューデントコモンズオープニングセレモニー基調講演, 2014年10月, 口頭発表。
- (22) 岡部晋典, 鈴木夕佳, 浜島幸司, 「同志社大学良心館ラーニング・コモンズの目的と実際の運用」, 郡山女子大学図書館研修会, 2014年11月, 口頭発表。